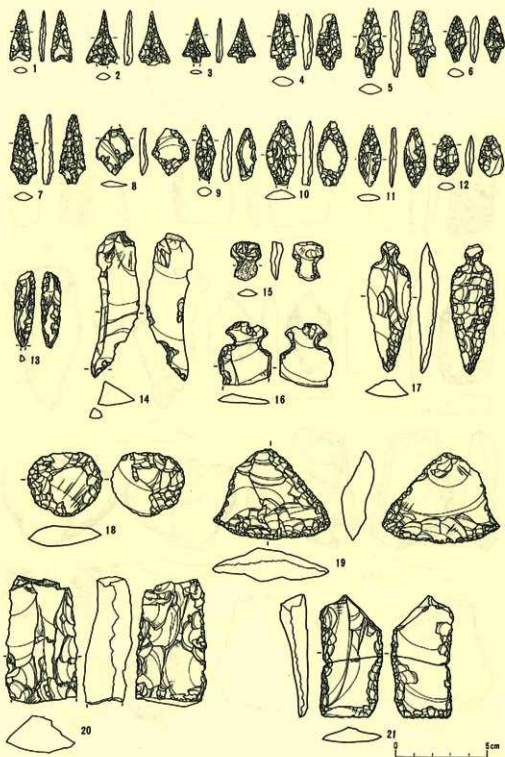
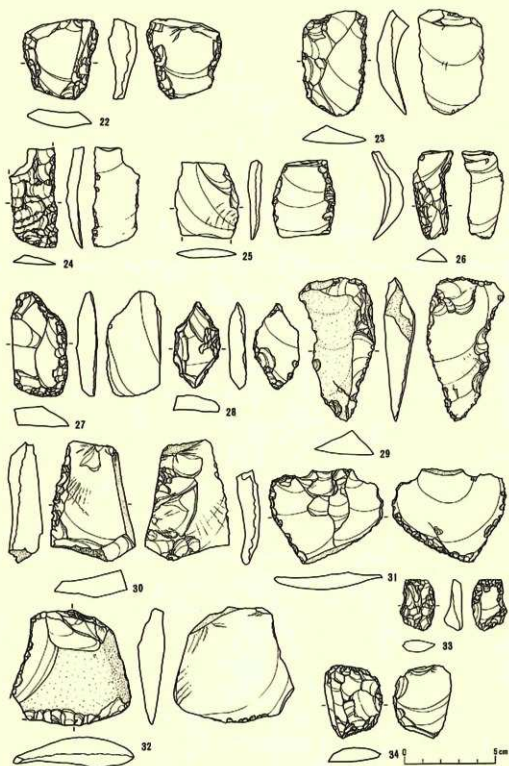
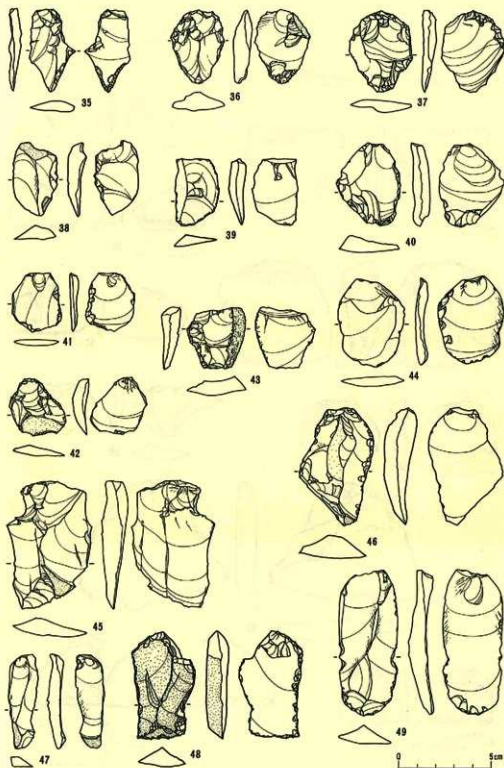




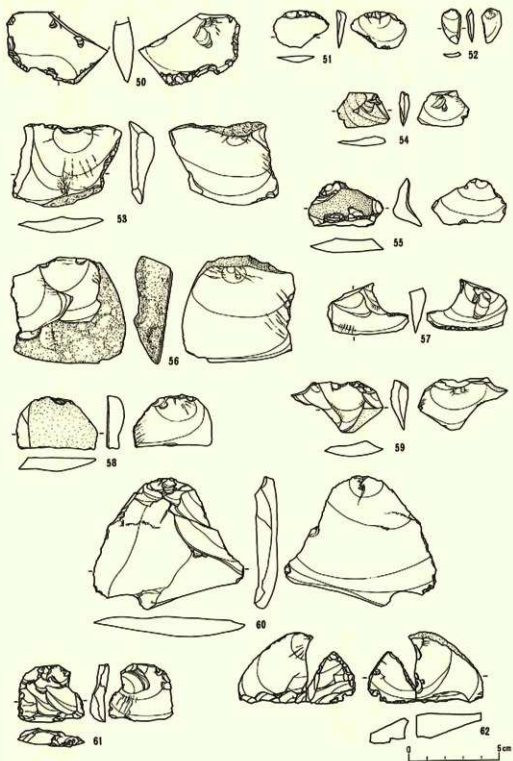
図VI-18 I層出土の石器(1)



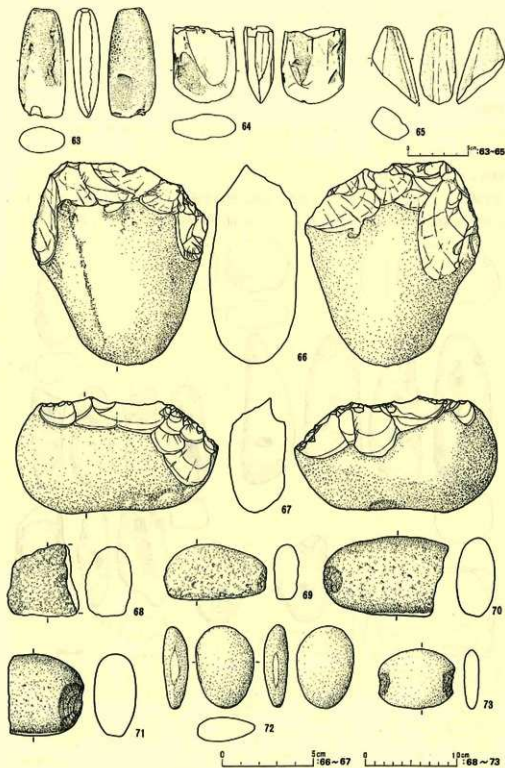
図VI-19 I層出土の石器(2)



図VI-20 I層出土の石器(3)



図VI-21 I層出土の石器(4)



図VI-22 I層出土の石器(5)

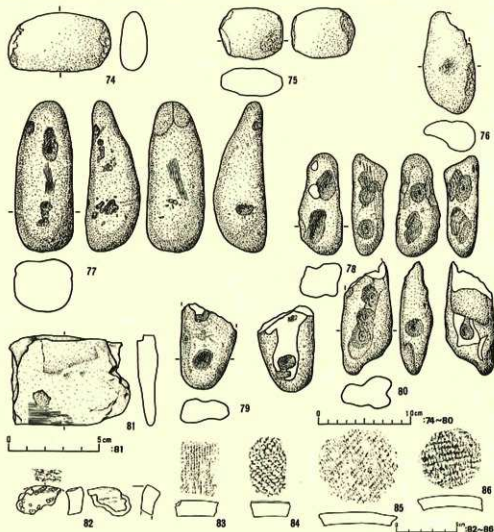
その中から比較的欠損の少ないものを図化している。52は最も小さなもので、51・54も小さなものである。F・H両地区から小剥片の剝離過程を示す接合資料が得られており、それらの小剥片の利用法に関連する資料である。35～49は縦長剥片を、50～60は横長剥片を利用している。61・62は、破損した面に微細剝離の認められるものである。35には尖頭部が作り出されている。

磨製石斧（63～65）

63には、ベッキングによる成・整形が認められる。65は大形の石斧基部と思われるもので、擦切の痕跡が残っている。

礫器もしくはコア（66・67）

自然礫の一边を荒く打欠いたものである。刃部に磨滅や潰れは認められない。コアとすれば、図左面の剝離面が右面の剝離の打面となっている。66は両面が黒ずんでおり、熱を受けている



図VI-23 I・Ⅲ層出土の石器・土製品

と思われる。

すり石 (68~72)

68はいたみが激しく、滑らかな擦面を残していないが、形状からここに含めた。69~71は長軸両端に打欠きの認められるものである。72は両側縁にすり跡、下端に敲打痕が認められる。

たたき石 (74・75)

棒状礫、または円礫の両端を使用したものである。

くぼみ石 (76~80)

76は1箇所に、77~81は数箇所にくぼみをもつものである。77の側縁には指かけ様のくぼみがあり、表面のところどころには細かなすり跡が残っている。

石錘 (73)

長軸両端に打欠きのあるもので、側縁にわずかなすり跡が認められる。

石鋸 (81)

使用部の断面はやや厚みがあり、U字形を呈している。試みに図VI-16-10・11の擦切跡に当ててみたところ、残存していた溝にはいりきらなかった。

その他の石器

特に図化していない石器では、コアと台石とがある。前者には、粗割された楕円礫や残核状のものが多く、明確な剥片採取過程を読みとれる資料ではない。後者はいずれも破片であり、一面に平坦な部分が認められる。

6) 土製品

83・85がⅠ層出土、82・84・86がⅢ層出土のものである。82は、円盤状を呈する土製品の破片と思われるが、Ⅳ群A₁類土器の口縁部の可能性もある。83~86は土器片を利用したもので、82はⅡ群B₂類、84~86はⅣ群A₁類である。83の左縁には擦切跡が残っている。84~86は打欠きによって短冊形、または円盤形に整形され、いずれの内面も滑らかな状態である。84には低い隆帯が認められる。

7) 自然遺物

炭化したクルミの堅果部分が出土している。P-31・34区のⅢ層から、それぞれ1点ずつ得られたもので、小片化している。

4. まとめ

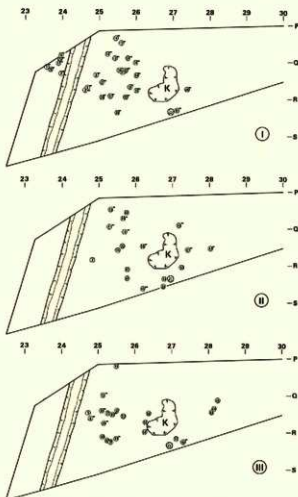
1) 遺構について

検出された遺構には、縄文時代前期のビット(1)と小ビット(75)、及び焼土跡(10)がある。

ビットは下部に木炭が認められる他は、焼土がつまっていた。類例を調べていないが、炉と同様の性格を有するものと思われる。ビット上部や周辺にはII群 B₂ 類の土器片が散らばっていた。土器は掘りこみが確認される前から出土しており、ビット部分のみ、土器の見出されない状態でもなかった。このことからビットの使用と土器片の散乱とが同時に行われた訳ではなく、ビット内の焼土が形成された後、上部に土器が散らばったと判断される。遺構周辺は、土層の残存状態からやや窪んだ状態であったと思われる。あるいはこのビットは、明瞭な掘り込みをもたない住居遺構の炉であるかもしれない。

小ビットには発掘区西側で多数検出されたものと、東側で点在する状況で検出されたものがある。後者は、P-30・31区のIII層から面的な状態で出土したIV群A類土器に関連づけられるかもしれないが、まとまりや性格は不明確である。ここでは、多数検出された西側のものについて考えてみたい。

西側で検出された68個の小ビットは、深さによりI・II・IIIの3つのタイプに分けている。便宜的な分類であるが、2・遺構のところで触れたように、タイプごとに傾向の違いが認められる。また、分布にも違いが見出されるようである。図VI-24がタイプ別小ビットの分布図である。数字の横に黒点のあるものは断面形状の明瞭なもので、タイプIはすべて、タイプIIでは約半数、タイプIIIでは約35%のものがこれにあたる。タイプIは、R-26を東南端として西側にのびる楕円の中に大半のものがおさまる。タイプIIは、攪乱跡周辺とP・Q-25区にまとまりがある。タイプIIIは、Q-25区にその



図VI-24 小ビット配置図

多くが集まっている。さらに、タイプII・IIIを断面の明瞭なものでみると、前者はHP-1とQ-24を結ぶ線の北側に、後者は線の南側に位置している。このHP-1とQ-24を結ぶ線は、楕円形に広がるタイプIの中央部を通っている。削平の度合もあろうが、小ビット全体をみてもこの線にそって検出されている。このような分布状態から、これらの小ビットにはタイプ別、あるいはタイプを超えたまとまりを窺う事が出来そうである。

時期では、確認状況、遺物の出土状況、小ビット相互の共通性から、その多くが縄文時代のものである可能性が高いと思われる。確認はV～VI層にかけてであり、新しいものであればIII層下面の段階で確認されたであろう。また、覆土上位が遺構外V層となじんだ状態になっているものもある。16(図VI-3、図版VI-3-6)のように、I層が窪んだ状態を呈するものは新しい可能性をもつが、図版VI-5・6のIII層を明瞭に切る新しいと思われる小ビットとは覆土の状態が異なるようである。排水管の埋設部分には、II層の火山灰がはいっている。遺物では、不確定であるが、小ビット部分に沈んだ状態になっていたと思われるものがある。II群B₂類とIV群A₁類であり、ビット内から得られている土器もこの両者である。P～S-23～27区のI層から出土した土器のうち、II群B₂類、IV群A₁類、IV群A₂類の割合は14%、40%、34%である。I層の性質にもよるが、新しいものであれば、確率的にはIV群A₂類の出土があってもよいはずである。これらの事から、今回検出された小ビットを新しいものとは考えがたく、焼土、周辺の遺物と関連づけるもII群B₂類期、縄文時代前期後葉のものと思われる。

頻例には、隣接するB地区のものと建川2遺跡のものとがある。前者とは、“円筒状のものは、一般に深い”傾向をもつ点で共通する。ただし、本地区では明らかに斜めに傾くものは確認されていない。違いとしては、B地区のものは遺構・遺物の多いところで検出されている事、遺構との関連から縄文時代後期の所産と思われる事等が挙げられる。B地区に浅いものの多い事は、時期に基づく掘り込み面の高さの違いかもしれない。建川2では、小ビット群のあるところからの遺物の出土が少ない。削平の度合に差はあるが、このあり方は本地区と似ている。形状では建川2のものは浅く、碗状のものが多く、本地区東側の小ビットd～gに類似している。その他、時期的に近い可能性があるBH-3と5の柱穴の中に、本地区のタイプIにみられる細く深いものが認められる。

本地区で検出された小ビットといくつかの頻例をみてきた。現時点では、これらの小ビットは大きく2つに分けられそうである。

A：本地区のタイプIに相当するもので、断面形は円筒状を呈するものが多い。覆土の状態では、単一な土で占められるものと、上位はしまりのある土で下位にはしまりのない土の2枚に分けられるものがある。覆土に含まれるロームは、まだら模様を呈するブロック状のものが多く。

B：本地区のタイプII・IIIに相当するもので、Aより碗状や鉢型の断面形を呈するものが多い。この原因には、用途・時期差とともにAより確認段階の低い事が挙げられるかもしれない。覆土は、ほぼ単一な土で占められ、含まれるロームも粒状のものが多く。Aとのロームの違いは

ルームがはいる、または崩落する際の条件の差と思われる。

このタイプA・Bが時期や用途による差を表わすものであるかどうか、現時点では充分に判断出来ない。また、建川2では小ビットを人為的なものとする根拠に、断面が明瞭な事、集中する事を挙げた。本地区のものも、この条件を満たすものであるが、小動物の巣穴に同様の状態を呈するものがあるように思われる。より確実な判定材料を集める必要がある。ならびに、今回、タイプII・IIIとしたものの半数以上に、断面は不明瞭であるがまとまりの窺われるもののある事も注意しなくてはならない。

2) 遺物について

本地区では、今回は遺物の伴出関係や前後関係を明確にするための調査方法を試みたが、結果的には思うような成果を挙げる事は出来なかった。そこで、ここでは注意される遺物や他地区との関連を主に見ていきたい。

隣接する59年度B地区は、II群B₂類期の土器捨場が3箇所で見つかっている。そのうち、捨場AとBは沢部分のIII層下面、あるいは沢べりのIV層直上の面に形成されている。この状況は図VI-7-10の土器にも認められ、IV層直上の面からまともな破片が得られている。口縁部の破片がレベル差をもって出土しているが、その原因は、後の時代の掘りおこしや土器といっしょに土砂が捨てられた事等を考える必要があろう。59年度には、N・O-35~37にかけて数個の復原土器が得られ、包含層の中では、かなりの高率で完形に近い土器を出土している。この59年度と今回の土器の出土状況から、P-35区周辺に59年度とは別の土器捨場が存在していると思われる。そして、このあたりは、IV層が存在している事から湿り気の抜けづらい窪地で、日常生活や作業には適さないところであったのだろう。

IV群A₁類としたものでは、図VI-7-16~19のSP出土の土器にまとまりが窺われる。オオバコ回転文(大沼1986)、無文、荒い縄文、無文地に沈線文の土器があり、H地区出土のIV群A₁類土器の中では、やや異なった様相を呈している。小ビットの掘りこみが明瞭である事からすれば、同図14や23のような整然とした縄文のものや貼付帯をもつものよりは新しいと考えてよいだろう。全体的には縄文のみの施されているものが多く、F地区でIII群B₂類のiiiとしたものに近い。H地区でこれらをIV群にした理由は、I層出土の土器のところで述べたとおりであるが、明確なIV群と思われるE地区出土の余市式に類似するものは出土していない。おそらく、E地区出土の余市式土器やF地区出土のIV群A₁類とした沈線文の土器が涌元II式(大沼1986)とされるものにつながると考えられ、本地区出土の土器はその前の段階と思われる。この段階の土器は、縄文のみのものが多く、沈線文や地文を除いて、胴部に文様の施される事は稀であろう。FH-1出土遺物や先述した23のような貼付帯をめぐらす土器は、E地区出土の余市式にみられる口縁部に貼付のめぐるものに変化するが、この間に縄線文や刺突文は減少し、前者は次段階(涌元II、あるいはトリサキ式)には沈線に置きかわるようである。E・F・H地区の土器から、こうした変化が考えられるが、この段階の土器には、すでに指摘されている土器の系統の問題(大島・瀬川1982)や建川2で指摘した地域差の問題があり、そのまま他地

域の遺跡に当てはまる訳ではないであろう。また、この段階の土器を縄文時代中期・後期のどちらに位置づけるかもこれからの問題と思われる。図VI-11-14は、周辺の縄文のみの土器より数cm高いレベルから出土し、浮いたとも伴出したとも言えない状態である。

IV群A₂類土器の大半はI層中から出土しており、III層中で取りあげられているものは何らかの落ち込みがあったと思われるところから得られたものである。図VI-8-8は外反する口縁部が広く、60年度B地区・盛土地区の4類に相当するものであろうが、この段階の土器としては明らかに低いレベルから出土している。遺構の検出に努めたが、明瞭な掘り込みは認められず、削平跡のようなところと考えられた。ここからはフレイクも多く出土しており、F地区でのフレイク出土状況とともに、沢べりや窪地にフレイクが多く残されている傾向を指摘できる。

石器では、欠損品の多い事が挙げられる。F地区で完形品の多く得られた事と対比的である。時間的な差の可能性もあるが、両地区の性格の差と思われ、H地区では土器の出土状況もまとまりを欠き、捨場的な状態、あるいは作業・生活区域の周辺部的な状態を読みとれるようである。昭和59年度B地区やF地区では、石鏃、つまみ付ナイフ、すり石といったものが沢べりや住居址付近に多い傾向がある。これに対して、Uフレイクの類、たたき石、くぼみ石といったものは住居址からやや離れて、点在する状況のものの認められる傾向がある。H地区の石器は後者の傾向の中でおさえられ、この事からも先述した遺跡の性格が窺われる。

土製品では、円盤状土製品や鐔形土製品の認められるB地区と何ら土製品の認められないF地区との中間的なあり方を示している。2点得られた円盤状土製品は孔の無いもので、59・60年度B地区から出土している有孔のものと時期や用途が異なるかもしれない。(葛西智義)

引用・参考文献

- 大島 直行・瀬川 拓郎：『札幌台地の縄文時代集落址』 登別市教育委員会 (1982)
 大沼 忠春・千葉 英一他：『北埋調報33 鹿川1・新道4遺跡』 00北海道埋蔵文化財センター (1986)
 高橋 正勝：『知内町前元遺跡出土の土器と北海道西南部の縄文時代後期前半について』『北海道の文化』29 北海道文化財保護協会 (1974)
 森田 知忠：『北海道』『縄文土器大成』3 講談社 (1981)

5. 一 覧 表

○表VI-2にはHP-1を載せていない。報告では、時期の異なる資料として上面出土の遺物を掲載しているが、III層中の遺物と明確に分離出来ないため、表には入れていない。ただし、掲載した遺物の説明は、図の配置に従って表V-3で扱っている。出土層はSPが覆土、Fが廃土中である。

○図の項目についての補足説明は、表の終わりのところに加えている。

○表VI-9では、図示しなかった小ピットに限っている。

1. 出土遺物一覧表

表VI-1

名 称	数 量	名 称	数 量	名 称	数 量
I 群 A 類 土 器	2	ド リ ル	2	フレイク・チップ	1,746
II 群 B ₂ 類 "	2,460	つまみ付ナイフ	4	U・Rフレイク	81
III 群 A 類 "	352	スクレイパー	26	コ ア	12
III 群 B 類 "	209	楔 形 石 器	2	接 合 石 材	8
IV 群 A ₁ 類 "	2,376	磨 製 石 斧	4	石 斧 素 材	2
IV 群 A ₂ 類 "	2,899	た た き 石	7	礫 [△]	334
IV 群 B 類 "	5	す り 石	10	礫	1,735
V 群 土 器	14	石 剣	1	石 器 類	4,006
不 明・小破片	210	く ぼ み 石	6	土 製 品	6
土 器 計	8,527	台 石	5	炭 化 ク ル ミ	2
石 刃	1	石 錘	1		
石 鏃	17	礫 器	2	合 計	12,541

2. 遺構出土遺物一覧表

表VI-2

遺構番号	名 称	数 量	遺構番号	名 称	数 量	遺構番号	名 称	数 量
全 遺 構	II 群 B ₂ 類 土 器	22	HF-6	計	13	HSP-20	II 群 B ₂ 類 土 器	2
	IV 群 A ₁ 類 "	2	HF-8	II 群 B ₂ 類 土 器	1		礫	1
	IV 群 A ₂ 類 "	4		計	1		計	3
	土 器 計	28	HF-10	IV 群 A ₂ 類 土 器	4	HSP-27	II 群 B ₂ 類 土 器	2
	スクレイパー	2		フ レ イ ク	1		計	2
	フ レ イ ク	9		計	5	HSP-46	IV 群 A ₁ 類 土 器	1
	礫 [△]	4	HSP-2	II 群 B ₂ 類 土 器	1		計	1
	礫	28		計	1	HSP-48	II 群 B ₂ 類 土 器	4
	石器類 計	43	HSP-8	礫 [△]	3		礫	1
				計	3		計	6
HF-3	IV 群 A ₁ 類 土 器	1	HSP-12	II 群 B ₂ 類 土 器	10	HSP-64	礫	2
	フ レ イ ク	1		礫	14		計	2
	計	2		計	24	HSP-70	スクレイパー	1
HF-4	II 群 B ₂ 類 土 器	2	HSP-13	礫 [△]	1		計	1
	フ レ イ ク	2		計	1	HSP-73	スクレイパー	1
	計	4	HSP-15	礫	1		計	1
HF-6	フ レ イ ク	4		計	1			
	礫	9						

3. 遺構出土掲載遺物一覧表

表VI-3

図番号	遺構	分類	特徴	図番号	遺構	分類	特徴
VI-2-1	HP-1	Ⅱ群B ₂ 類土器	多軸文	VI-4	SP-46	Ⅳ群A ₁ 類土器	縄文(L・R・縦回転)
" - 2	"	スクレイパー	Sh・34.8g	"	" - 70	スクレイパー	Sh・30.2g
VI-4	SP-12	Ⅱ群B ₂ 類土器	多軸文	"	" - 73	"	"・27.1g
"	" - 20	"	燃糸文(R)	VI-5-1	F-3	Ⅳ群A ₁ 類土器	縄文
"	" - 27	"	" (L)・綾結文	" - 2	F-8	Ⅱ群B ₂ 類土器	燃糸文(L)・綾結文

4. P32~35区・Ⅲ層出土掲載遺物一覧表

表VI-4-1(I)

発掘区	番号	局・レベル	分類	特徴	発掘区	番号	局・レベル	分類	特徴
P35 (-b-d)	1	IV+5	Ⅱ群B ₂ 類土器	燃糸文(L)・綾結文	P35 (-b-d)	33	IV+30	Ⅱ群B ₂ 類土器	燃糸文・綾結文
	2	"	"	付加条縄文		34	"	"	" (R)
	3	"	Ⅳ群A ₁ 類土器	無文		35	"	"	多軸文
	4	"	"	"		36	"	"	"
	5	IV	ブレイド	Sh・13.1g		37	"	Ⅲ群B ₂ 類土器	縄文(L・R・縦回転)
	6	IV+10	Ⅱ群B ₂ 類土器	多軸文・綾結文		38	"	Ⅳ群A ₁ 類土器	" (R・L・縦回転)
	7	"	"	燃糸文(L)		39	"	Ⅳ群A ₁ 類土器	沈線(無文地)
	8	"	"	" (R)		40	"	"	無文
	9	"	"	—	P34 (-b-d)	1	(IV)	Ⅱ群B ₂ 類土器	燃糸文(L)
	10	IV+5~20	"	燃糸文(R)・綾結文		2	"	"	縦の結束第1種羽状
	11	VI+10	くぼみ石	Tu・218.4g		3	"	Ⅲ群A ₁ 類土器	鳥結形正直(縄)
	12	VI+15	Ⅱ群B ₂ 類土器	多軸文・綾結文		4	"	Ⅳ群A ₁ 類土器	縄文(L・横回転)
	13	"	"	燃糸文(R)・綾結文		5	"	Ⅲ群B ₂ 類土器	" (L・R・縦回転)
	14	"	Ⅲ群B ₂ 類土器	縄文(L・R・縦回転)		6	"	Ⅳ群A ₁ 類土器	磨消縄文
	15	"	Ⅳ群A ₁ 類土器	沈線・縄文		7	"	"	"
	16	SP	"	オオバコ回転文		8	"	"	沈線・縄文
	17	"	"	無文		9	IV+5	Ⅳ群A ₁ 類土器	縄文(L・R・縦回転)
	18	"	"	縄文		10	"	Ⅳ群A ₁ 類土器	沈線・縄文
	19	"	"	沈線(無文地)		11	"	"	"・擦痕
	20	VI+20	Ⅱ群B ₂ 類土器	燃糸文(R)		12	"	"	磨消縄文
	21	"	"	多軸文・綾結文		13	IV+10	Ⅱ群B ₂ 類土器	多軸文
	22	"	"	"		14	"	Ⅲ群B ₂ 類土器	貼付番・縄文(L・R)
	23	"	Ⅲ群B ₂ 類土器	貼付番・縄文(L・R)		15	"	Ⅳ群A ₁ 類土器	縄文(L・R)
	24	VI+25	Ⅱ群B ₂ 類土器	縄線(L・R)4条		16	"	"	沈線・縄文
	25	VI+20~25	"	燃糸文(R)		17	IV+15	Ⅱ群B ₂ 類土器	燃糸文(L)
	26	VI+25	"	付加条縄文(条痕地)		18	"	"	"
	27	"	"	燃糸文(L)		19	"	Ⅳ群A ₁ 類土器	縄文
	28	"	"	多軸文		20	"	Ⅲ群B ₂ 類土器	貼付番・縄文(L・R)
	29	VI+30	"	縄線(L)		21	"	Ⅲ群B ₂ 類土器	刺突文・"
	30	"	"	燃糸文(R)		22	"	Ⅲ群B ₂ 類土器	縄文(R・L・縦回転)
	31	"	"	"・結束1種羽状		23	"	"	羽状縄文(RL・LR)
	32	"	"	" (R)		24	"	Ⅳ群A ₁ 類土器	縄文(L・R・縦回転)

表VI-4-(2)

発掘区	番号	局・レベル	分 類	特 徴	発掘区	番号	局・レベル	分 類	特 徴
P34 (-b-d)	25	IV+15	IV群A ₁ 類土器	沈線(無文地)	P32 (-a-c)	8	IV+30	III群B ₂ 類土器	羽状縄文(R L)
	26	"	IV群A ₁ 類土器	沈線		9	"	IV群A ₁ 類土器	無 文
	27	"	石 鉄	S h. 0.4g	P32b	10-1	18.80 ~18.85	III群B ₂ 類土器	多軸文
	28	"	U フ レ イ ク	" . 4.7g	P35a	-2	18.70 ~18.75	"	巻紐回転文
	29	IV+20	IV群A ₁ 類土器	縄文(L R・横回転)	P32b	-3	18.85 ~18.90	III群A ₁ 類土器	刺突文・貼付文
	30	"	"	無文	"	-4	18.70 ~18.75	"	結束1種羽状縄文
	31	"	"	縄文(R L)	P34c	-5	"	III群B ₂ 類土器	貼付帯・縄文(L R)
	32	"	"	貼付帯・縄文(L R)	P35a	-6	18.65 ~18.70	"	縄線文・"
	33	"	"	縄文(L R・横回転)	P32b	-7	18.65 ~18.80	IV群A ₁ 類土器	貼付帯・"
	34	"	III群B ₂ 類土器	" (L R・縦回転)	P33d	-8	18.70 ~18.75	"	縄文(L R・縦回転)
	35	"	IV群A ₁ 類土器	沈線・縄文(L)	P32b	-9	18.60 ~18.85	"	" (")
	36	"	"	" (無文地)	P35c	-10	18.75 ~18.80	"	無文
	37	"	"	"・擦痕	P32d	-11	"	"	縄文(L R・縦回転)
P32 (-a-c)	38	"	"	磨消縄文	P34c	-12	"	"	網代文(底面)
	39	"	"	沈線・縄文(L R)	P32b	-13	18.90 ~18.95	"	縄文(R L・横回転)
	1	IV+10	IV群A ₁ 類土器	縄文(R L)	P35a	-14	18.65 ~18.60	"	磨消縄文
	2	IV+15	III群A ₁ 類土器	貼付文・刺突文	P34c	-15	18.75 ~18.80	IV群A ₁ 類土器	無文
	3	"	IV群A ₁ 類土器	沈線文(無文地)	P32b	-16	18.65 ~18.70	"	沈線(無文地)
	4	IV+20	III群B ₂ 類土器	貼付帯・縄線(R L)	P34c	-17	18.85 ~18.90	"	磨消縄文
	5	IV+25	II群B ₂ 類土器	擦余文(L)・綾結文	P33b	-18	18.80 ~18.85	IV群A ₁ 類土器	沈線・縄文(L R)
	6	"	"	多軸文	P34c	-19	18.75 ~18.80	"	無文
	7	"	III群A ₁ 類土器	馬蹄形正嵌文(刺突)					

5. III層出土掲載土器一覧表

表VI-5

図 番 号	分類	レベル	図 番 号	分類	レベル	図 番 号	分類	レベル	図 番 号	分類	レベル
VI-11-1	I A	—	VI-11-10	II B ₂	18,699	VI-11-18	IV A ₁	20,226	VI-12-27	IV A ₂	18,701
" 2	II B ₂	20,010	" 11	III A	19,045	" 19	"	19,776	" 28	"	18,922
" 3	"	20,038	" 12	"	18,853	" 20	"	29,665	" 29	"	20,643
" 4	"	20,271	" 13	III B ₂	18,999	VI-12-21	"	20,680	" 30	"	18,759
" 5	"	20,318	" 14	"	18,816	" 22	"	18,922	" 31	"	18,922
" 6	"	18,880	" 15	"	18,097	" 23	"	18,719	" 32	"	20,202
" 7	"	20,082	" 16a	IV A ₁	20,025	" 24	III B ₂	20,123	" 33	"	18,806
" 8	"	18,764	" 16b	"	20,043	" 25	"	18,799	" 34	IV B	19,791
" 9	"	20,154	" 17	"	20,096	" 26	IV A ₂	18,819			

6. I層出土掲載土器一覧表

表VI-6

図番号	分類	発掘区	図番号	分類	発掘区	図番号	分類	発掘区	図番号	分類	発掘区
VI-13-1	ⅡB ₂	P-34	VI-13-13	ⅢB ₂	P-30	VI-13-25	ⅣA ₁	S-23	VI-14-38	ⅣA ₂	P-31
" 2	"	Q-31	" 14a	ⅢB ₂	P-34	" 26	"	P-26	" 39	"	P-29
" 3	"	Q-35	" 14b	"	"	" 27	"	R-23	" 40	"	P-34
" 4	"	P-34	" 15	"	Q-28	" 28	"	P-35	" 41	"	"
" 5	ⅢA	P-29	" 16	"	Q-24	" 29	"	P-34	" 42	"	"
" 6	"	Q-29	" 17	"	P-31	" 30	"	P-35	" 43	"	P-34-35
" 7	"	P-32	" 18	"	P-32	" 31	"	P-34	" 44	"	P-35
" 8	"	Q-31	" 19	"	Q-32	" 32	"	P-33	" 45	"	"
" 9a	ⅢB ₂	P-34	" 20	ⅣA ₁	P-32	" 33	ⅣA ₂	P-34	" 46	"	P-34
" 9b	"	"	" 21	"	P-35	" 34	"	P-29	" 47	"	"
" 10	"	S-23	" 22	"	P-31	" 35	"	P-31	" 48	"	P-33
" 11	"	Q-27	" 23	"	Q-26	VI-14-36	"	P-34	" 49	ⅣB	"
" 12	"	P-33	" 24	"	P-33	" 37	"	P-33			

7. Ⅲ層出土掲載石器一覧表

表VI-7

図番号	名 称	レベ ル	重 量	石 材	図番号	名 称	レベ ル	重 量	石 材
VI-15-1	石 鍬	18.70 ~18.75	2.0	Sh.	VI-16-10	石 斧 素 材	20.129	213.9	Gr-Mud
" 2	つまみ付ナイフ	18.55 ~18.60	15.5	"	" 11	"	"	1290	"
" 3	スクレイパー	—	20.4	"	" 12	す り 石	20.466	528.6	And.
" 4	"	18.55 ~18.60	36.1	"	" 13	"	18.90 ~18.95	385.2	"
" 5	U フ レ イ ク	20.206	17.3	"	" 14	た た き 石	18.75 ~18.80	393.6	S.a.
" 6	"	18.75 ~18.80	14.2	"	" 15	"	19.071	630.0	Qua.
" 7	"	18.60 ~18.65	24.9	"	" 16	"	19.051	43.0	S.a.
" 8	"	18.75 ~18.80	17.1	"	" 17	く ぼ み 石	—	289.8	Mud.
" 9	"	"	13.7	"	" 18	接 合 資 料	18.80 ~18.95	416.2	Sh.

8. I層出土掲載石器一覧表

表VI-8-(1)

番号	名 称	重 き	石 質	番号	名 称	重 き	石 質	番号	名 称	重 き	石 質
1	石 鍬	0.7	Sh.	13	ド リ ル	2.9	Sh.	25	スクレイパー	9.9	Sh.
2	"	1.2	Ob.	14	"	22.5	"	26	"	8.0	"
3	"	0.6	"	15	つまみ付ナイフ	1.5	"	27	"	20.9	"
4	"	1.8	Sh.	16	"	4.5	"	28	"	11.2	"
5	"	2.2	"	17	"	12.7	"	29	"	35.3	"
6	"	1.1	"	18	スクレイパー	15.5	"	30	"	43.5	"
7	"	2.2	"	19	"	36.1	"	31	"	23.1	"
8	"	1.6	"	20	"	64.4	"	32	"	53.1	"
9	"	"	"	21	"	22.5	"	33	横 形 石 器	4.0	"
10	"	2.9	"	22	"	20.8	"	34	"	12.8	"
11	"	1.0	"	23	"	20.5	"	35	U フ レ イ ク	4.8	"
12	"	1.1	"	24	"	7.4	"	36	"	8.8	"

表VI-8-(2)

番号	名 称	重 さ	石 質	番号	名 称	重 さ	石 質	番号	名 称	重 さ	石 質
37	U フレイク	10.0	Sh.	52	U フレイク	0.5	Sh.	67	礫 器	241.4	Sh.
38	"	6.9	"	53	"	24.5	"	68	す り 石	385.8	And.
39	"	6.4	"	54	"	2.6	"	69	"	229.9	"
40	"	11.5	"	55	"	7.9	"	70	"	730.0	Dac.
41	"	3.7	"	56	"	61.9	"	71	"	479.8	"
42	"	5.5	"	57	"	6.3	"	72	"	192.9	Sa.
43	"	10.7	"	58	"	10.7	"	73	石 錘	136.5	"
44	"	"	"	59	"	6.0	"	74	た た き 石	344.6	"
45	"	26.5	"	60	"	54.8	"	75	"	174.1	"
46	"	28.3	"	61	"	8.4	"	76	く ぼ み 石	210.4	Sh.
47	"	5.4	"	62	"	30.7	"	77	"	613.0	"
48	"	21.4	"	63	磨 製 石 斧	126.8	Gr-Mud	78	"	185.7	"
49	"	22.1	"	64	"	125.8	Mud.	79	"	170.0	Mud.
50	"	22.3	"	65	"	69.1	Gr-Mud	80	"	214.8	"
51	"	1.7	"	66	礫 器	588.0	Sh.	81	石 錘	44.1	Sch.

9. 小ピット一覧表

番号	確認面レベル	深さ	層	番号	確認面レベル	深さ	層	番号	確認面レベル	深さ	層	番号	確認面レベル	深さ	層
5	20,084	13	B	26	20,043	5	B	49	19,876	10	B	61	20,012	14	B
6	20,095	"	"	29	20,053	18	"	50	19,878	22	"	62	19,983	10	"
7	20,084	22	"	37	20,061	15	"	52	19,886	5	"	63	19,840	25	"
10	19,998	16	"	38	20,066	12	"	53	19,883	20	"	66	19,905	26	"
11	19,973	25	"	40	20,056	19	A	55	19,918	39	A	67	20,028	30	A
17	20,115	6	"	41	19,809	5	B	56	19,874	17	B	68	20,051	"	"
19	19,916	21	"	43	19,653	8	"	57	19,947	15	"	74	19,871	42	"
22	19,976	31	A	44	19,623	"	"	58	19,998	14	"	a	18,807	—	B
23	19,995	5	B	45	19,473	11	"	59	19,963	30	"				
25	20,030	7	"	47	19,799	20	"	60	20,058	3	"				

1. 表3、4の特徴の項には、土器は文様を、石器は石質と重さを記入している。文様はすべての内容を記入している訳ではなく、主なものに限ったものもある。縄文や燃糸文のうち、原体の撚りと回転方向の判別されたものは()の中に記している。多軸文は、多軸絡糸体の回転による文様を略号的に表わしたものである。

2. 表4のレベルは、3-1)で説明した調査法に従って記入している。水平な基準面を設けたところではその基準面の、IV層を基準としたところではIV層のレベルを下に記す。

(基準面) P-32~35-a・d:18,900m、P-32~35-b・d:19,000m

(IV層面) P-32-a:18.65~18.80m P-32-c:18.70~18.80m P-34-b:18.77~18.87m P-34-d:18.49~18.60m P-35-b:18.60~18.85m P-35-d:18.63~18.76m

※P-34-dのIV層面はこの高さであるが、報告したように低い部分があり、18.30mのレベルから出土した遺物もある。

3. 表4・5・7・9のレベルはm、表7・8の重量はg、表9の深さはcmを単位にしている。

4. 表9の層は、大きく上下2枚に分かれるもの(A)と単一の土で占められるもの(B)とに分けている。

図版 I



1. 全完掘風景



2. HP-1 完掘



3. HP-1 上面遺物出土状況

図版 2



1. 調査状況



2. P-33区 攪乱跡



3. P-34区 削平跡上面



4. P-34区 土器出土状況



5. 小ピットの確認状況



6. 小ピット(タイプI)の配列(人のいるところ)



1. SP-2 セクション



2. SP-3・4 セクション



3. SP-10~12 セクション



4. SP-13 セクション



5. SP-14 セクション



6. SP-16 セクション

図版 4



1. SP-18 セクション



2. SP-20・21 セクション



3. SP-23・24 セクション



4. SP-28 セクション



5. SP-40 セクション



6. SP-42 セクション



7. SP-54 セクション



8. SP-59 セクション

図版5



1. SP-70 セクション



2. SP-71 セクション



3. SP-73 セクション



4. SP-74 セクション



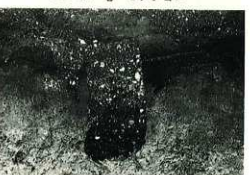
5. SP-f セクション



6. SP-g セクション



7. 近・現代の小ビット



8. 近・現代の小ビット

図版 6



1. 排水管の掘り込み



2. 近・現代の溝



3. 包含層出土の土器



4. 削平跡出土の土器



5. 包含層出土の土器

Ⅶ 新道4遺跡 昭和60年度B地区の調査

1. 遺跡の概要

B地区平坦部分は、J-50 グリッド杭とP-48 グリッド杭を結ぶラインから60年度発掘区の北東端の60ラインまでの範囲がこれにあたる。標高は、17~18mである。

平坦部分で発見された遺構とその発見数は、以下の通りである。

住居跡(6)、フラスコ状ピット(13)、ピット(76)、Tピット(3)、特殊なピット(1)焼土、小ピット群である。

本書では、昭和59、60年度「建川1・新道4遺跡」で報告したBH-16・17、BP-53・157、184、186、188を除く遺構とその遺物について報告するものである。

2. 遺 構

(1) 住 居 跡

BH-10 (図Ⅶ-2)

位 置 0-50・51 規 模 3.11×1.87/2.92×1.80/0.52

土 層 1: 黒褐色土 2: 暗黄褐色土 3: 暗褐色土(多量のローム粒が混じる) 4: 3と類似
5: 暗褐色土(粒子細)

特 徴 VI層上面で確認された。遺構のほぼ半分は発掘区南東側境界の外に存在する。掘り込み面は、発掘区境面から第三層の中位とみられる。平面形は、墳口・墳底ともに円形を呈すると推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構の長・短軸方向の壁に3基、北西壁ぎわから1基の柱穴様小ピットが確認された。前者は、住居壁を切るような状態で確認され、いずれも直径20cm、深さ30cm程度のものである。後者も、前者と同様の大きさである。これら4基の小ピットは、いずれも本住居跡に伴う柱穴と思われる。

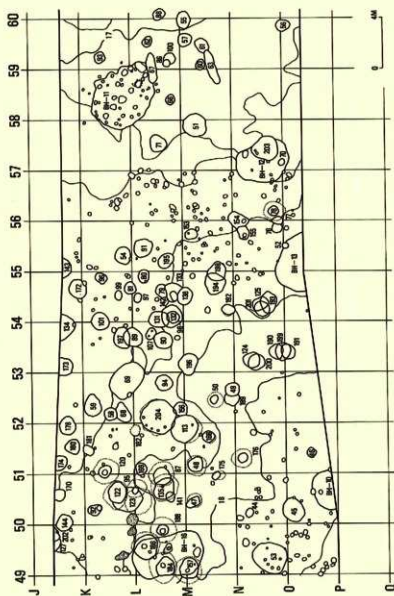
遺 物 覆土からII群B₂類土器(図Ⅶ-2: 1、2)、III群A₁類土器(図Ⅶ-2: 3)、IV群A₂類土器(図Ⅶ-2: 4~7)が出土している。この他に石器(図Ⅶ-2: 8~11)も出土している。8は石鏃、9はフレイクで、頁岩である。10は、安山岩製の北海道式石冠の破片である。11は、安山岩製のたたき石である。棒状礫の長軸方向の一端を使用したものである。

時 期 第三層中位から掘り込まれていると推定されることと、このセクション面の延長上に盛り土がみられることからみて、縄文時代中期に属するものと思われる。

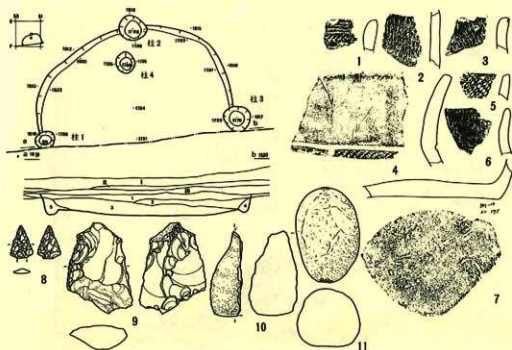
BH-11 (図Ⅶ-3)

位 置 K・L-57~59 規 模 5.52×4.20/5.32×3.81/0.33

土 層 1: 暗褐色土 2: 暗茶褐色土(土にしまりがある) 3: 黒褐色土 3'-a: 黒褐色土
(ローム粒含む) 3'-b: 茶褐色土 4: 暗茶褐色土 5: 茶褐色土(ローム粒含む) 6: 茶



図Ⅶ-1 B地区平坦地区遺構分布図

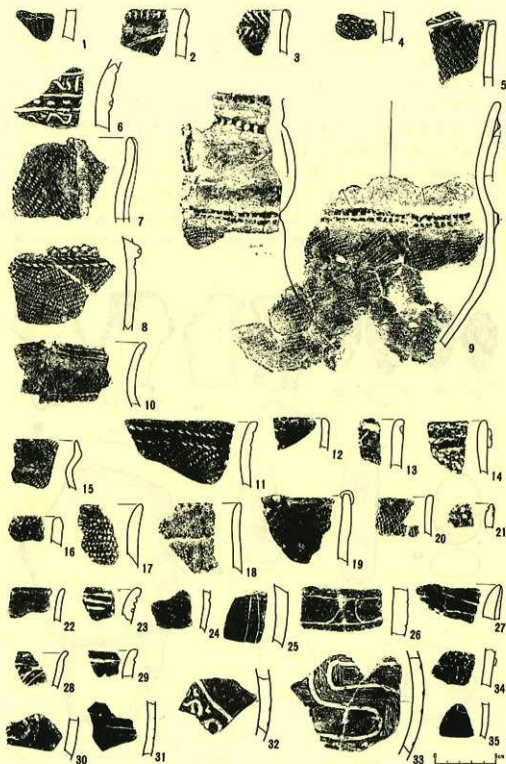


図Ⅶ-2 BH-10と出土遺物

褐色土(ローム粒多い) 6': 茶褐色土(土にしまりがない) 7: 暗黄褐色土(土は固くしまっている) 8: 暗黄褐色土 9: 褐色土(土はしまっている) 10: 褐色土 11: 茶褐色土 12: 暗褐色土 a: 黄褐色ローム 13: 暗茶褐色土 a': aが熱変したものの。V': 褐色土(VI層ロームの汚れた状態のもの) VI': ロームブロック K: 攪乱(1~3の近・現代の掘りこみと4の木根跡がある)

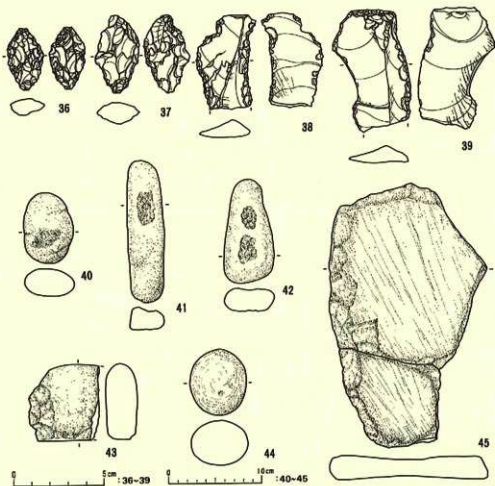
特徴 V層面で確認された。覆土は大きく、覆土6以下の住居跡を直接埋めた土と覆土3以上の自然堆積層と思われる部分とに分けられる。平面形は卵形に近い楕円形であるが、くびれや凹凸が目立つ。壁ぎわの暗黄褐色土(7)や褐色土(9)と遺構外VI層との識別が困難であった事によるが、柱穴様ビットの配列や後述する炉周辺の変遷から、改築の行われた可能性はある。

床面では石組炉と多数のビット、小ビットが検出された。これらには長軸上に並ぶものと壁に沿った配列をするものがある。後者はほぼ柱穴と考えてよいであろう。前者には石組炉、皿状の浅い掘りこみ(SP-10・31)の他に、円形の特異なビットがある。SP-11・12としたものがそれで、共通した特徴を備えている。覆土はいずれもIV層。ロームがつまっております。平面での確認は注意しなければ見過ごす状況であった。炉との関係から深く掘り下げたSP-12の断面観察によって粒状や塊状のロームで埋められたビットの存在を知り、長軸上にトレンチを入れたところ、SP-11を確認した。これらのビットの壁は水をつけても容易に

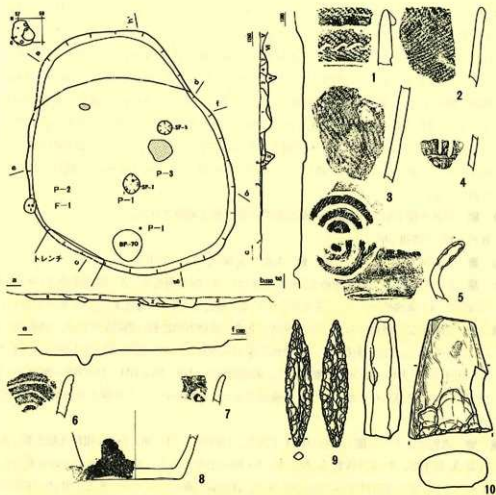


図四-4 BH-11の出土遺物(1)

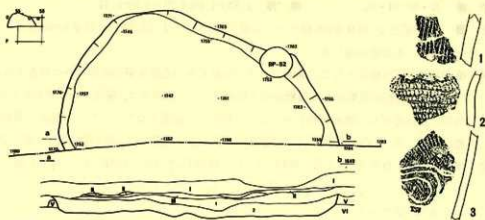
はとけてこない位に固くしまっていた。特に加熱した痕跡はなく、炉周辺の踏み固められた床面部分に類似する事から、壁をたたきしめたものではないかと考えている。SP-11・12ともbのほうが浅く、aのほうの立ちあがりに段がついている。また、bはブロック状のロームで埋まっているのに対して、aは細かなローム粒で埋まっている。aとb、あるいはaとaの2個1組で目的を果たすビットのように思われる。石組炉はSP-12aの上位に設けられている。石組内の焼土はSP-13に切れ、石もやや動いた形跡がある。炉周辺ではSP-12b→石組炉→SP-13の変遷がたどれる。また一点鎖線で示した床の固い部分にかかるビットは、石組炉とその下にあったSP-12aを除いて、すべて固い床を切っている。SP-11とこれらのビットとの新旧は明確ではないが、SP-11覆土上位には皿状に覆土3に類似する土が認められ、そこから得られた土器は石組炉上部の覆土中で得られた土器(9)と同一個体であった。他には、北西壁ぎわに小礫の集中が認められた。特に使用痕の認められない礫44点が覆土6と6'との境あたりから出土している。



図VII-5 BH-11の出土遺物(2)



図Ⅵ-6 BH-12と出土遺物



図Ⅶ-7 BH-13と出土遺物

遺物 すり石を炉石に転用したと思われる41や小ビット内から出土した34(SP-1)・35(外P-7)・39(SP-16)・42(SP-17)を除いて、すべて覆土から得られている。土器はⅡ群B₂類(1)、Ⅲ群A類(2~5・34)、Ⅲ群B₂類(6~25)、Ⅳ群A₂類(26~33・35)が出土している。7は摩耗が著しく、隆帯上の文様の有無は不明である。9の貼付上には刺突(口縁部)、縄線(縦のもの)、刺突に縄線(胴部)が加えられている。8・10・11の縄線は2段の原体によるもの、12~14のそれは不明確である。19は口唇に粘土帯をかぶせているが、部分的なものかもしれない。20は、縦走ぎみの縄文である。石器ではスクレイパー(36・37・39)、つまみ付ナイフ(38)、たたき石(40)、くぼみ石(41・42)、すり石(43・44)、砥石(45)が得られている。

時期 形状や覆土出土の土器から縄文時代中期後葉と判断される。

BH-12 (図VII-6)

位置 N-56・57 **規模** 4.02×3.36/3.78×3.21/0.25
土層 1:黒褐色土 2:暗褐色土(木炭を含む) 3:暗茶褐色土 3':暗茶褐色土(ローム粒を含む) 4:黄褐色ローム(しまりがない) 5:褐色土 6:暗褐色土(土のしまりがない)
特徴 VI層上面で確認された。平面形は、北東-南西方向に長い楕円形である。断面は、浅い皿状を呈する。住居跡床面に、炉や柱穴等がみられないが、規模・形状から住居跡とした。本住居床面で、BP-70・203と重複する。新旧関係は、BP-70>BH-12>BP-204である。住居床面から3基の柱穴様小ビットが確認された。1基の小ビットの覆土から坩土が確認された。

遺物 遺物は、すべて覆土からの出土である。(図VII-6:1~10)1・2はⅢ群A類土器、3はⅣ群A₁類土器、4~8はⅣ群A₂類土器、9・10は石器である。1は、口縁部に貼付帯をもつものである。5には貼付文がみられる。9は、頁岩製の棒状のドリルである。10は、緑色片岩製の石斧である。擦り切り手法によるものである。刃部を欠損している。

BH-13 (図VII-7)

位置 N・0-54・55 **規模** 4.63×1.99/4.23×1.80/0.47
土層 1:黒褐色土(径0.5cm程のローム粒が混じる) 2:暗褐色土(径0.5cm程のローム粒が混じる。炭化物が混じる)
特徴 V層上面で確認された。遺構は、そのほぼ半分が発掘区東側境界の外に存在する。掘り込み面は、発掘区境界面からⅢ層中位と推定される。平面形は、確認された形状からみて、東西方向に長辺をもつ隅丸方形とみられる。柱穴は、確認されなかった。床面は、木根による攪乱を強く受け、凹凸が激しい。北壁側で、BP-52と重複する。新旧関係は、不明である。
遺物 覆土からⅡ群B₁類土器(図VII-7:1)、Ⅲ群B₂類土器(図VII-7:2・3)が出土していることなどからみて、縄文時代中期に属するものと思われる。

(2) フラスコ状ビット

BP-47 (図VII-8)

位置 M-50 規模 $1.12 \times 0.76 / 1.08 \times 1.08 / 0.80$

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口部が楕円形、墳底部が円形である。

遺物 遺物は、覆土からの出土である(図VII-10:1・2)。1はII群B₂類、2はII群B₁類に属する土器片である。2は、口縁部に綾絡文が施されている。

BP-48 (図VII-9)

位置 M-50・51 規模 $1.30 \times 1.14 / 1.54 \times 1.59 / 1.13$

土層 1:黒褐色土(多量の炭化物粒が混じる) 2:暗褐色土 3:黄褐色土(崩落土) 4:黄褐色土(崩落土) 5:暗黄褐色土(細かい粒子の土で、炭化物が混じる) 6:暗黄褐色土(崩落土の様な感あり、径1cmのローム粒が多量に混じる) 7:暗褐色土 8:暗黄褐色土

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに円形である。

遺物 遺物は、すべて覆土から出土した。なかでも、覆土5層・6層からの出土が多かった。層ごとの出土遺物の時期判定はできなかった。3~5は、II群B₂類土器である。3は、網目状燃糸文が施されている。3は、口縁部文様帯下の隆起帯部分の破片である。6~18は、IV群A₂類土器である。8・9は、匚行する沈線文が縦位に施されている。10は、口唇部に無文帯をもち、その下位に横走する沈線文と流線的な「乙」字文が施されている。12は、波状口縁を呈し、隆起部を中心として連弧文が施されている。14~17は、同一個体と思われる。1は、砥石である(図VII-9:1)。材質は砂岩である。砥面に、「V」字形の断面を呈する擦痕がみられる。

時期 出土遺物からみて、縄文時代後期に属するものと考えられる。

BP-50 (図VII-11)

位置 M-52 規模 $0.66 \times 0.58 / 1.19 \times 1.16 / 1.05$

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口が楕円形で、墳底が円形を呈する。

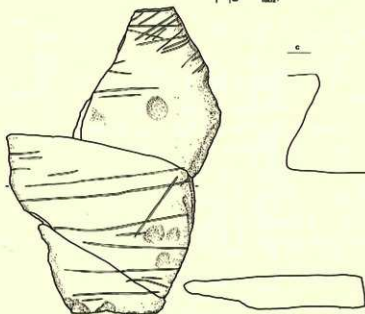
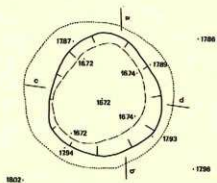
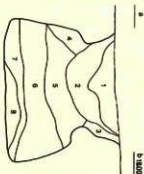
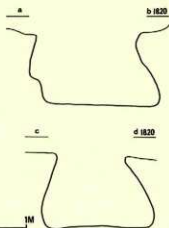
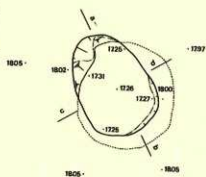
遺物 覆土からIV群A₂類(図VII-11:1・2)と石器(図VII-11:3)が出土している。1・2はいずれも胴部上半の破片で、沈線文が施されている。3は頁岩製のRフレイクである。

BP-78 (図VII-12)

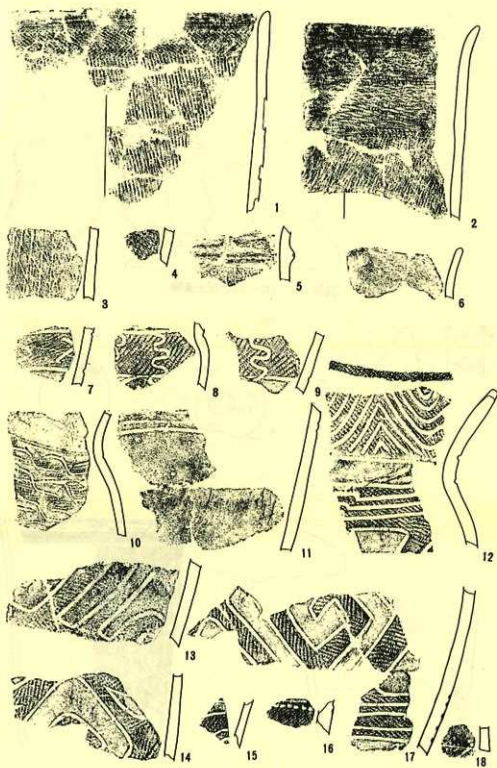
位置 N-55・56、0-56 規模 $0.79 \times 0.74 / 1.70 \times 1.54 / 0.73$

特徴 VI層上面で確認された。墳底面のほぼ中央部から、柱穴様のビットが確認された。規模は、 $0.29 \times 0.24 \times 0.14$ mである。この小ビットは、BP-78に伴うものと考えられる。土墳北西壁ぎわの覆土下位から、4個体の土器が出土した。出土した土器は、いずれも大型の破片で、完形個体はなかった。これらの土器は、流れ込みか投棄などによるものとは考えにくい。

遺物 覆土からII群B₂類土器(図VII-12・13:1~4)、IV群A₂類土器(図VII-13:5)、石器(図VII-13:6~9)が出土している。1・3・4は、胴部下半から底部分である。縦位の燃糸文が施されている。3は、底面に文様がみられる。2は胴部下半から口縁部にいたるものである。口縁部がゆるく外反する。口縁部には2本の平行する縄線がめぐり、その中に矢羽根状や斜位の縄瓦痕が施されている。胴部には縦位の燃糸文に重ねて、せまい幅で結束羽状縄文

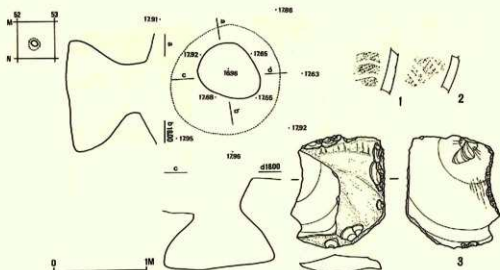


— 168 —

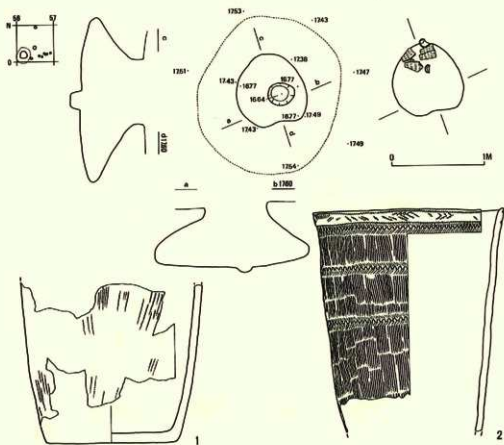


図Ⅷ-10 BP-47の出土遺物・BP-48の出土遺物(2)

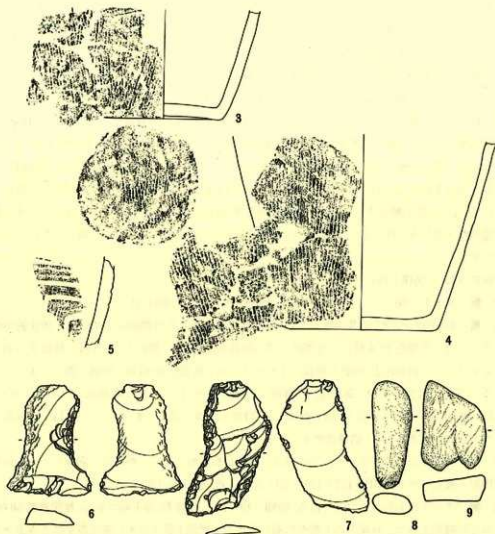
Ⅶ 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図Ⅶ-11 BP-50と出土遺物



図Ⅶ-12 BP-78と出土遺物 (1)



図VII-13 BP-78の出土遺物 (2)

が施されている。6・7は、頁岩製のスクレイパーである。8は、たたき石である。棒状礫の長軸方向の一端を使用しているものである。材質は、凝灰質砂岩である。9は、軽石製の砥石である。

時期 覆土下位からの出土であるが、遺物とその出土状況からみて、縄文時代前期に属するものと考えられる。

BP-87 (図VII-14)

位置 L-50・51 規模 1.30×1.20/1.95×1.75/1.35

土層 1: 褐色土(ローム+黒褐色土。炭化物粒が混じる) 2: 黄褐色土(VI層と同質) 3: 1層と同質 4: 2層と同質 5: 暗褐色土(径0.5~1.0 cmのローム粒が多量に混じる) 6:

黒色土+ローム(まだら)(炭化物粒が混じる) 7:黄褐色土(VI層と同質) 8:黒褐色土(粒子細, サラサラ) 9:黄褐色土(VI層と同質) 10:黒褐色土(8層と同質) 11:暗褐色土(径2.0cmのローム粒が多量に混じる)

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに凹凸はあるが、楕円形を呈する。土壌南西壁で、BP-135と切り合う。新旧関係は不明である。

遺物 すべて覆土からの出土である(図Ⅶ-14:1~8)。1・2はⅡ群B₁類土器、3はⅣ群A₂類土器である。文様は、2本の平行する沈線文の間に、流線的な「乙」字文が施されている。これが、無文帯をはさんで上下に位置する。4は、コフである。材質は、頁岩である。5・6は、擦り切り手法による石斧である。材質はともに緑色泥岩である。いずれも、刃部が欠損している。7は、泥岩製のすり石である。扁平礫を半円状に打ち欠き、弦をすったものである。Ⅱ群B類土器に多く伴うものである。8は、砂岩製のたたき石である。礫の一端をたたいたものである。

BP-95 (図Ⅶ-15)

位置 K・L-50 **規模** 1.09×0.86/1.69×1.45/1.31

土層 1:褐色土 2:暗黄褐色土 3:褐色土(1層と比して色調的にやや暗色で炭化物が混じる) 4:黒褐色土(木根による攪乱) 5:暗黄褐色土 6:褐色土(1・3層と類似するがボロボロ) 7:黄褐色土(VI層と同質。ボロボロ) 8:黄褐色土(VI層と同質。固くしまっている) 9:暗褐色土 10:黄褐色土(VI層と同質。ボロボロ) 11:暗黄褐色土(ボロボロ) 12:暗褐色土(9層と同質) 13:黄褐色土(VI層と同質。固くしまっている) 14:暗褐色土(9・12層と同質) 15:暗黄褐色土

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳底は楕円形である。墳口は、崩落しているが楕円形と推定される。BP-122・123と切り合う。新旧関係は不明である。

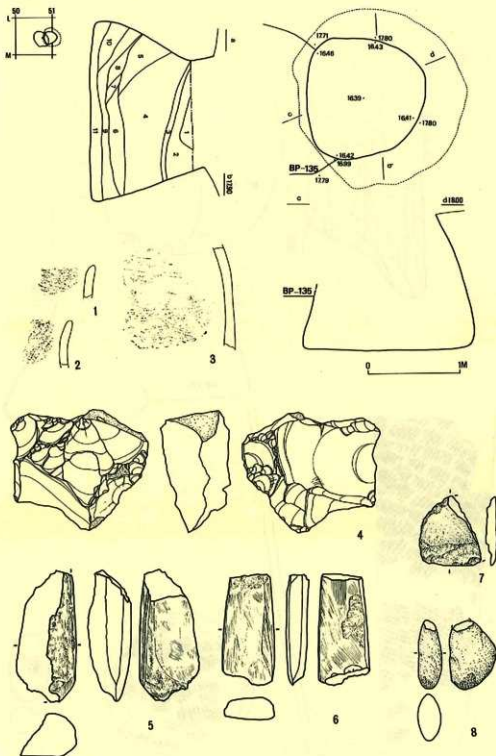
遺物 すべて覆土からの出土である。図Ⅶ-15:1は、Ⅱ群B₁類土器である。推定器高50cmほどの筒形土器で、口縁から上部を欠損している。胴部下位でせまい無文帯をはさみ上下で文様が異なる。RL原体を方向を変えて施文している。土器底部面にも施文されている。図Ⅶ-15:2は砂岩製のくぼみ石である。図Ⅶ-16:3~9はⅡ群B₁類に属し、10~12はⅣ群A₂類に属する土器片である。

BP-113 (図Ⅶ-17)

位置 L-51・52、M-51・52 **規模** 2.43×2.04/2.49×2.25/1.72

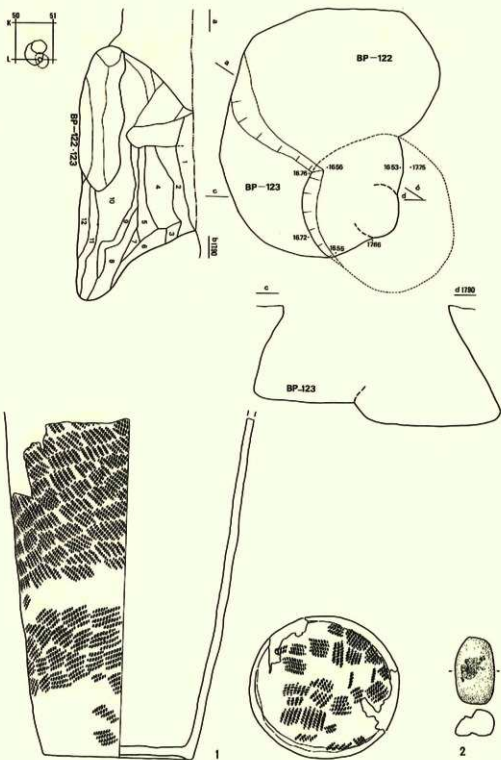
土層 1:褐色土 2:黄褐色土 3:褐色土(多量の炭化物が混じる。VI層と同質) 4:黄褐色土(Ⅳ層と同質。レンズ状。BH-15の14層・15層と同質) 5:暗褐色土(9層と同じ) 6:褐色土 7:黄褐色土(VI層と同質) 8:黄褐色土(VI層と同質。ブロック状) 9:暗褐色土(土粒細。多量の炭化物が混じる) 10:暗黄褐色土(ローム+黒褐色土) 11:黄褐色土(VI層と同質) 12:黒褐色土(多量の炭化物が混じる)

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。土壌北壁側で、

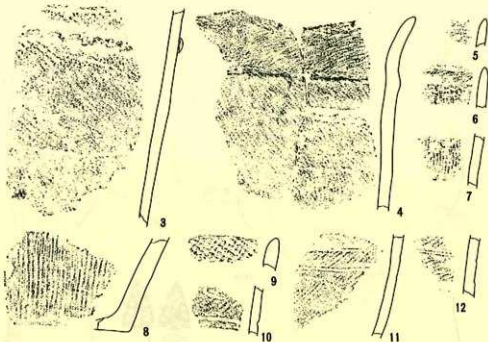


図Ⅷ-14 BP-87と出土遺物

VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図VII-15 BP-95と出土遺物(1)



図VII-16 BP-95の出土遺物(2)

BP-156・204と重複する。新旧関係は、BP-204>113>156である。東壁よりの墳底面から、柱穴様のビット1基が確認された。この小ビットが伴うものか否かは不明である。

遺物 覆土からIV群A₂類土器(図VII-17:4~16)と石器(図VII-17:1~3)が出土している。7・8には雷文が、10には渦巻文が施されている。口縁部の突起部分の破片である。弧線と横走沈線が組み合わされている。また、裏面にも器表面と同様の文様が施されている。14は、流線的な「乙」字文が施されている。1は、頁岩製の石鐮である。基部が欠損している。2は、頁岩製のスクレイパーである。欠損しているが、ほぼ楕円形を呈する両面加工のスクレイパーと思われる。3は、すり石である。材質は砂岩である。

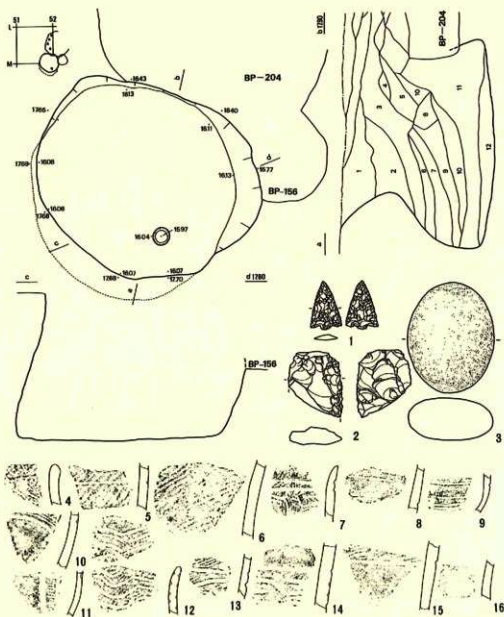
時期 遺物の出土が覆土下位であることや、出土土器が一時期のものだけであることなどからみて、縄文時代後期に属するものと思われる。

BP-120 (図VII-18)

位置 K-50・51 規模 0.96×0.91/2.03×1.85/1.37

土層 1: 黒褐色土(ボロボロ。炭化物が混じる) 2: 褐色土(粒子細。炭化物が混じる) 3: 暗黄褐色土 4: 赤黄褐色土(ローム+焼土) 5: 黄褐色土(VI層と同質) 6: 黒褐色土(多量の炭化物が混じる) 7: 赤茶褐色土(ボロボロ。焼土が混じる) 8: 暗褐色土 9: 暗黄褐色土(ボロボロ。焼土が混じる) 10: 暗黄褐色土(多量の炭化物が混じる) 11: 炭化物層 12: 暗褐色土(炭化物が混じる) 13: 赤黄褐色土(ローム+焼土) 14: 黄褐色土(若干の炭化物粒が混じる) 15: 炭化物層 16: 黄褐色土(VI層)

Ⅶ 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図Ⅶ-17 BP-113と出土遺物

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに南円形である。

遺 物 覆土からの出土である(図Ⅶ-18:1・2)。1はIV群 A₂類土器である。2はコアである。

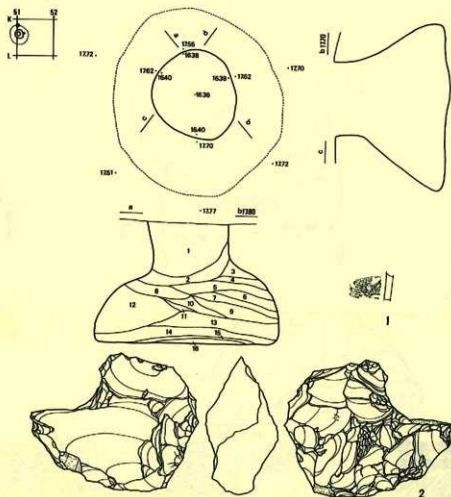
材質は頁岩である。

時 期 覆土下位から、1点のみ出土。縄文時代後期に属するものと思われる。

B P -122 (図Ⅶ-19)

位 置 K-50

規 模 2.04×1.44/2.18×1.95/1.24



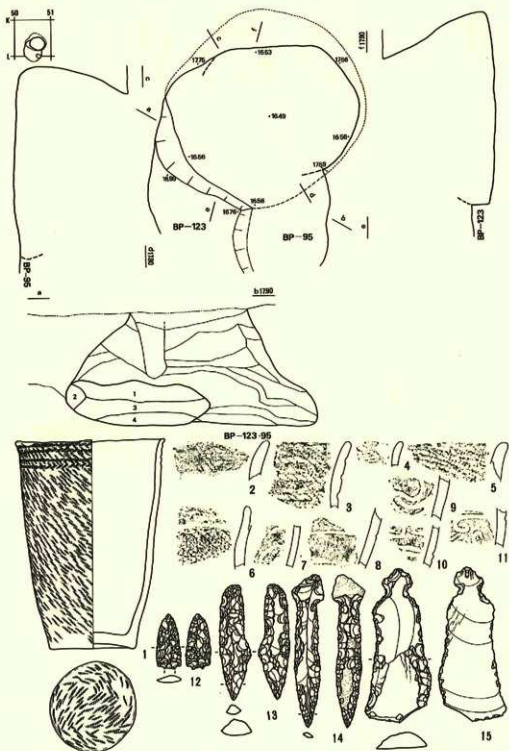
図Ⅶ-18 BP-120と出土遺物

土 層 1: 黒褐色土(1層と比してローム粒の混じる量が少なくローム粒も小さい。炭化物が混じる) 4: 黄褐色土(VI層)

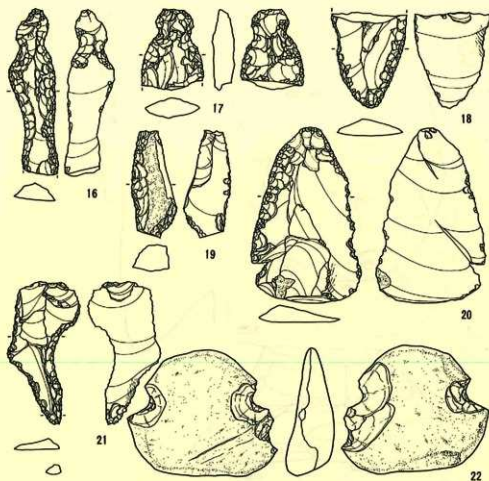
特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底とも楕円形と推定される。土壌南側で、BP-95・135と重複する。新旧関係は、本土墳がBP-123を切り、BP-123の覆土9層と8層の境目が壁と思われるところから、BP-122>123>95である。

遺 物 覆土からII群B₁類土器(図Ⅶ-19: 1~6) IV群A₂類土器(図Ⅶ-19: 7~11)、石器(図Ⅶ-19: 12~15、図Ⅶ-20: 16~20)が出土している。1は、器高22.8cm×口径16.4cmの筒形土器で、口唇はほぼ平縁を呈する。口縁部には、4本の平行する縄文がめぐる。器表面には、斜位の燃炭しの縄文が施されている。また底面にも縄文がみられる。3は1と同様に口縁部に縄線がめぐるものである。2には結条体圧痕文が施されている。12は黒曜石製の石鏃である。基部が欠損している。13は、ポイントナイフである。材質は、真石である。14~17

VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図Ⅷ-19 BP-122と出土遺物(1)



図Ⅶ-20 BP-122・123の出土遺物

は、つまみ付ナイフである。14・17は両面加工、15・16は、二次加工が周辺部にみられるものである。14～16は頁岩製、17は黒曜石製である。18～20は、頁岩製のスクイパーである。

時期 覆土下位からⅡ群B₁類土器が出土しているので、縄文前期のものと思われる。

BP-123 (図Ⅶ-21)

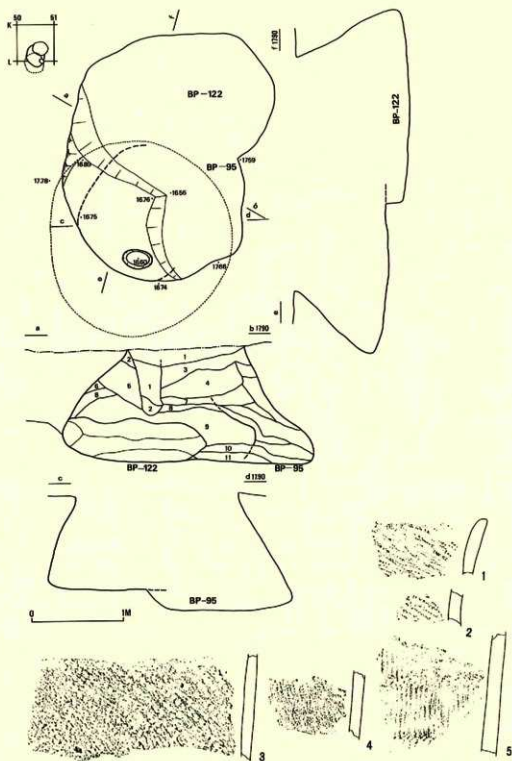
位置 K・L-50

規模 1.44×1.62/2.13×1.98/1.26

土層 1: 褐色土 2: 暗黄褐色土 3: 褐色土(1層と比して色調的にやや暗色で炭化物が混じる) 4: 暗黄褐色土 5: 褐色土(1・3層と類似するがボロボロ) 6: 黄褐色土(VI層と同質。ボロボロ) 7: 黄褐色土(VI層と同質。固くしまっている) 8: 暗褐色土 9: 黄褐色土(VI層と同質。固くしまっている) 10: 暗褐色土 11: 暗黄褐色土 ※1～6までは、BP-95の覆土の可能性あり。

特徴 VI層上面で確認された。土坑北西側で、BP-95・123と重複する。新旧関係は、BP-122>123>95である。坑口部の平面形は、崩落により確認できなかった。坑底の平面形は

VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図VII-21 BP-123と出土遺物(2)

楕円形を呈する。墳底面の中央部から柱穴様の小ピットが確認された。この小ピットの規模は $0.32 \times 0.21 \times 0.15$ m である。

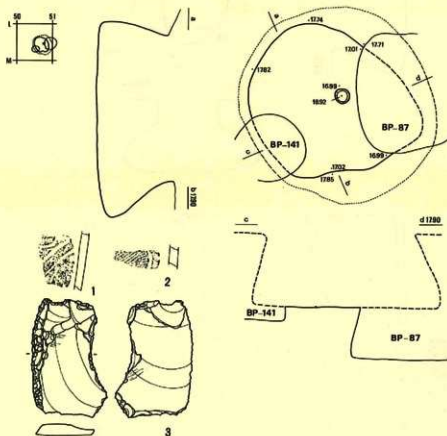
遺物 覆土からII群 B₁ 類土器(図VII-21:1~4)、II群 B₂ 類土器(図VII-21:5)、石器(図VII-20:21・22)が出土している。1は、斜位の燃炭しの縄文が施されている。5には縦位の燃炭文が施されている。21は、頁岩製のスクレイパーである。22は、安山岩製の石錘である。扁平礫の長軸方向に打ち欠きをもつものである。

時期 遺物の出土層位が、覆土下位であるところから、縄文時代前期に属するものと思われる。

BP-135 (図VII-22)

位置 L-50 規模 $1.76 \times 1.60/2.40 \times 2.03/0.85$

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口が不整形、墳底が円形である。墳底面の中央部から、柱穴様の小ピット1基が確認された。小ピットの規模は、 $0.16 \times 0.15 \times 0.05$ m である。この小ピットは、BP-135に伴うものと思われる。土壌の南北で、BP-87・141と切り



図VII-22 BP-135と出土遺物

合う。新旧関係は不明である。

遺物 覆土から、IV群A₂類土器(図VII-22:1・2)、石器(図VII-22:3)が出土している。

3は、頁岩製のスクレイパーである。

時期 時期の特定にはいたらなかった。

BP-176 (図VII-23)

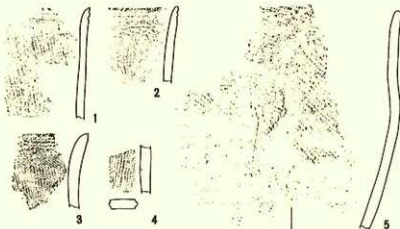
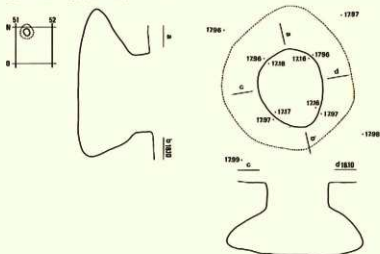
位置 M・N-51 規模 0.68×0.71/1.55×1.44/0.82

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。

遺物 覆土からII群B₁類土器(図VII-23:1~4)とIII群A類土器(5)が出土している。4には擦切り痕がある。

(3) ビット

BP-44 (図VII-24)



図VII-23 BP-176と出土遺物

位置 N-50 規模 $0.75 \times 0.56 / 0.37 \times 0.34 / 0.50$

土層 1: 暗褐色土(ローム粒が混入固くしまっている) 2: 暗黄褐色土 3: 暗黄褐色土(崩落土) 4: 黒褐色土(粘性強) 5: 暗褐色土 6: 暗黄褐色土

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形を呈する。

遺物 出土していない。

BP-45 (図VII-25)

位置 N・O-50 規模 $1.88 \times 1.64 / 1.66 \times 1.51 / 0.52$

土層 1: 焼土(BF-54) 2: 褐色土 3: 暗褐色土(径1.5cmほどのパミスと炭化物が多量に混じる) 4: 暗黄褐色土(径1.5cmほどのパミスと炭化物が多量に混じる) 5: 黄褐色土(崩落土) 6: 暗褐色土(粘性強。固くしまっている) 7: 黄褐色土(崩落土)

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。覆土上面で、焼土が確認された。この焼土は、地床炉でこの土壌に伴うものとは考えにくい。

遺物 覆土から、IV群A₂類土器(図VII-25:1~3)、石器(図VII-25:4~6)が出土している。1には「乙」字文が施されている。2・3は、雷文と思われる。4~6は、いずれも頁岩製の石鐙である。4は無茎平底、5は有茎平底、6は菱形のものである。

時期 遺物の出土層位が覆土下位であることや、時期が一時期のものであることなどから、縄文時代後期に属するものと考えてよいと思われる。

BP-46 (図VI-26)

位置 O-51 規模 $0.78 \times 0.75 / 0.62 \times 0.53 / 0.25$

土層 1: 黒褐色土 2: 黒褐色土(ローム粒が若干混じる) 3: 暗黄褐色土

特徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに多少凹凸はあるが楕円形を呈する。土壌北西壁ぎわから、柱穴様の小ビット1基が確認された。

遺物 覆土から、IV群A₂類土器(図VII-26:1~3)が出土している。

時期 遺物はいずれも覆土中位からの出土であり、その出土遺物から見て縄文時代後期前葉と思われる。

BP-49 (図VII-27)

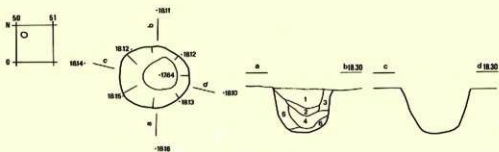
位置 M・N-52 規模 $1.13 \times 1.05 / 0.95 \times 0.84 / 1.05$

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに円形である。壁は、土壌北西側でBP-189と切り合っているため、存在する南東壁でみるかぎりほぼ垂直に立ち上がっていると思われる。土壌南東側の墳底面から、グライ層が確認された。BP-189との切り合い関係は、BP-49がBP-189のグライ層を切っているところからみてBP-49>BP-189である。

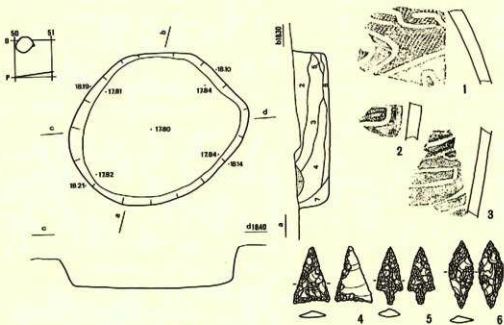
遺物 出土していない。

BP-51 (図VII-28)

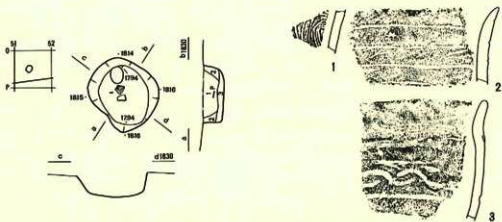
位置 M-57・58 規模 $1.76 \times 1.71 / 1.68 \times 1.50 / 0.65$



図Ⅶ-24 BP-44



図Ⅶ-25 BP-45と出土遺物



図Ⅶ-26 BP-46と出土遺物

土 層 1: 黒褐色土(ローム小粒が混じる) 2: 褐色土(ローム小粒が混じる。焼土が若干混じる) 3: 赤褐色土(焼土) 4: 黒褐色土(1層と同質。多量の炭化物が混じる) 5: 赤黄褐色土(焼土混じりのVI層) 6: 黄褐色土(径1.0~2.0cmのローム粒が多量に混じる。IV層崩落土) 7: 黄褐色土(床面との境に炭化物のうすい層が1枚はさまる)

特 徴 V層上面で確認された。平面形は、凹凸はあるが墳口・墳底ともに円形を呈する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底面の殆どを覆う焼土が確認された。焼土中には、多量の炭化物が混入している。また覆土最下層と床面との境には、炭化物の薄い層もみられる。焼土は、土壌北東側で特に厚く堆積している。これらの焼土と炭化物は、本土域内で火が焚かれたものでなく、北東側壁や焼土の堆積状況からみて、土壌北東側から投棄されたものと考えられる。

遺 物 床面、覆土ともに出土している。(図VII-28:1~6)、(図VII-30:7~33)

床面出土の遺物

土器(図VII-30:7・8) いずれも、IV群A₂類土器である。

石器(図VII-28:2・3) 2は、黒曜石の石鏃である。有茎平基のもので、先端部と基部を欠損している。3は、有茎凸基のものである。

覆土出土の遺物

土器(図VII-28:1)、(図VII-30:9~33) 1は、IV群B類土器で口径8.5cm、推定器高20.0cmの壺形土器である。口唇直下と頸部のくびれ部分に、平行する沈線がめぐる。頸部の沈線下に、これと結ぶ様に小さな弧線が加えられている。体部には、粗く斜位の縄文が施されている。9・10はIII群A類、11~19はIV群A₂類、20~26はIV群B類、27~33はIV群C類土器である。12には網目状襷糸文が施されている。14・16~18は、櫛状工具による条線文で文様を描き、それを沈線で縁取る手法のものである。20~22は、数条の沈線がめぐるもので、20・21は口唇から最上位の沈線の間が無文、22は沈線を施しそれに弧線を加える文様が表現されているものである。同一個体のものと思われる。27~30は、壺形土器の破片で、沈線文と突縮文のあるものである。同一個体のものと思われる。

石 器(図VII-28:4~6) 4・5は、いずれも頁岩製の石鏃である。4は有茎平基、5は有茎凸基のものである。6は、台石である。材質は、安山岩である。

BP-52 (図VII-29)

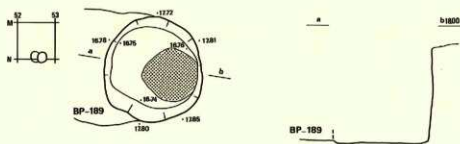
位 置 N・0-55 規 模 0.64×0.66/0.43×0.46/1.03

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。BH-13と切り合う。柱穴様の小型のビットであるが、BH-13の柱穴ではない、新旧関係は、BP-44>BH-13である。

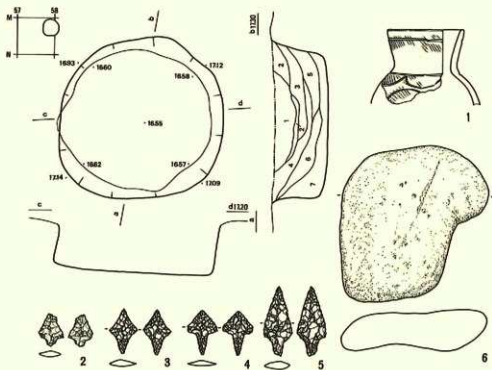
遺 物 覆土から、III群A類土器(図VII-30:34)、IV群A₁類土器(図VII-30:35・36)が出土している。

時 期 BH-13が、縄文時代中期であることから、これより若干新しくなると思われる。

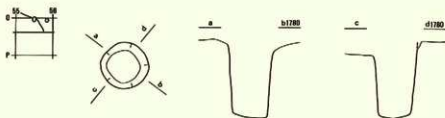
VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



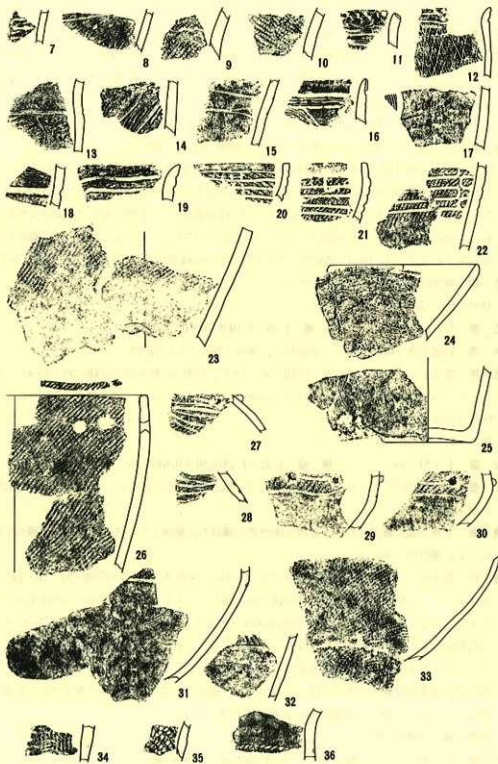
図Ⅶ-27 BP-49



図Ⅶ-28 BP-51と出土遺物 (I)



図Ⅶ-29 BP-52



図Ⅶ-30 BP-51の出土遺物(2)・BP-52の出土遺物

B P-54 (図VII-31)

位置 K-55 規模 $1.63 \times 1.62 / 1.43 \times 1.50 / 0.50$

土層 1: 黒褐色土(ローム細粒が混じる) 2: 褐色土(ローム細粒が多量に混じる。炭化物が混じる) 3: 黒褐色土(1層とはほぼ同じ土質。炭化物が混じる) 4: 暗黄褐色土

特徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。土壌中央部の覆土上位から、土器1個体が出土している。

遺物 遺物はすべて覆土からの出土である。(図VII-31: 1~10)

2~6はⅢ群A類土器、1・7~8はⅢ群B₂類土器、9はⅣ群A₁類土器、10は、すり石である。1は、器高20.5cm×口径19.0cmで頸部にくびれをもつ深鉢形土器である。口縁は外反し、2つの山形隆起部をもつ波状口縁を呈している。隆起部からは、2列の垂下する刺突文が施され、これに直行するように頸部にそって2列の刺突文がめぐっている。体部には、横位の縄文が施されている。10は、砂岩製のすり石である。長軸方向の側縁にたたき痕がみられる。

時期 縄文時代中期であると思われる。

B P-56 (図VII-32)

位置 N・O-59 規模 $1.19 \times 1.10 / 0.70 \times 0.56 / 0.66$

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。

遺物 覆土から、Ⅲ群A類土器(図VII-32: 1・2)、Ⅳ群A₂類土器(図VII-32: 3・4)が出土している。3は、深鉢形土器の破片とみられる。櫛状工具による条線を描き、それを沈線で縁取る手法がみられる。

B P-57 (図VII-33)

位置 L・M-59 規模 $1.32 \times 1.24 / 0.91 \times 0.64 / 0.63$

土層 1: 黒褐色土(ローム小粒が混じる) 2: 褐色土(V層の崩落土) 3: 暗黄褐色土(VI層の崩落土)

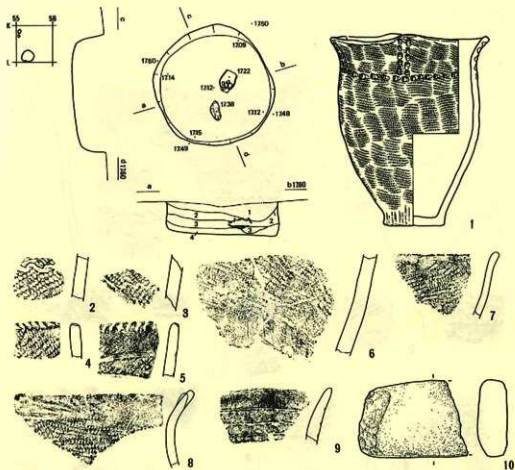
特徴 V層上面で確認された。北西~南西部の墳口が、崩落している。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。

遺物 覆土から、Ⅲ群A類土器(図VII-33: 1~15)、Ⅳ群A₂類土器(図VII-33: 16~19)が出土している。床面からは、石器(図VII-33: 20)が出土している。床面からの出土は、これ1点である。1は、口径29cmで器高45cmと推定される筒形土器である。口縁部は、2つの山形隆起部と、その間に2つの棒状の貼付帯をもつ。貼付帯下には、馬蹄形圧痕があり、さらにその直下には、数条の燃糸圧痕がめぐる。7・8は、2本の沈線で弧を描いている。体部には、結束羽状縄文がある。16は、壺形土器の破片である。細い沈線で施文され、体部は無文と思われる。20は、安山岩製の北海道式石冠である。

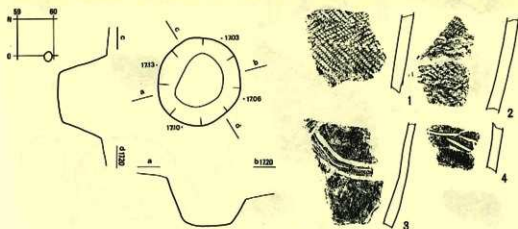
B P-58 (図VII-34)

位置 K-52 規模 $1.24 \times 1.25 / 1.06 \times 1.06 / 0.66$

土層 1: 褐色土 2: 褐色土(径0.5cm前後のローム粒が混じる) 3: 暗黄褐色土(径1.0



図Ⅶ-31 BP-54と出土遺物



図Ⅶ-32 BP-56と出土遺物

Figure 1 consists of 20 numbered illustrations of fossil specimens, likely brachiopod valves and fragments. The specimens are arranged in a grid-like fashion. Many of the drawings show internal features such as muscle scar areas, which are often shaded with cross-hatching or diagonal lines. Some specimens include scale bars, such as '1:20' and '1:120'. Orientation markers 'M' and 'N' are present in the top left corner. The specimens are numbered 1 through 20, with some numbers appearing multiple times (e.g., 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20). The drawings are detailed, showing the texture and structure of the fossilized material.

— 190 —

cm 前後のローム粒が混じる。若干の炭化物粒が混じる) 4: 暗茶褐色土(径1.0cm~1.5cmのローム粒が混じる) 5: 黄褐色土(ロームブロック)

特 徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底とも円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土壌東側でBP-68と切り合う。新旧関係は不明である。

遺 物 覆土からIV群A₂類土器(図VII-34:1・2)、鐔形土製品の被片(図VII-34:3)が出土している。

BP-59 (図VII-35)

位 置 K-52 規 模 2.14×1.49/1.42×1.19/1.93

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口が楕円形、墳底が円形を呈する。土壌中央部から、グライ層が確認された。

遺 物 覆土から、II群B₁類土器(図VII-35:1) III群B₂類土器(図VII-35:2~4)、IV群A₂類土器(図VII-35:6~9)が出土している。10は、覆土から出土したつまみ付ナイフである。頁岩製で、二次加工が片面全体に施されたものである。

時 期 VI群A₂類土器が、ほぼ床面直上のところから出土している。このことからみて、縄文時代後期に属するものとみてよいと思われる。

BP-60 (図VII-36)

位 置 M-58・59 規 模 1.00×0.81/0.93×0.86/0.61

土 層 1: 暗褐色土(ロームの細粒とわずかが炭化物粒が混じる) 2: 暗黄褐色土(粘性強) 3: 黒褐色土 5: 黄褐色土(壁崩落土) 6: 暗黄褐色土 7: 暗褐色土(粘性強)

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺 物 覆土からIII群B₂類土器が出土している(図VII-36:1)。

BP-61 (図VII-37)

位 置 M-59 規 模 1.39×1.11/1.06×0.95/0.83

土 層 1: 黒褐色土 2: 褐色土(若干だが炭化物粒が混じる) 3: 暗黄褐色土(若干だが炭化物粒が混じる) 4: 褐色土(若干だが炭化物粒が混じる) 5: 黄褐色土(壁崩落土) 6: 褐色土(粘性強)

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。土壌南側でBP-63と接する。新旧関係は、不明である。

遺 物 覆土から、III群A類土器(図VII-37:1~4)が出土している。

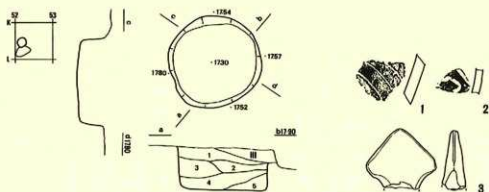
時 期 覆土からの出土ではあるが、出土層位が覆土下位であるところからみて、縄文時代中期に属する土壌と考えてよいと思う。

BP-62 (図VII-38)

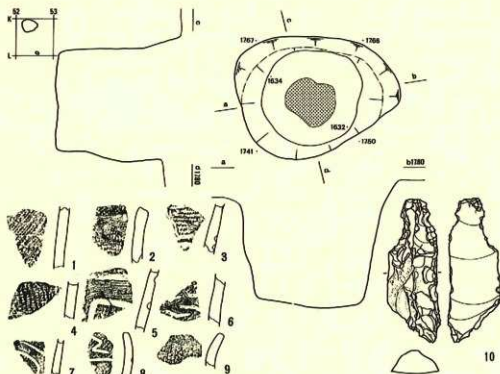
位 置 L-59 規 模 1.02×0.95/0.59×0.66/0.45

土 層 1: 黒褐色土(ローム細粒が混じる) 2: 黒褐色土(ローム細粒が多量に混じる) 3:

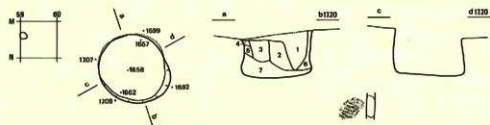
VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



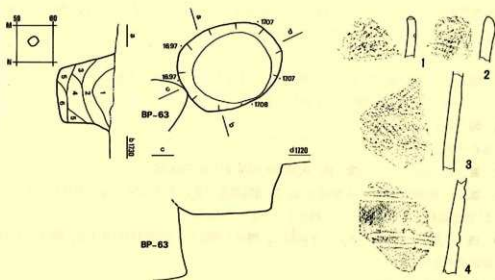
図匁-34 BP-58と出土遺物



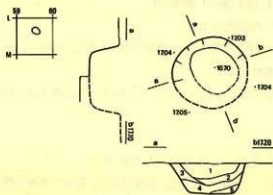
図匁-35 BP-59と出土遺物



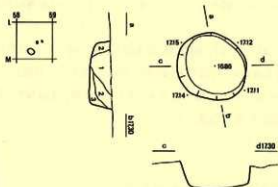
図匁-36 BP-60と出土遺物



図Ⅶ-37 BP-61と出土遺物



図Ⅶ-38 BP-62



図Ⅶ-39 BP-66

VII 新道4道跡 昭和60年度 B地区の調査

暗黄褐色土(V層の流れ込みか崩落) 4:褐色土(多量のロームが混じる。粘性強) 5:褐色土(炭化物粒が混じる。粘性強) 6:黄褐色土(地山の様な感じ。固くしまっている。わずかに5層がスポット状に混じる)

特徴 V層上面で確認された。土壌のはほぼ半分が、水道管理設工により攪乱を受けている。平面形は、墳口・墳底ともに円形と推定される。

遺物 出土していない。

BP-66 (図VII-39)

位置 L-58 規模 $0.95 \times 0.89 / 0.84 \times 0.73 / 0.46$

土層 1:暗褐色土(ローム粒混じる。3~5%程度下位に大きな粒のものがはいつている)
3:暗黄褐色土(汚れたローム。掘りすぎかもしれない)

特徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形を呈する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺物 出土していない。

BP-68 (図VII-40)

位置 K-52 規模 $2.04 \times 1.33 / 1.56 \times 1.09 / 0.19$

土層 1:褐色土(ローム粒が混じる) 2:暗黄褐色土

特徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形を呈する。断面は、浅い皿状である。土壌西壁側で、BP-58と重複する。

遺物 覆土から、Ⅲ群A類土器(図VII-40:1・2)が出土している。1・2ともに地文は、斜行縄文が施されている。

BP-69 (図VII-41)

位置 K・L-52・53 規模 $3.78 \times 2.63 / 3.54 \times 2.28 / 0.52$

土層 1:I層(攪乱土) 2:暗褐色土(ローム小粒が混じる。粘性はなし。若干だが炭化物の小粒が混じる)

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに土壌北西壁が角をもつ楕円形である。土壌北西壁上で柱穴様の小の小ビットと切り合う。この小ビットは、この土壌に付属するものではない。

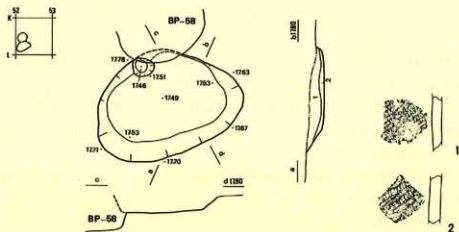
遺物 覆土から、Ⅱ群B₁類土器(図VII-41:1~5)、Ⅲ群B₂類土器(図VII-41:6)、石器(図VII-41:7)が出土している。1は、器高5.9cm、口径9.8cmの小型の鉢である。口縁には4個の隆起部をもつ。地文は、斜位の撚り戻しのある縄文である。2・3は斜位、4は横位の縄文が施されている。7は、めのう製の無茎平基の石鏃である。

時期 縄文時代中期に属するものと思われる。

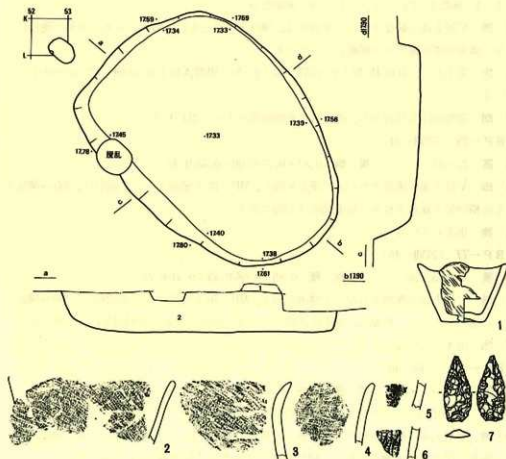
BP-70 (図VII-42)

位置 N・O-57 規模 $0.65 \times 0.59 / 0.37 \times 0.41 / 0.32$

土層 1:黒褐色土(ロームは大きな粒がところどころに混じる。量はごく少ない) 2:黄褐



図Ⅶ-40 BP-58と出土遺物



図Ⅶ-41 BP-69と出土遺物

色ローム(いくぶん汚れている) 3:褐色土(まだら。大きなロームの塊がみえる。上部は黒味が強く、ロームのまじりも少ない)

特徴 BH-12 南東壁側の床面から、確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。南東側床面の、凹凸が激しく、新旧関係は、BP-70>BH-12である。

遺物 覆土から、Ⅲ群A類土器(図Ⅶ-42:1)、Ⅲ群B₂類土器(図Ⅶ-42:2)、Ⅳ群A₂類土器(図Ⅶ-42:3・4)が出土している。1は、口縁部破片で、口唇上に刻目が施されている。3・4には、細い沈線文がみられる。

時期 覆土下層の床面に近い層位から、Ⅳ群A₂類土器が出土している。このことから、縄文時代後期に属すると思われる。

BP-71 (図Ⅶ-43)

位置 L-57 規模 1.34×1.31/0.59×0.87/0.48

土層 1:褐色土 1':暗褐色土 2:暗褐色土(土のしまりは他より少ない) 3:暗黄褐色土 4:褐色土(土にしまりあり) 5:黄褐色土

特徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに不整形である。木根の攪乱により、南東側壁の覆土が不明瞭になっている。

遺物 覆土から、Ⅱ群B₂類土器(図Ⅶ-43:1~5)、Ⅲ群A類土器(図Ⅶ-43:6)が出土している。

時期 遺物の出土状況から、縄文時代前期後葉のものと思われる。

BP-76 (図Ⅶ-44)

位置 N-55 規模 0.83×0.77/0.60×0.48/0.47

特徴 V層上面で確認された。土墳北東側で、BP-77と重複する。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形と推定される。新旧関係は不明である。

遺物 出土していない。

BP-77 (図Ⅶ-45)

位置 N-55・56 規模 0.85×0.66/0.45×0.41/0.47

特徴 V層上面で確認された。土墳南西側で、BP-76と重複する。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。断面は、壁中位に段をもつすり鉢状である。新旧関係は、不明である。

遺物 出土していない。

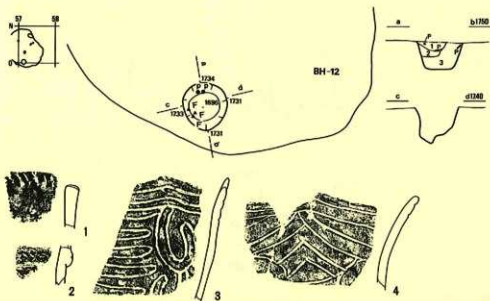
BP-79 (図Ⅶ-46)

位置 L-54 規模 1.08×0.83/0.93×0.67/0.23

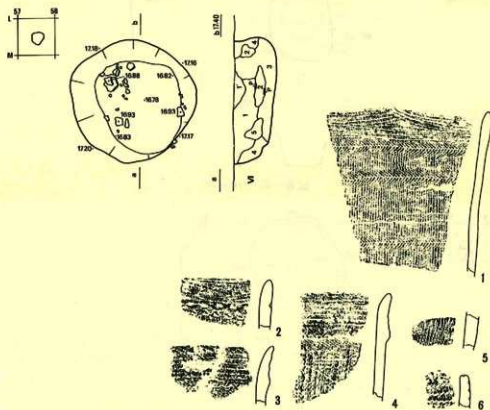
土層 1:褐色土(ローム粒が混じる。若干の炭化物粒が混じる)

特徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともにほぼ楕円形である。断面は、浅い皿状を呈する。土墳南東側で、BP-133と重複する。新旧関係は、不明である。

遺物 覆土から、Ⅳ群A₁類土器(図Ⅶ-46)が出土している。折返し口縁のもので、小さな山形の突起をもつ。地文は斜行縄文で、縄文の条は横走気味である。

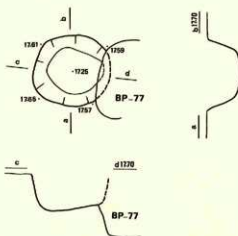


図Ⅵ-42 BP-70と出土遺物

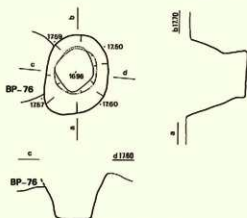


図Ⅵ-43 BP-71と出土遺物

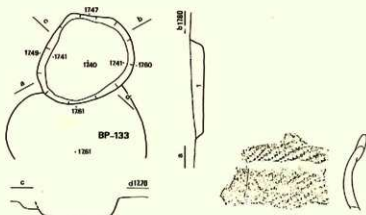
VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図Ⅳ-44 BP-77



図Ⅳ-45 BP-77



図Ⅳ-46 BP-79と出土遺物

BP-80 (図VII-47)

位置 L-54・55 規模 $1.20 \times 0.83 / 0.78 \times 0.71 / 0.26$

土層 1: 暗褐色土 2: 褐色土(ローム粒が混じる。若干の炭化物粒がまじる)

特徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともにほぼ楕円形である。土壇南壁上で、柱穴様の小ピット1基が確認された。この小ピットは、本土壇に伴うものとは考えられない。

遺物 覆土から、III群A類土器(図VII-47)が出土している。

BP-81 (図VII-48)

位置 K・L-54 規模 $0.97 \times 0.81 / 0.73 \times 0.69 / 0.43$

特徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。

遺物 覆土から、III群A類土器(図VII-48:1)、III群B₂類土器(図VII-48:2)、IV群A₂類土器(図VII-48:3)が出土している。

BP-86 (図VII-49)

位置 L-58 規模 $0.59 \times 0.44 / 0.37 \times 0.24 / 0.25$

土層 1: 暗茶褐色土(ローム粒は、ほとんど混ざらない) 2: 暗褐色土(ローム粒わずか。1%以下。見えるものは比較的大粒。土にしまりがある)

特徴 BP-100の西側で重複して確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形を呈する。新旧関係は、セクションからBP-86>BP-100である。

遺物 覆土から、III群A類土器(図VII-49:1・2)、IV群A₂類土器(図VII-49:3・4)、IV群B類土器(図VII-49:5)が出土している。

BP-88 (図VII-50)

位置 L-59・60 規模 $0.95 \times 0.78 / 0.62 \times 0.60 / 0.36$

土層 1: 茶褐色土(ローム粒1%程度) 2: 暗褐色土(ローム粒くずれて不明瞭) 3: 暗黄褐色土(まだらぎみ) 3': 暗黄褐色土(とけかかってローム粒がわずかにみえる。他は3にくらべ均一に近い)

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともにほぼ楕円形を呈する。土壇南東壁ぎわの床面で、柱穴様の小ピット1基が確認された。この小ピットは、木根穴の様な感じもあり、ピットか否か、また付属するものか否かも判明しなかった。

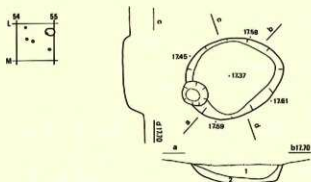
遺物 覆土から、III群A類土器(図VII-50:1~3)、石器(図VII-50:4)が出土している。3は口縁部隆起部分の破片で、器表・裏面に貼付帯がみられる。その下には、数条の沈線が施されている。4は、泥岩製のすり石で、扁平礫を半円状に粗く打ち欠き弦をすったものである。

BP-89 (図VII-51)

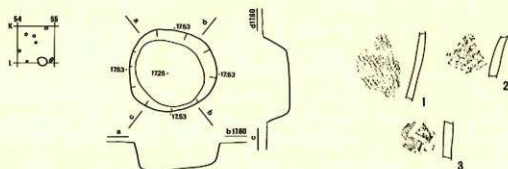
位置 K・L-53 規模 $1.62 \times 1.37 / 1.38 \times 0.99 / 1.04$

土層 1: 褐色土 2: 褐色土 3: 黒褐色土(炭化物粒と若干の焼土が混じる) 4: 暗褐色土(固くしまっていて粘性が強い。炭化物粒と若干の焼土が混じる) 5: 暗褐色土(炭化物粒と

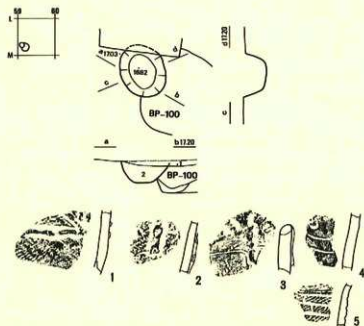
Ⅶ 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



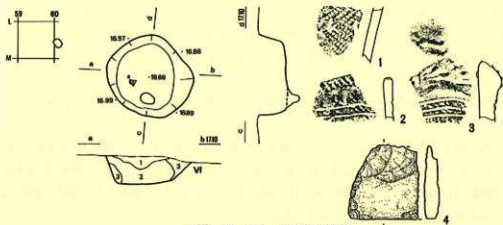
図Ⅶ-47 BP-80と出土遺物



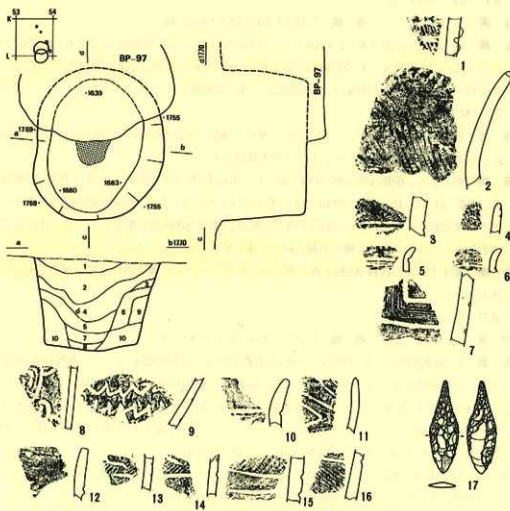
図Ⅶ-48 BP-81と出土遺物



図Ⅶ-49 BP-86と出土遺物



図Ⅶ-50 BP-88と出土遺物



図Ⅶ-51 BP-89と出土遺物

若干の焼土が混じる) 6:暗黄褐色土(ローム粒がブロック状に混じる) 7:黒色土(粘性強) 8:黒褐色土(粘性強) 9:暗黄褐色土 10:黄褐色土(VI層崩落土)

特 徴 VI層上面で確認された。土壌北西側で、BP-97と重複する。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形と推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底面の中央部から、グライ層が確認された。新旧関係は、BP-97に墳底面のグライ層が切られていることから、BP-97>BP-89である。

遺 物 覆土上位から中位にかけて、III群A類土器(図VII-51:1~3)、III群B₂類土器(図VII-51:4)、IV群A₂類土器(図VII-51:16)が出土している。覆土下位からは、IV群A₂類土器(図VII-51:5~15)、石器(図VII-51:17)が出土している。5~7は、櫛状工具で条線文を描き、それを沈線によって録取りしたものである。

時 期 遺物の出土状況からみて、縄文時代後期前葉に属するものと思われる。

BP-90 (図VII-52)

位 置 L-53 **規 模** 1.46×1.23/1.04×0.92/1.16

土 層 1:暗褐色土(径1.0~2.0cmのローム粒が混じる) 2:黄褐色土(径2.0~3.0cmのローム粒) 3:褐色土 4:暗褐色土(径2.0cm前後のローム粒が多量に混じる。ボロボロ。炭化物が混じる) 5:黄褐色土(VI層崩落土) 6:黄褐色土(ボロボロしている。ブロック状) 7:黒褐色土

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底中央部から、グライ層が確認された。

遺 物 覆土から、III群A類土器(図VII-52:1)、III群B₂類土器(図VII-52:2)、IV群A₂類土器(図VII-52:3~10)、石器(図VII-52:11)が出土している。1は、山形の隆起部分の破片である。突起部に「ボタン」状の貼付を有し、縦位、横位の沈線文が施されている。11は、安山岩製のたたき石である。礫の長軸方向の一端を使用したものである。

時 期 覆土下位からIV群A₂類土器が多くみられることから、縄文時代後期に属するものと思われる。

BP-91 (図VII-53)

位 置 L-55 **規 模** 1.47×1.35/0.92×0.90/1.21

土 層 1:暗黄褐色土 2:褐色土(径0.5cm前後のローム粒が混じる) 3:黄褐色土(多量のローム粒が混じる) 4:暗黄褐色土 5:黄褐色土(VI層崩落土、3層と類似するがボロボロ) 6:褐色土(粒子の細かい炭化物が混じる) 7:黄褐色土(VI層の崩落土) 8:褐色土(径2.0cm前後のローム粒と黒色土の混じりボロボロ) 8':褐色土(8層と同質。8層よりVI層の混じが多い) 9:黄褐色土(VI層崩落土) 10:黒褐色土

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口が楕円形、墳底が隅丸方形を呈する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底面中央部から、グライ層が確認された。

遺 物 覆土から、III群B₂類土器(図VII-53:1)、IV群A₂類土器(図VII-53:2・3)、石器(図

VII-53:4・5)が出土している。4・5は、頁岩製の有茎石鐏である。

B P-92 (図VII-54)

位置 K-50 規模 $1.19 \times 0.78 / 0.74 \times 0.60 / 0.36$

土層 1:褐色土 2:暗黄褐色土(径0.5cmのローム粒が多量に混じる) 3:暗褐色土(炭化物粒が混じる) 4:黄褐色土(VI層ボロボロ)

特徴 VI層上面で確認された。土壇南東側で、柱穴様の小ビットが重複する。このビットは、本土壇に付属するものではない。平面形は、墳口が楕円形、墳底が円形を呈するものと推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

時期 遺物の出土状況からみて、縄文時代後期前葉に属するものと思われる。

B P-93 (図VII-55)

位置 K-59 規模 $0.97 \times 0.76 / 0.75 \times 0.52 / 0.35$

土層 1:褐色土(わずかに木炭を含む)

特徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに菱形に近い方形を呈する。

遺物 覆土から、III群A類土器(図VII-55:1)、IV群A₂類土器(図VII-55:2)が出土している。

B P-94 (図VII-56)

位置 L-52 規模 $1.38 \times 1.24 / 0.85 \times 0.70 / 0.84$

土層 1:暗黄褐色土 2:褐色土(ローム粒の混入が多い。ボロボロしている) 3:褐色土(粒子の細かい土) 4:黒褐色土(炭化物粒が多量に混入する) 5:黄褐色土(VI層崩落土)

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに不整形を呈する。土壇中央からやや西よりの床面から、グライ層が確認された。

遺物 覆土上位から、III群B₂類土器(図VII-56:1・2)が出土している。覆土下位からは、IV群A₂類土器(図VII-56:3~5)が出土している。1は、貼付帯がみられる。3は、折り返し口縁と思われる。4は、沈線文が施されている。

時期 遺物の出土状況からみて、縄文時代後期前葉に属するものと思われる。

B P-96 (図VII-57)

位置 K-54 規模 $0.91 \times 0.72 / 0.56 \times 0.32 / 0.59$

土層 1:褐色土(炭化物粒が混じる) 2:暗黄褐色土(径2.0~3.0cmのローム粒が多量に混じる) 2':暗黄褐色土(2層と同質。2層が固くしまっているのに対して、2'はボロボロ。)

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口が方形、墳底が不整形を呈する。土壇北側の壁中位に段を持つが、これは壁の崩落によるものと思われる。

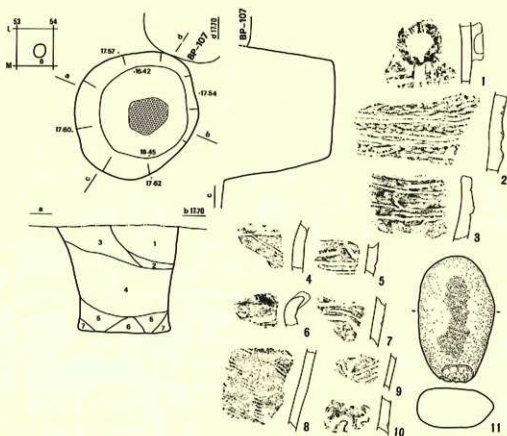
遺物 覆土から、IV群A₁類土器(図VII-57:1)が出土している。

B P-97 (図VII-58)

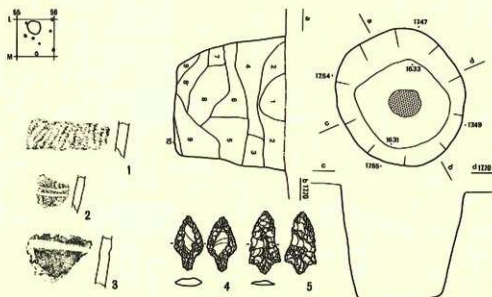
位置 K-53 規模 $1.68 \times 1.35 / 1.07 \times 0.92 / 1.23$

土層 1:褐色土 2:褐色土(ローム混入量が多く色調は1層より明るい。若干の炭化物粒が

VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図Ⅴ-52 BP-90と出土遺物



図Ⅴ-53 BP-91と出土遺物

混じる) 3:黒褐色土 4:暗黄褐色土(径2.0cm 前後のローム粒)が多量に混じる) 5:暗黄褐色土 6:褐色土(ボロボロしている。炭化物が多量に混じる) 7:黄褐色土(VI層崩落土) 8:褐色土(6層と同質。炭化物は混じらない) 9:褐色土(粒子の細かい土)

特 徴 VI層上面で確認された。土壌南東側で、BP-89と重複する。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形を呈する。壁中に段をもつが、これは壁が崩落したものと思われる。本来はほぼ垂直に立ち上がっていたものと思われる。墳底面中央部からやや北よりの床面から、グライ層が確認された。

遺 物 覆土から、Ⅲ群A類土器(図Ⅶ-58:1)、Ⅳ群C類土器(図Ⅶ-58:2)が出土している。

BP-98 (図Ⅶ-59)

位 置 L-53・54 規 模 2.14×1.35/1.87×0.92/0.97

土 層 1:暗黄褐色土(径1.0cmのローム粒が多量に混じる) 2:暗黄褐色土(径1.0cm程のローム粒が多量に混じる) 3:暗褐色土(粘性強) 4:暗黄褐色土(1層より黒褐色土の混じりが多い) 5:暗黄褐色土(1層より黄褐色土(VI層)が多く混じる。ブロック状に混じる) 6:暗黄褐色土(5層と同質、5層より黒褐色土が多く混じる。炭化物が混じる)

特 徴 VI層上面で確認された。土壌北西側で、BP-131と切り合い、BP-132と重なり合う。平面形は、墳口がひょうたん形と推定され、墳底が不整形を呈する。墳底面中央部から、グライ層が確認された。重複の新旧関係は、BP-132>BP-98>BP-131である。

遺 物 覆土下位から、Ⅳ群A₂類土器(図Ⅶ-59:1・2)、石器(図Ⅶ-59:3)が出土している。1・2は、同一個体の破片と思われる。沈線文による曲線的な文様が施されている。3は、くぼみ石である。材質は、泥岩である。

BP-99 (図Ⅶ-60)

位 置 K-54 規 模 0.75×0.62/0.19×0.16/0.57

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口が楕円形、墳底が円形である。断面は、すり鉢状である。

遺 物 覆土からⅣ群A₂類土器が出土している。(図Ⅶ-60:1・2)

BP-100 (図Ⅶ-61)

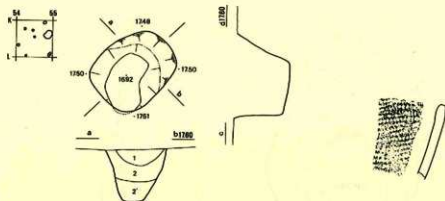
位 置 L-58 規 模 0.92×0.72/0.62×0.56/0.37

土 層 1:暗茶褐色土(ローム粒はほとんどまざらない) 2:暗茶褐色土(ローム粒2~3%) 3:褐色土(まだら。褐色土の中にロームのかたまりがはんら状に入る。土のしまりはある) 4:茶褐色土(まだら。土のしまり比較的不い。(すき間は感じられない)) 5:暗黄褐色土(まだら。土のしまりない)

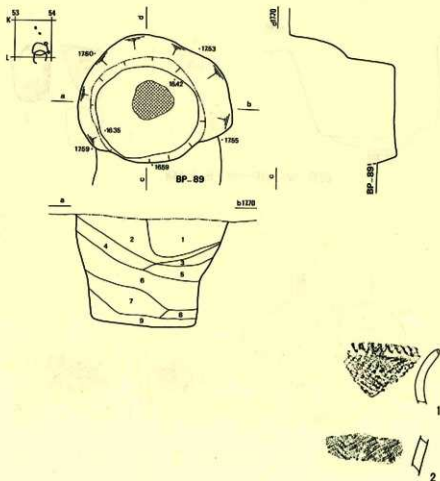
特 徴 V層上面で確認された。土壌北西側で、BP-86と重複する。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形と推定される。新旧関係は、セクションからBP-86>GP-100である。

遺 物 出土していない。

BP-101 (図Ⅶ-62)

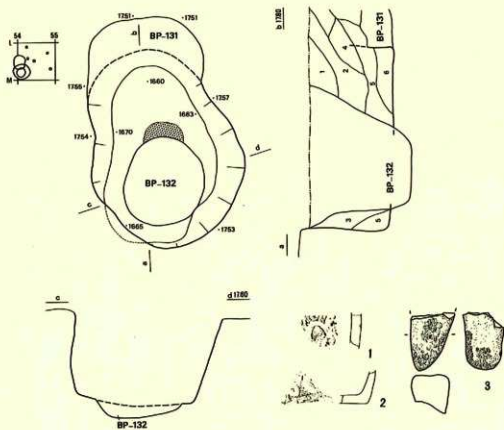


図Ⅶ-57 BP-96と出土遺物

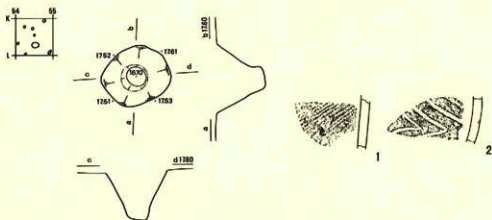


図Ⅶ-58 BP-97と出土遺物

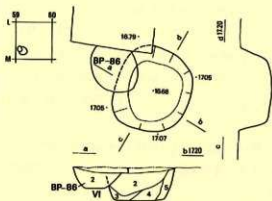
VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



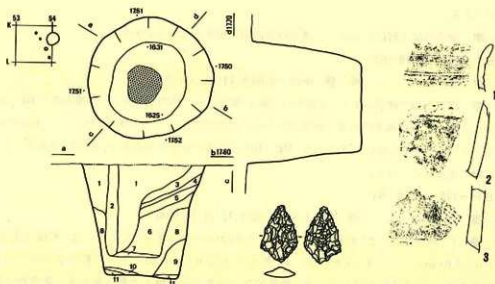
図Ⅴ-59 BP-98と出土遺物



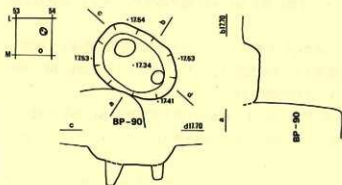
図Ⅴ-60 BP-99と出土遺物



図Ⅶ-61 BP-100



図Ⅶ-62 BP-101と出土遺物



図Ⅶ-63 BP-107

位置 K-53・54 規模 $1.35 \times 1.27 / 0.78 \times 0.84 / 1.26$

土層 1:暗黄褐色土 2:黄褐色土(ボロボロ。多量の径2.0cm前後のローム粒が混じる) 3:暗褐色土(炭化物が混じる) 4:褐色土 5:暗褐色土(3層と同質) 6:3層5層と類似するがローム粒が多量に混じりボロボロ) 7:黒褐色土 8:黄褐色土(VI層の崩落土) 9:黒褐色土(径2.0cm前後のローム粒が多量に混じる。ボロボロ) 10:黒色土 11:黄褐色土(VI層崩落土)

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともにほぼ円形を呈する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底面の中央部から、グライ層が確認された。セクションでみる限り、2基の遺構が重複しているようにも思える。

遺物 覆土から、IV群A₂類土器(図Ⅶ-62:1~3)、石器(図Ⅶ-62:4)が出土している。遺物は、いずれも覆土8層の下位から出土している。8は、頁岩製の石鏃である。有基凸基のものである。

時期 遺物の出土層位からみて、縄文時代後期に属するものと思われる。

BP-107 (図Ⅶ-63)

位置 L-53 規模 $0.94 \times 0.64 / 0.74 \times 0.50 / 0.25$

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。土墳南壁でBP-90と接する。土墳長軸方向の東・西壁ぎわから、柱穴様の小ビットが確認された。これらの小ビットは、いずれも浅い皿状である。BP-107に付属するものか否かは、判定できなかった。

遺物 出土していない。

BP-124 (図Ⅶ-64)

位置 N-53 規模 $1.32 \times 1.27 / 1.17 \times 1.10 / 1.00$

土層 1:暗褐色土 2:暗褐色土(径1.0~2.0cmのローム粒が混じる) 3:黒褐色土(径1.0~2.0cmのローム粒が混じる) 4:黒色土(径1.0~2.0cmのローム粒が混じる) 5:暗黄褐色土(炭化物粒が混じる) 6:暗黄褐色土(5層より黒色土の混入量が多く炭化物は混じらない) 7:黒色土(4層と同質) 8:黄褐色土(VI層と同質。ブロック状) 9:暗黄褐色土 11:黒褐色土(ロームがブロック状に混じる) 12:暗黄褐色土(ボロボロ。炭化物が混じる)

特徴 VI層上面で確認された。調査中に土壌セクションから2基の遺構が重複して確認された。土墳南側で、BP-200と重複する。新旧関係は、セクションからBP-124>BP-200である。墳底面の中央部から、グライ層が確認された。

遺物 覆土から、Ⅲ群B₂類土器(図Ⅶ-64:1)、IV群A₂類土器(図Ⅶ-64:2・3)が出土している。2は、鋸歯状に近い文様のものである。3は、磨消縄文による「カニのハサミ」状の文様が施されているものである。

時期 遺物は、いずれも覆土下位から出土しているため、縄文時代後期に属するものと思われるが、特定するにはいたらなかった。

BP-125 (図VII-65)

位置 N-54 規模 $1.19 \times 1.06/1.04 \times 0.77/1.23$

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともにひょうたん形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土壌西壁ぎわの底面から、グライ層が確認された。BP-193・201と重複している。新旧関係は、BP-125 < 201 < 193 である。

遺物 出土していない。

BP-131 (図VII-66)

位置 L-53・54 規模 $1.33 \times 1.25/1.10 \times 1.20/0.94$

土層 1: 暗褐色土 2: 暗黄褐色土(黒褐色土の混じりが多い) 3: 暗黄褐色土(黄褐色土が多く混じる。ブロック状に混じる。粘性強) 4: 黄褐色土(VI層と同質。崩落) 5: 暗褐色土(VI層と思われるロームがブロック状に混じる) 6: 黒褐色土

特徴 VI層上面で確認された。土壌南東側で、BP-98・132と重複する。平面形は、墳口・墳底ともに円形と推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。新旧関係は、BP-132 > BP-98 > BP-131 である。墳底面の北東側壁よりのところから、グライ層が確認された。

遺物 覆土から、III群A類土器(図VII-66:1・2)、III群B₂類土器(図VII-66:3)、IV群A₂類土器(図VII-66:4・5)が出土している。

BP-132 (図VII-67)

位置 L-53・54 規模 $1.59 \times 1.41/0.65 \times 0.69/1.18$

土層 1: 褐色土(径1.0~1.5cmのローム粒が多量に混じる) 2: 褐色土(径1.0~1.5cmのローム粒が多量に混じる) 3: 褐色土(径2.0~3.0cmのローム粒が多量に混じる。炭化物が混じる。粘性強) 4: 黒褐色土(径2.0~3.0cmのローム粒と粒子の細かい褐色土が混じる) 5: 暗褐色土(多量の炭化物が混じる。粒子細かい) 6: 暗黄褐色土(粘性強) 7: 黄褐色土(ロームブロック+若干の褐色土。粘性強)

特徴 VI層上面で確認された。土壌北西側で、BP-98・131と重複する。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形を呈すると推定される。新旧関係は、BP-132 > BP-98 > BP-131 である。

遺物 覆土から、III群A類土器(図VII-67:1)、III群B₂類土器(図VII-67:2)が出土している。

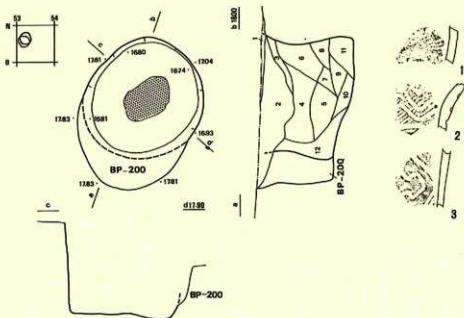
BP-133 (図VII-68)

位置 L・M-53 規模 $1.51 \times 1.33/1.27 \times 1.06/0.68$

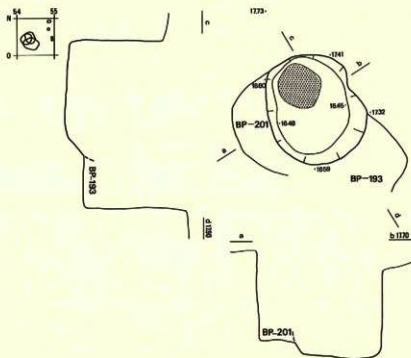
土層 1: 暗黄褐色土(汚れてはいるがVI層と同質) 2: 暗褐色土 3: 黒褐色土(粘性強) 4: 暗褐色土(ボロボロ。2・3層よりローム粒が多く混じる) 5: 黒褐色土(粘性強)

特徴 VI層上面で確認された。土壌北西側でBP-79、南側でBP-138、西側でBP-142と重複する。平面形は、墳口・墳底ともに不整形である。墳底面のほぼ中央部から、グライ層が確認された。新旧関係は、セクションからみてBP-142 > BP-133 > BP-138 である。

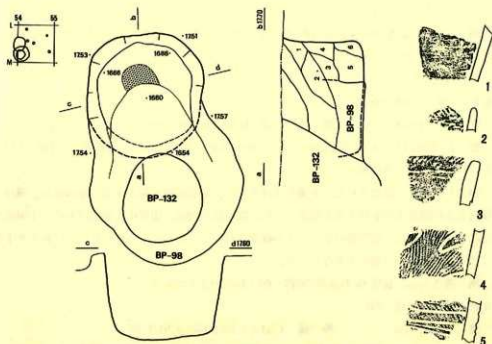
VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



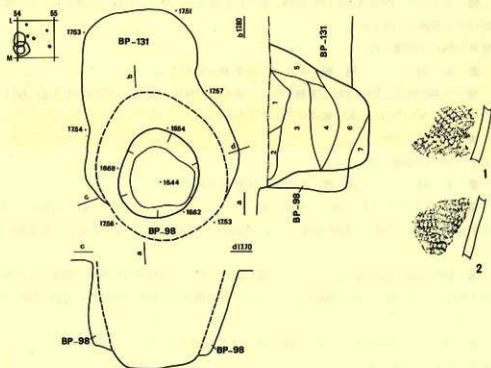
図Ⅶ-64 BP-124と出土遺物



図Ⅶ-65 BP-125



図Ⅶ-66 BP-132と出土遺物



図Ⅶ-67 BP-131と出土遺物

BP-79 と 133 との切り合いについては、不明である。

遺物 覆土からⅢ群 A 類土器(図Ⅶ-68:1)、Ⅲ群 B₂ 類土器(図Ⅶ-68:2)、Ⅳ群 A₂ 類土器(図Ⅶ-68:3~6)が出土している。

時期 縄文時代後期のものと思われる。

B P-134 (図Ⅶ-69)

位置 J-53・54 規模 $1.96 \times 0.90 / 1.71 \times 0.73 / 0.75$

土層 1: 褐色土(径 1.0~2.0 cm のローム粒が多量に混じる) 2: 黄褐色土(VI層と同質)
3: 暗褐色土 4: 黒褐色土

特徴 V層上面で確認された。土壌のほぼ半分が、発掘区外に存在する。平面形は、塙口・塙底ともに限丸方形を呈すると推定される。掘り込み面は、Ⅲ層中と推定される。土壌南東壁隅と南壁ぎわに、柱穴様の小ビットが確認された。これらの小ビットは、いずれも本土壌に伴うものか否かは判定できなかった。

遺物 覆土から、Ⅱ群 B₁ 類土器(図Ⅶ-69:1)が出土している。

B P-138 (図Ⅶ-70)

位置 L・M-54 規模 $1.41 \times 1.12 / 1.06 \times 0.94 / 1.12$

特徴 土壌北側で、BP-133・BP-142 と重複する。平面形は、塙口・塙底ともに楕円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺物 覆土から、Ⅳ群 A₂ 類土器(図Ⅶ-70:1)が出土している。沈線で区画され、その間に蛇行する沈線文が施されている。

B P-141 (図Ⅶ-71)

位置 L-50 規模 $0.81 \times 0.74 / 0.48 \times 0.47 / 1.12$

特徴 土壌北側で、BP-135 と重複する。平面形は、塙口・塙底ともに円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。新旧関係は、不明である。

遺物 出土していない。

B P-142 (図Ⅶ-72)

位置 L-54 規模 $0.76 \times 0.56 / 0.52 \times 0.37 / 0.77$

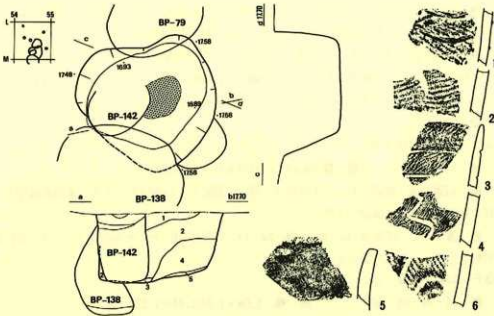
土層 1: 黒褐色土(土粒は細かく粘性は強い) 2: 褐色土(土粒は細かく粘性は強い) 3: 暗黄褐色土(土粒は細かく粘性は強い) 4: 黒褐色土(土粒は細かく粘性は強い。炭化物が混じる)

特徴 BP-133 の調査時に、セクション面で確認された。平面形は、塙口・塙底ともに楕円形と推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。新旧関係は、BP-142 > BP-133 > BP-138 である。

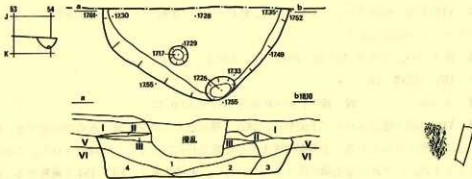
遺物 覆土から、Ⅳ群 A₂ 類土器(図Ⅶ-72:1・2)が出土している。

B P-143 (図Ⅶ-73)

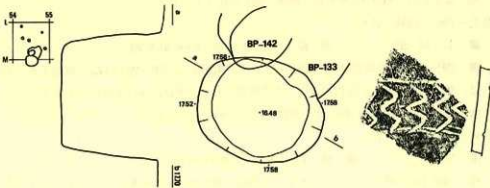
位置 J-54・55 規模 $1.55 \times 0.65 / 1.10 \times 0.42 / 0.47$



図Ⅶ-68 BP-133と出土遺物



図Ⅶ-69 BP-134と出土遺物



図Ⅶ-70 BP-138と出土遺物

土 層 1:黒褐色土(径0.5cm程のローム粒が多量に混じる) 2:暗褐色土(炭化物が混じる) 3:黄褐色土 4:暗褐色土(ロームがブロック状に混じる)

特 徴 VI層上面で確認された。土壌のほぼ半分が、発掘区外に存在する。また、土壌北東側は風倒木痕によって攪乱を受けている。平面形は、墳口・墳底ともに円形と推定される。掘り込み面は、発掘区境界面のセクションから、III層中と思われる。

遺 物 出土していない。

B P-153 (図VII-74)

位 置 M-55 規 模 $0.85 \times 0.74 / 0.62 \times 0.47 / 0.30$

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。土壌北西壁上で柱穴様の小ビットが確認された。

遺 物 覆土から、IV群 A₂ 類土器(図VII-74:1)、石器(図VII-74:2)が出土している。2は頁岩製の石鏃で、有茎凸基のものである。

B P-154 (図VII-75)

位 置 M・N-55・56 規 模 $1.56 \times 1.32 / 1.44 \times 1.22 / 0.20$

土 層 1:暗褐色土(径0.5~1.0cmのローム粒が多量に混じる) 2:暗黄褐色土(径0.5~1.0cmのローム粒が多量に混じる。炭化物が混じる。粘性強)

特 徴 VI層上面で確認された。土壌南側で、B P-154と重複する。また、南東壁ぎわで柱穴様の小ビットが確認された。

遺 物 覆土から、II群 B₁ 類土器(図VII-75)が出土している。

B P-155 (図VII-76)

位 置 N-55 規 模 $1.07 \times 0.87 / 0.89 \times 0.82 / 0.22$

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに南北に長い五角形を呈する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土壌南西壁上とその壁ぎわに、小ビットが確認された。これらの小ビットは、いずれも本土壌に伴うものではない。土壌北側で、BP-154と重複する。新旧関係は、不明である。

遺 物 覆土から、III群 B₂ 類土器(図VII-76)が出土している。

B P-156 (図VII-77)

位 置 L・M-52 規 模 $1.17 \times 1.04 / 0.68 \times 0.54 / 0.84$

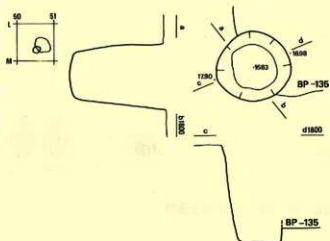
特 徴 BP-204・113 調査時に、確認された。土壌西側で、BP-204・113と重複する。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形を呈すると推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺 物 覆土から、IV群 A₂ 類土器(図VII-77)が出土している。

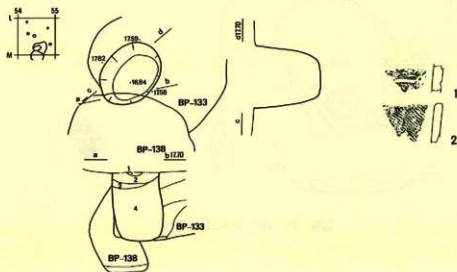
B P-168 (図VII-78)

位 置 M-51 規 模 $0.88 \times 0.89 / 1.02 \times 0.83 / 1.02$

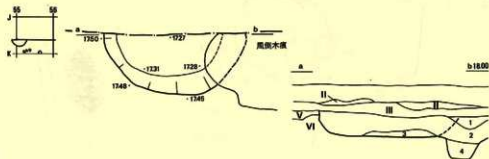
特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。壁は、土壌南壁がやや内湾して袋状になるが、その他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。墳底面中央部でグライ



図Ⅶ-71 BP-141 土遺物

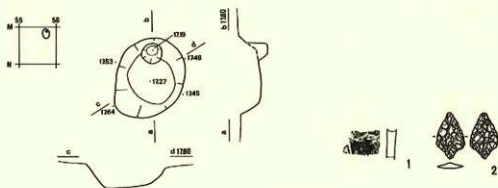


図Ⅶ-72 BP-142と出土遺物

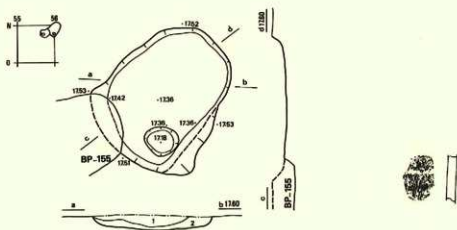


図Ⅶ-73 BP-143

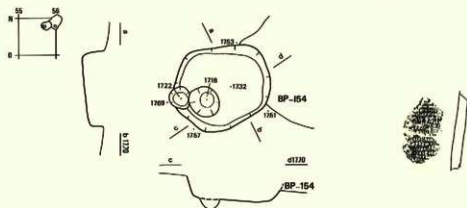
Ⅶ 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図Ⅶ-74 BP-153と出土遺物



図Ⅶ-75 BP-154と出土遺物



図Ⅶ-76 BP-155と出土遺物

層が確認された。

遺物 覆土から、IV群A₂類土器(図VII-78:1)が出土している。

BP-169 (図VII-79)

位置 L-50・51 規模 0.88×0.85/0.64×0.66/1.01

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底面のほぼ中央部から、グライ層が確認された。

遺物 覆土から、III群A類土器(図VII-79:1・2)、IV群A₂類土器(図VII-79:3)が出土している。1・2は、同一個体のものである。

BP-170 (図VII-80)

位置 J-50 規模 0.91×0.70/0.80×0.64/1.25

土層 1:黒褐色土(径1.0cm程のローム粒が混じる) 2:暗褐色土 3:黄褐色土(VI層と同質) 4:暗褐色土(3層と類似。炭化粒が混じる) 5・5':黄褐色土(VI層と同質。ポロポロ) 6:褐色土(5層と同質)

特徴 VI層上面で確認された。土壌のほぼ半分が、発掘区外に存在する。掘り込み面は、発掘区境界面のセクションからみてIII層中と思われる。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形と推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底面のほぼ中央部から、グライ層が確認された。

遺物 覆土から、IV群A₂類土器(図VII-80:1~3)、IV群B類土器(図VII-80:4)、石器(図VII-80:5)が出土している。5は、頁岩製の石鏃である。有茎尖基のものである。

BP-172 (図VII-81)

位置 J・K-54 規模 1.50×1.29/1.19×1.16/1.52

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに凹凸があるもののほぼ楕円形を呈する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底面の中央部から、グライ層が確認された。

遺物 覆土から、III群A類土器(図VII-81:1~3)、IV群A₂類土器(図VII-81:4~6)、石器(図VII-81:7・8)が出土している。7は、砂岩製のすり石である。扁平礫の側縁をすったもので、長軸方向の縁辺に打ち欠きがみられる。

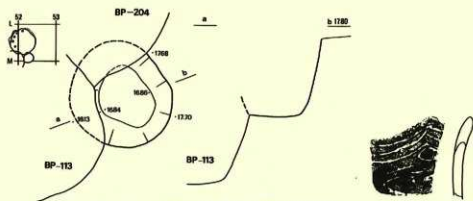
BP-173 (図VII-82)

位置 J-52・53 規模 1.33×0.97/0.82×0.68/1.57

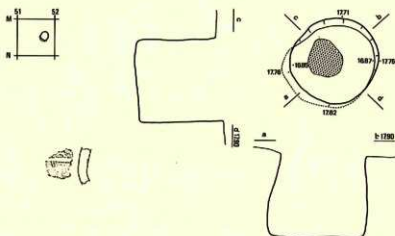
土層 1:暗黄褐色土(炭化物粒が混じる) 2:暗褐色土 3:黄褐色土(VI層と同質。ブロック状) 4:暗黄褐色土(ポロポロ) 5:暗褐色土(ポロポロ) 6:黄褐色土(VI層と同質)

特徴 VI層上面で確認された。土壌のほぼ半分が、発掘区外に存在する。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形と推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底面の中央部と推定されることから、グライ層が確認された。

遺物 覆土からIV群A₂類土器(図VII-82:1~3)が出土している。1は、細い沈線によって文様が施されている。3は、磨消縄文による「カニのハサミ」状の文様が施されているものと思われる。



図Ⅷ-77 BP-156と出土遺物



圖Ⅷ-78 BP-168と出土遺物

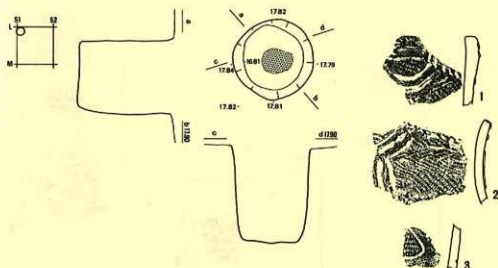
B P - 174 (VII-83)

位置 J-51 規模 $1.15 \times 0.74 / 0.89 \times 0.53 / 1.16$

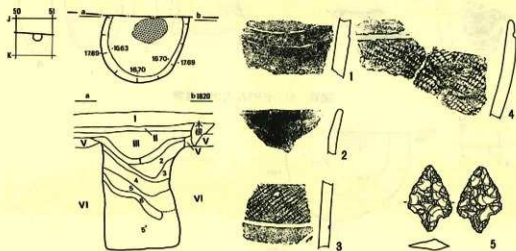
土 層 1: 黒褐色土(径0.5cm程のローム粒が混じる) 2: 黒褐色土(炭化物が混じる)
3: 黒褐色土(炭化物が混じる) 4: 暗褐色土(炭化物粒が混じる) 5: 黄褐色土(VI層。固く
しまっている) 6: 黄褐色土(VI層。ボロボロ) 6': 黄褐色土(VI層。ボロボロ。多量の炭化
物が混じる) 7: 黒褐色土(粘性強)

特徴 VI層上面で確認された。土壌のほぼ半分が、発掘区北西側境界外に存在する。平面形は確認された部分からみて、填口・填底ともに楕円形と推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面の中央部と推定されるところから、グライ層が確認された。このグライ層も半分以上が発掘区外に存在する。掘り込み面は、発掘区境界面からIII層中位と推定される。

遺物 覆土から、II群B₁類土器(図VII-83:1)、III群A類土器(図VII-83:2)、IV群A₂類



図VII-79 BP-169と出土遺物

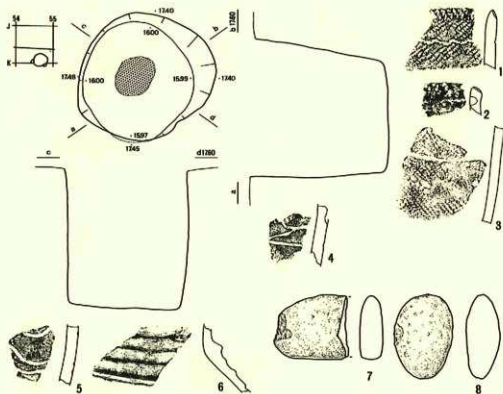


図VII-80 BP-170と出土遺物

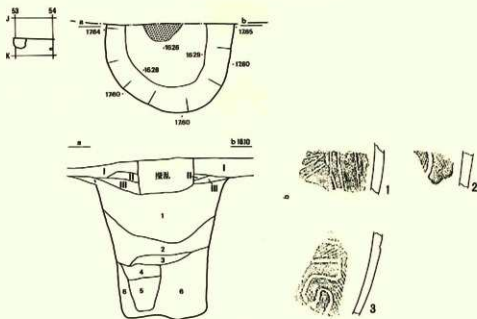
土器(図VII-83:3~11)、石器(図VII-83:12)が出土している。3は、口縁部直下に横走する沈線がめぐり、その下に渦巻文が施されるものと思われる。4・5は、胴部破片で渦巻文がみられる。6は、壺形土器の頸部破片である。頸部に、平行する沈線が施されている。5・6には、連弧文がみられる。7は、櫛状工具により条線文を描き、それを沈線により縁取りをする手法によって、文様が施されているものである。11は、鋸歯状に近い文様のものである。頸部に、数条の平行沈線と無文帯をもつ。12は、頁岩製の石鏃である。有茎平基のものである。

BP-175 (図VII-84)

VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図Ⅶ-81 BP172と出土遺物



図Ⅶ-82 BP173と出土遺物

位置 M-50・51 規模 $0.77 \times 0.56 / 0.94 \times 0.76 / 1.09$

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、塙口・塙底ともに楕円形である。壁は、土塙南東側がフラスコ状に張り出す。北西側壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。塙底面の北西壁よりから、グライ層が確認された。

遺物 覆土から、IV群 A₂ 類土器(図VII-84)が出土している。

BP-178 (図VII-85)

位置 J-51・52 規模 $1.42 \times 1.24 / 1.14 \times 0.94 / 0.59$

特徴 V層上面で確認された。土塙北東側で、柱穴様のビットと重複する。平面形は、塙口・塙底ともに楕円形である。

遺物 覆土から、IV群 A₂ 類土器(図VII-85:1~3)、石器(図VII-85:4)が出土している。4は、泥岩製のたたき石である。

BP-180 (図VII-86)

位置 J-51 規模 $1.29 \times 1.05 / 0.93 \times 0.87 / 1.15$

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、塙口・塙底ともに不整形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土塙中央部の床面から、グライ層が確認された。

遺物 出土していない。

BP-181 (図VII-87)

位置 J・K-51 規模 $0.89 \times 0.77 / 0.76 \times 0.73 / 1.19$

特徴 V層上面で確認された。土塙西側で、柱穴様のビットと重複する。このビットは、電柱施設時の穴と思われる。また、塙底面のやや北壁よりのところから、浅い柱穴様の小ビットが確認された。このビットは、 $0.26 \times 0.24 \times 0.06$ mの規模のもので、BP-181に付属するものと思われる。

遺物 覆土から、IV群 A₂ 類土器(図VII-87:1~3)が出土している。

BP-182 (図VII-88)

位置 K・L-51 規模 $0.78 \times 0.76 / 0.64 \times 0.51 / 1.19$

特徴 VI層上面で確認された。土塙北東側が、攪乱を受けている。平面形は、塙口・塙底ともに円形と推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺物 覆土から、IV群 A₂ 類土器(図VII-88:1)、石器(図VII-88:2)が出土している。2は、砂岩製のたたき石である。

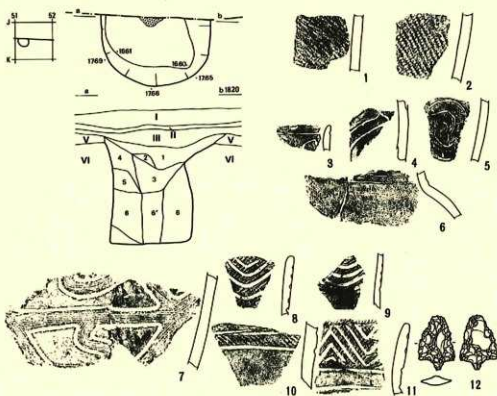
BP-189 (図VII-89)

位置 M・N-52 規模 $1.23 \times 1.14 / 0.94 \times 0.93 / 1.11$

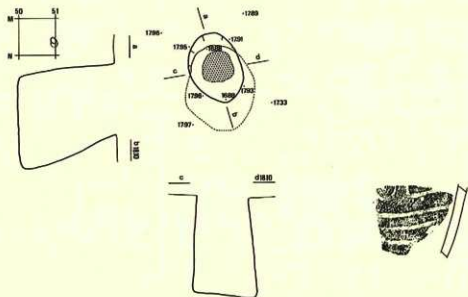
土層 1:暗褐色土 2:暗黄褐色土(ボロボロ。VI層と同質) 3:黒褐色土(ボロボロ。VI層と同質) 4:黄褐色土(固くしまっている。VI層と同質)

特徴 VI層上面で確認された。土塙北東側で、BP-49と重複する。平面形は、塙口・塙底ともに楕円形と推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土塙中央部の床面から、グライ層

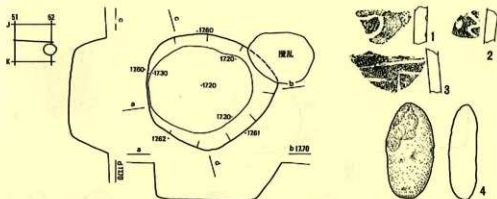
VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



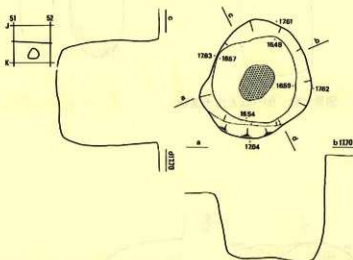
図Ⅵ—83 BP174と出土遺物



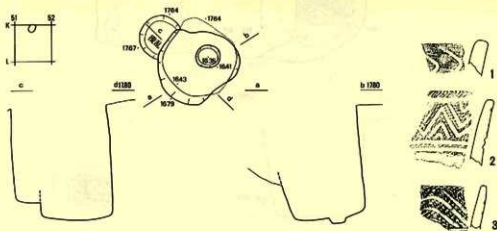
図VII-84 BP175と出土遺物



図Ⅶ-85 BP178と出土遺物

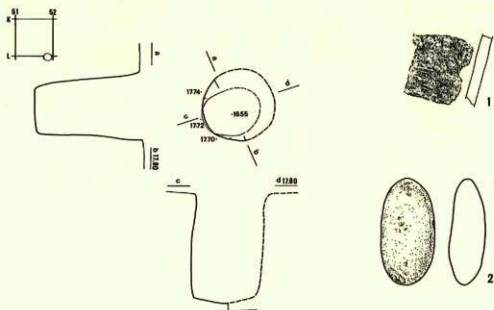


図Ⅶ-86 BP180

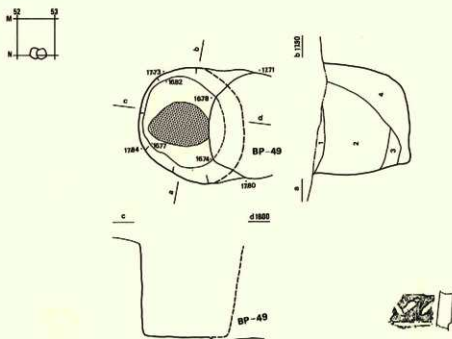


図Ⅶ-87 BP181と出土遺物

Ⅶ 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図Ⅶ-88 BP182と出土遺物



図Ⅶ-89 BP189と出土遺物

が確認された。新旧関係は、本土墳床面で確認されたグライ層が、BP-49によって切られていることから、BP-49>BP-189である。

遺物 覆土から、IV群A₂類土器(図VII-89)が出土している。横走する沈線がみられ、短い沈線による鋸歯状文様が施されている。

BP-190 (図VII-90)

位置 N-53 規模 1.23×1.08/0.90×0.84/1.20

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに円形である。墳底面の中央部から、グライ層が確認された。土壌の南東壁側で、BP-191・199と重複する。新旧関係は、BP-191<190<199である。

遺物 覆土から、IV群A₂類の土器片が出土している(図VII-90:1)。櫛状工具による条線文で文様を描き、それを沈線で縁取る手法がみられる。BP-191覆土出土の土器片と、同一個体のものと考えられる。

BP-191 (図VII-91)

位置 N・O-53 規模 1.26×1.16/1.19×0.96/0.85

特徴 VI層上面で確認された。土壌南東側で、BP-190・199と重複する。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形と推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土壌中央よりやや南東側の床面から、グライ層が確認された。切り合いの新旧関係は、不明である。

遺物 覆土から、IV群A₂類土器(図VII-91:1)が出土している。櫛状工具による条線で文様を描き、それを沈線で縁取っている。壺形土器の胴部上半部の破片と思われる。BP-190覆土出土の土器片と、同一個体のものと考えられる。

BP-192 (図VII-92)

位置 M・N-54 規模 0.82×0.81/0.75×0.79/0.85

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底面のやや西壁よりのところから、グライ層が確認された。

遺物 覆土からIV群A₂類土器が出土している(図VII-92:1)

BP-193 (図VII-93)

位置 N-54 規模 1.92×1.42/1.91×1.25/1.22

特徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底とも楕円形と推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底面のはほぼ中央部から、グライ層が確認された。土壌壁側でBP-125・201と重複している。新旧関係は、BP-125<201<193である。

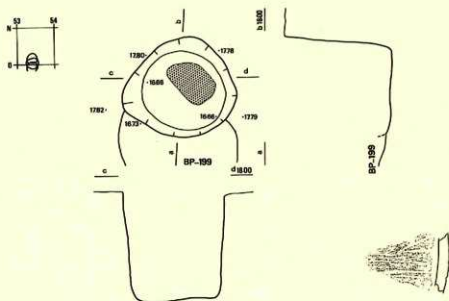
遺物 覆土からIII群A類土器(図VII-93:1・2)と石器(図VII-93:3)が出土している。3は、石鏃で先端部が欠損している。材質は、頁岩である。

BP-194 (図VII-94)

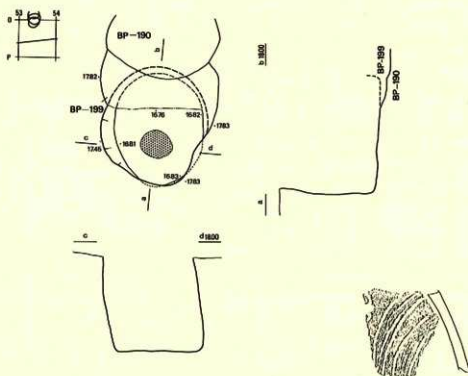
位置 M-54 規模 2.21×1.39/2.36×0.88/1.09

土層 1:褐色土(径2.0~3.0cmのローム粒) 2:褐色土(径2.0~3.0cmのローム粒。1

VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査



図Ⅷ-90 BP199と出土遺物



図Ⅷ-91 BP191と出土遺物

層に比してローム粒の含有量が多い) 3: 暗黄褐色土(固くしまっている。V層と類似) 4: 暗黄褐色土(固くしまっている) 5: 暗黄褐色土(ボロボロ) 6: 暗黄褐色土(5層より色調的に暗。炭化物が混じる) 7: 暗褐色土(粒子が細かくサラサラ) 8: 暗褐色土(ボロボロ)

特 徴 VI層上面で確認された。土壌北東側で、BP-198と重複する。平面形は、不整形である。壁は、確認された部分からみてほぼ垂直に立ち上がる。土壌中央部の床面から、グライ層が確認された。セクション面に、柱状のものが立っていたことを示す痕跡がみられる。BP-198との切り合い関係は、BP-194>BP-198である。

遺 物 覆土からII群 B₁類土器(図VII-94:1)、III群 B₂類土器(図VII-94:2)、IV群 A₂類土器(図VII-94:3~5)が出土している。

BP-195 (図VII-95)

位 置 L-55 規 模 1.17×1.01/0.81×0.79/1.22

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口が不整形、墳底が楕円形を呈する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土壌中央部の床面から、グライ層が確認された。

遺 物 覆土から、III群 B₂組土器(図VII-95:1)、IV群 A₂類土器(図VII-95:2)、石器(図VII-95:3)が出土している。3は、頁岩製のスクレパーである。

BP-196 (図VII-96)

位 置 L・M-52・53 規 模 1.63×1.41/1.36×1.09/1.22

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに不整形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土壌南東側壁付近の床面から、グライ層が確認された。

遺 物 覆土から、III群 A類土器(図VII-96:1)、IV群 A₂類土器(図VII-96:2・3)が出土している。3は、口縁部の隆起部の破片で、器表・裏面に沈線による連文がみられる。

BP-197 (図VII-97)

位 置 L-54 規 模 0.70×0.62/0.56×0.43/0.65

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺 物 出土していない。

BP-198 (図VII-98)

位 置 M-54・55 規 模 1.62×1.28/1.41×1.35/1.21

土 層 1: 黄褐色土(VIと同質) 2: 暗褐色土 3: 黒褐色土(ボロボロ) 4: 暗黄褐色土(2層と同質) 5: 4層と類似 6: 黒褐色土(3層と同質)

特 徴 VI層上面で確認された。平面形は、墳口・墳底ともに楕円形を呈する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土壌中央部の床面から、グライ層が確認された。土壌西側で、BP-194と重複する。新旧関係は、BP-194>BP-198である。

遺 物 出土していない。

BP-199 (図VII-99)

VII 新道4遺跡 昭和60年度 B地区の調査

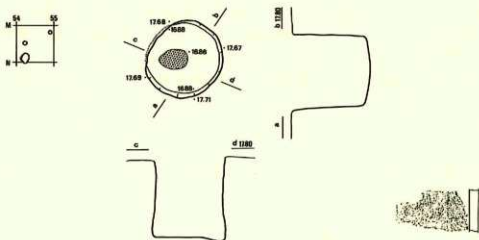


図 92 BP192と出土遺物

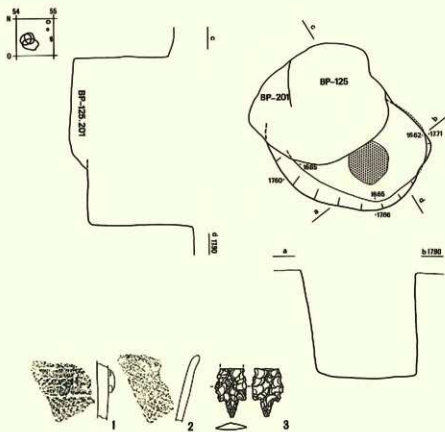
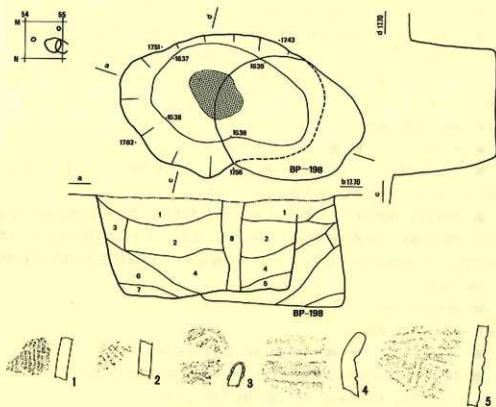
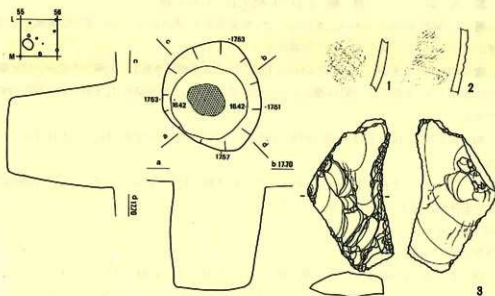


図 93 BP193と出土遺物



図Ⅶ-94 BP194と出土遺物



図Ⅶ-95 BP195と出土遺物

位置 N・O-53 規模 $1.40 \times 1.18 / 1.06 \times 1.02 / 1.21$

特徴 土壌北西側でBP-190、南側でBP-191と重複する。BP-190・191の調査中に壁が確認され土壌と認められたものである。平面形は、塙口・塙底ともに楕円形と推定された。壁の立ち上がりは、確認された東西方向の壁から、ほぼ垂直と思われる。切り合いの新旧関係は不明である。

BP-200 (図Ⅶ-100)

位置 N-54 規模 $1.19 \times 0.80 / 0.93 \times 0.75 / 0.85$

土層 1:暗黄褐色土(ロームがブロック状に混じる) 2:暗黄褐色土(ローム粒と黒色土が混じる。ポロポロ。炭化物粒が混じる)

特徴 VI層上面で確認された。土壌北側でBP-124と重複する。確認された部分から、平面形は、塙口・塙底ともに楕円形を呈する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がると推定される。土壌中央部からやや南壁よりの床面から、グライ層が確認された。新旧関係は、BP-124>BP-200である。

遺物 出土していない。

BP-201 (図Ⅶ-101)

位置 N-54 規模 $1.38 \times 1.20 / 1.36 \times 1.20 / 1.00$

特徴 BP-125・193と重複している。わずかに土壌の南西部が確認されたため、土壌と認められたものである。新旧関係は、BP-125<201<193である。

遺物 覆土からIV群A₂類土器が出土している(図Ⅶ-101:1)。

BP-203 (図Ⅶ-102)

位置 N-57 規模 $2.11 \times 1.82 / 1.74 \times 1.53 / 0.49$

土層 1:褐色土(ローム多い。まだら) 2:暗黄褐色土(汚れたローム) 2':暗黄褐色土(2層に大きなロームが混じる) 3:茶褐色土

特徴 BH-12の床面から、確認された。BH-12の北東側で重複し、土壌の大部分が住居跡内に存在する。平面形は、塙口・塙底ともに楕円形を呈する。新旧関係は、BH-12>BP-203である。

遺物 覆土から、III群B₂類土器(図Ⅶ-102:1)、III群A類土器(図Ⅶ-102:2)が出土している。

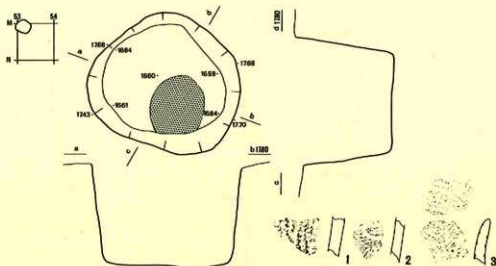
時期 遺物は、いずれも覆土からの出土であるが、BH-12に切られていることから、縄文時代中期後葉に属すると考えて良いだろう。

(4) Tピット

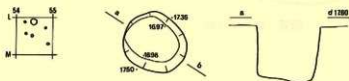
BP-55 (図Ⅶ-103)

位置 L・M-59・60 規模 $1.78 \times 1.44 / 0.92 \times 0.69 / 1.43$

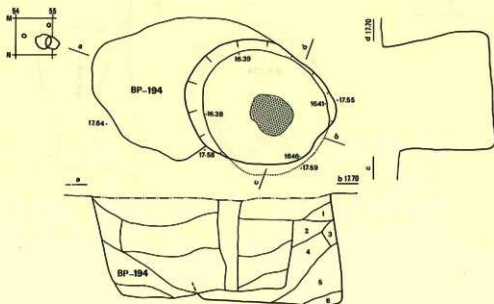
土層 1:黒褐色土 2:黒褐色土(ローム粒が多量に混じる) 3:黒褐色土(1層と同じ土質) 4:褐色土 5:褐色土(ローム粒が4層より多く混じる。粘性強) 6:暗黄褐色土(粘性



図Ⅶ-96 BP196と出土遺物

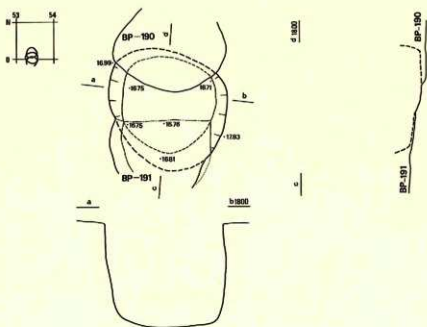


図Ⅶ-97 BP197

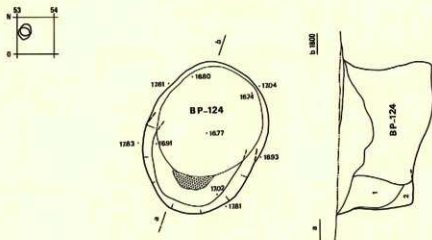


図Ⅶ-98 BP198

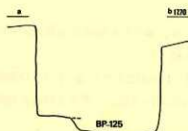
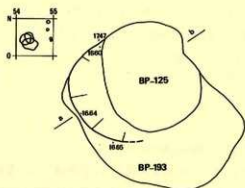
VII 新道 4 遺跡 昭和 60 年度 B 地区の調査



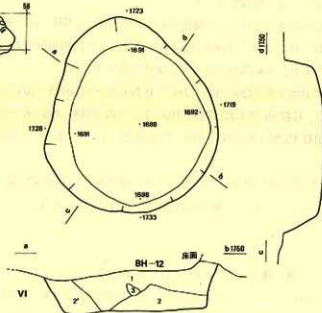
図Ⅶ-99 BP199



図Ⅶ-100 BP-200



図Ⅶ-101 BP-201と出土遺物



図Ⅶ-102 BP-203と出土遺物

強) 7:褐色土(粘性強) 8:黄褐色土(炭化物粒が混じる) 9:黒色土 10:黄褐色土
特 徴 V層上面で確認された。平面形は、墳口が楕円形、墳底が正方形を呈する。断面は、
摺鉢型である。墳底面中央部から、柱穴様の小ピットが確認された。この小ピットは、 $0.15 \times 0.13 \times 0.31$ mの規模で、断面は「V」字形を呈する。

遺 物 覆土から、IV群A₂類土器(図Ⅶ-103:1)が出土している。

B P-63 (図Ⅶ-104)

位 置 L-59・M-58 規 模 $3.41 \times 0.86/3.56 \times 0.17/1.35$

土 層 1:黒色土(III層。粘性強) 2:黒褐色土(ロームの微粒が混じる。粘性強) 3:黄褐色
土(VI層の崩落土。固くしまっている。ボロボロとなっている) 4:黄褐色土(VI層の崩落土。
固くしまっている。ボロボロとなっている)

特 徴 III層下面で確認された。形態は溝状だが、墳口の平面形は長楕円形を呈する。断面
は、両葉研形である。土壌北側で、BP-61と接する。

遺 物 覆土から、IV群B類土器(図Ⅶ-104:1-4)が出土している。1は、口縁部の隆起部分
の破片である。4には、無文帯の部分がみられる。1~4は、いずれも地文に斜位の縄文が施
されている。

B P-67 (図Ⅶ-105)

位 置 L-58・59 規 模 $2.99 \times 0.89/3.51 \times 0.15/1.63$

土 層 1:暗褐色土 1':褐色土 2:黄褐色土(ローム) 3:茶褐色土(土のしまりがない)
4:黒色土(土のしまりがない) 5:黄褐色ローム

特 徴 V層上面で、黒色土の細長い汚れとして確認された。西壁側で、BH-11と重複する。
新旧関係は、BP-67>BH-11である。平面形は、墳口・墳底ともに長楕円形である。壁は、
長軸方面では、袋状を呈するが、短軸方向では「V」字状に立ち上がる。

遺 物 覆土上位から、IV群B類土器(図Ⅶ-105:3・4)、IV群C類土器(図Ⅶ-105:5)が出土
している。覆土中位からは、II群B₁類土器(図Ⅶ-105:1)、石器(図Ⅶ-105:6)が出土して
いる。覆土下位からは、III群B₂類土器(図Ⅶ-104:2)が出土している。6は、くぼみ石であ
る。材質は、砂岩である。

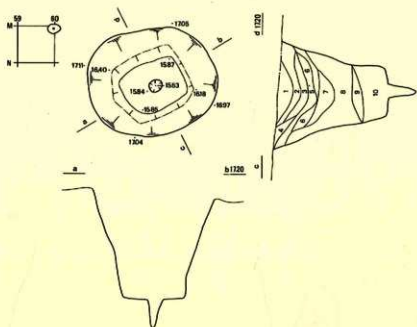
時 期 覆土下位からIII群B₂類土器が出土していることや、縄文時代中期後葉に属するも考
えられるBH-11を切っていることから、縄文時代後期に属すると思われる。

(5) 特殊なピット

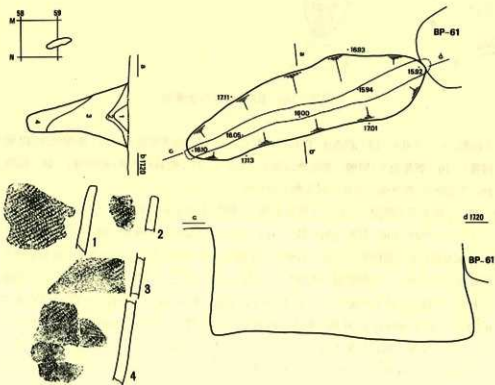
B P-204 (図Ⅶ-106)

位 置 L-51・52 規 模 $3.02 \times 2.61/2.72 \times 2.78/1.25$

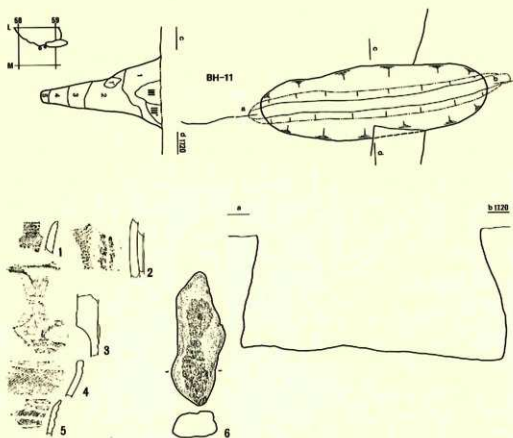
土 層 1:黒褐色土(径0.5 cm程のローム粒が混じる) 2:暗黄褐色土 3:黒褐色土(1層
より径0.5 cm以下のローム粒の混じりが多い) 4:暗黄褐色土(2層と同質。色調もほぼ同
じ) 5:黒褐色土 6:暗褐色土 7:黒褐色土 8:暗褐色土 9:炭化物層 10:暗黄褐色
土(VI層と同質。炭化物が混じる) 11:褐色土(多量の炭化物が混じる) 12:黄褐色土(VI層



図Ⅶ-103 BP-55と出土遺物



図Ⅶ-104 BP-63と出土遺物



図一〇五 BP-67と出土遺物

と同質。レンズ状) 13: 褐色土(炭化物が混じる) 14: 暗黄褐色土 15: 黒褐色土(12層と同質) 16: 黄褐色土(VI層。炭化物は混じらない) 17: 暗黄褐色土(粘性強) 18: 褐色土 19: 黒褐色土(粘性強。多量の炭化物が混じる)

特徴 V層上面で確認された。土壌南東側で、BP-113・156と重複する。新旧関係は、セクションからBP-156>BP-204>BP-113である。平面形は、墳口・墳底ともに南東―北西に長軸方向をもつ楕円形である。断面は、床面のあまり張り出さないフラスコ状を呈する。床面は平坦である。土壌東側の床面から、壁に沿った状態で5基の柱穴様の小ビットが確認された。規模は、以下の通りである。1: $0.23 \times 0.21 \times 0.07$ m, 2: $0.16 \times 0.15 \times 0.07$ m, 3: $0.22 \times 0.19 \times 0.09$ m, 4: $0.25 \times 0.23 \times 0.11$ m, 5: $0.21 \times 0.18 \times 0.06$ m。これらの小ビットは、いずれも本土壌に付属するものと思われるが、性格は不明である。また、土壌中央部からやや北よりの床面から、2本の炭化材が重なった状態で確認された。この炭化材は、丸木の半截したものである。樹種は、クリである。この炭化材の直上には、炭化物の層と炭化物の多量に混じった覆土層がみられた。しかし、炭化材下の床面やその周辺から、焼土は確認さ

れなかった。このことから、この炭化材は、持ち込まれたもので、床面での焚き火や火災等によるものではないと考えられる。

遺物 遺物は、すべて覆土からの出土である。覆土中位から、IV群C類土器(図VII-107:13・14)、IV群A₂類土器(図VII-107:15)が出土している。覆土下位からは、IV群A₁類土器(図VII-107:1、図VII-107:2~12)が出土している。石器(図VII-107:16~12)は、層位を特定することはできなかった。1には網目状撫糸文が施されている。3には山形隆起部に貼付文がみられる。13は、深鉢形土器の破片である。胴部上半にくびれをもち、その上部は無文帯である。地文は、羽状縄文が施され、その上に細い平行状線がみられる。14は、13と同様の深鉢形土器の胴部破片である。15は、壺形土器の破片である。頸部に2本の平行する条線がめぐる。16~19は、頁岩製の石鐙である。16~18は有茎平基、19は有茎凸基のものである。20は、頁岩製のスクレイパーである。21は、コアである。石質は、頁岩である。

時期 遺物の出土層位や出土状況からみて、縄文時代後期前~中葉に属するものと思われる。

(立川トマス)

(6) 焼土 (図VII-108・109)

本調査区で確認された焼土は、27カ所で、すべて地床炉である。

20カ所の焼土から46点の土器が出土している。II群、III群、IV群に属するものがある。

II群B₂類土器 (1、17) 1は撫糸文が施されているもの。

III群A類土器 (2、6、14、15) いずれも縄文が施されている体部の破片。

III群B₂類土器 (20、24、26) 24には横走気味の縄文が施されている。

IV群A₂類土器 (3~5、7、9、13、16、21~23、27) 5は底部に簾状のものの圧痕がつけられている。21は口唇が角形で口唇上にも縄文が施されている。

IV群B類土器 (25) 棒状工具により円形の刺突文がつけられている。

IV群C類土器 (9、18、19) 18は小形壺形土器の口の部分かと思われる。9は包含層出土のもの²⁾と同一個体の破片である。

註)北海道埋蔵文化財センター(1986)「VI 新道4遺跡 昭和60年度B地区の調査 4、包含層出土の遺物 図VI-109-14」『木古内町 建川1・新道4遺跡』

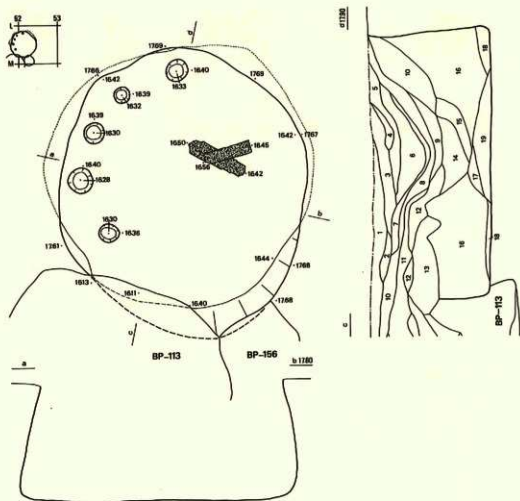
補遺 盛土地区出土の土器 (図VII-110)

K-45区の盛土7層から出土した小形の鉢形土器。器面には指頭による調整をのこし凹凸がある。胴部には炭化物が付着している。口縁は不規則な波状。口縁下2cm内外のところに、半截竹管状工具の背面もしくは腹面を使用して一条の沈線が巡らされ、そこから底部にかけて同様の工具の腹面で変形した入組文的文様が描かれている。(遠藤香澄)

(7) 小ビット群 (図VII-111・112・113)

発掘区全体で、約250基の小ビットが確認された。これらの小ビット群は、大きくて2カ所に集中して確認された。1カ所は、49~52ラインの範囲で確認された小ビット群で、標高は18.20~18.00mである。もう1カ所は、54~57ラインの範囲のもので標高17.40~17.80mで

Ⅶ 新道4道跡 昭和60年度 B地区の調査



図Ⅶ-106 BP-204

ある。いずれも小ピットの規模は、いずれも直径 20 cm、深さ 10～15 cm 程度のものとやや深い 40～50 cm 程のものがある。(立川トマス)

小ピットから出土した土器は、246 点である。Ⅱ群、Ⅲ群、Ⅳ群に属するものがある。

Ⅱ群 B₁ 類土器 (8、51、54) 8、54 には燃糸文、51 には縄文が施されている。

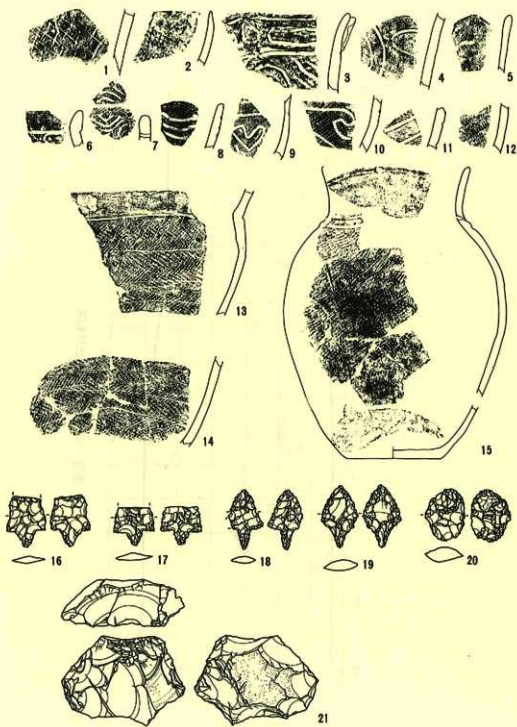
Ⅲ群 A 類土器 (9、11、24、28～30、42)

24、25、28 は縄文の施されたもの。29 は二又の山形隆起部の表裏面に、細い粘土紐による文様が施されている。体部には単節の斜行縄文が施され、口唇上に縄の圧痕がつけられている。

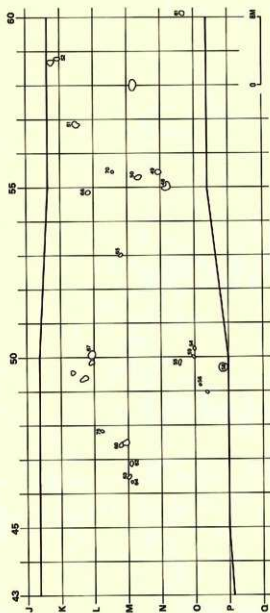
30 は縄文地に綾絡文と沈線が加えられている。42 は斜行縄文地に、2 条並列する綾絡文が 2 段施され、口唇上には縄による刻み目がつけられている。

Ⅲ群 B₂ 類土器 (14～16、21)

14～16、21 は縄文の施された体部の破片。14 は沈線で文様が加えられている。



図Ⅶ-107 BP-204の出土遺物



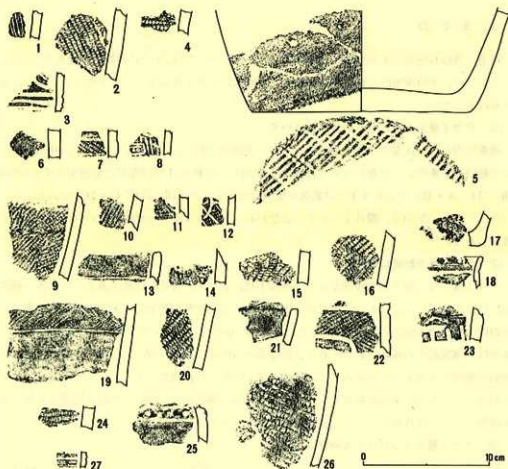
図一108 B地区の焼土分布図

IV群A₂類土器 (1~7、10、12、13、17~20、22、23、26、27、31~41、43~50、52、53、55~67)

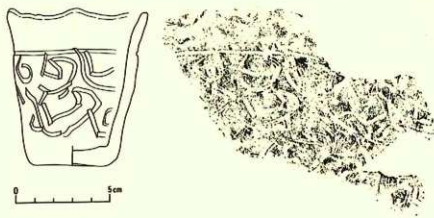
縄文地に沈線で文様を描くもの(1~6、10、23、34、40、41、43、45、52、53、56、57、59)、無文地に沈線で文様を描くもの(17、26、33、37、58、62~65)、磨消縄文の施されたもの(12、13、18、19、35、36、46~48、50、55、60)などがある。7、61、67は櫛状工具による条線で文様を描き、沈線で縁取るものかと思われる。22は隆起帯を細い沈線で縁取る文様のもの。6は口縁部に縦に蛇行する沈線文が施されている。口唇は角形でやや外反する。

23は底部、縄文地に何条もの平行する沈線で山形の文様を描くもの。49はやや外反する口縁部の内面に太い沈線で文様が施されている。53は縄文地の口縁部に、沈線でやや角ばった連弧文が施されるもの。55は深鉢土器の体部破片。磨消縄文で、沈線により渦巻文、流水文の文様が施されている。62、65は朱塗の土器。壺形土器と思われる。62には無文地に粗く沈線が施されている。65は薄手で内面にも朱が塗られている。

(遠藤香澄)



図Ⅷ-109 焼土出土の遺物



図VII-110 盛土出土の土器

3. ま と め

新道4遺跡B地区の平坦面地区発見の遺構と遺物については、すでに記載したとおりである。

ここでは、平坦面地区の調査で確認された墳底面にグライ層をもつビットについて述べ、まとめにかえたい。

(1) グライ層をもつビットの分布について

調査区内から、31基のグライ層をもつビットが確認された。これらのビットは、50～56ラインの範囲内に集中して分布しており、2形状の配列がみられる。1つは環状の配列をなすもの(図VII-114: A・B)で、もう1つは弧状の配列をなすもの(図VII-114: C・D)である。

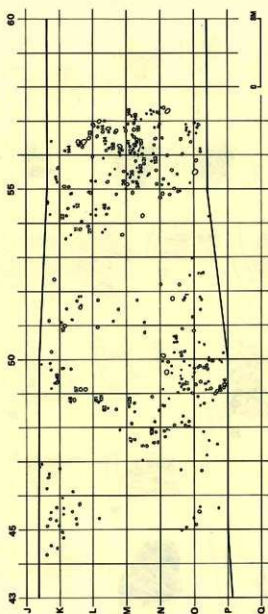
ただし、Cの配列は、環状をなすものと思われ、そのほぼ半分が発掘区外に存在するものと考えられる。

(2) グライ層の形成について

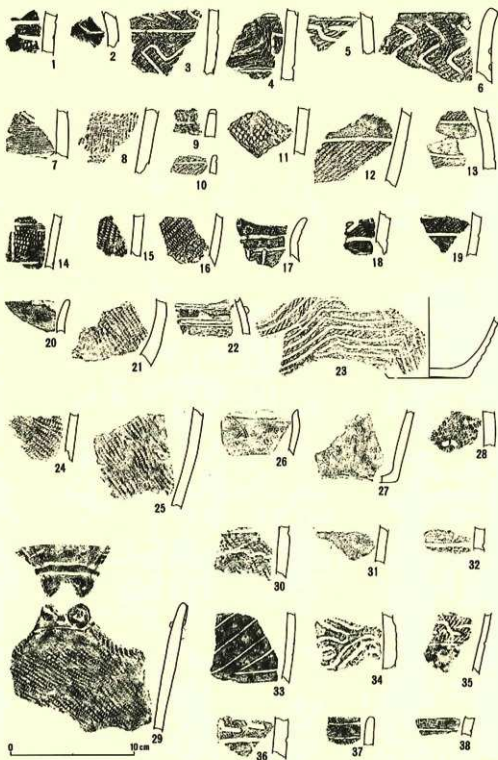
グライ層とは、地下水や停滞水による排水不良によって、含水酸化鉄が還元して青灰～緑灰色になった層をいう。これは、通常地下水位の高い谷底平野や凹地等に存在することが多く、本地区の様な地表面から1.5～2.0 m程の墳床面が存在するレベルでは、ほとんどみられない。本地区の墳底面から確認されたそれは、直径30～40 cmと範囲が狭く局部的なところから、人為的な要因によるものと考えられる。平面形は、円形から楕円形である。ここでみられるグライ層は、ビット内に立柱が存在し、その立柱の底面と墳底面との間に一時的な停滞水が生じ還元作用(グライ化作用)によって形成されたものと推測される。

(3) グライ層をもつビットの時期について

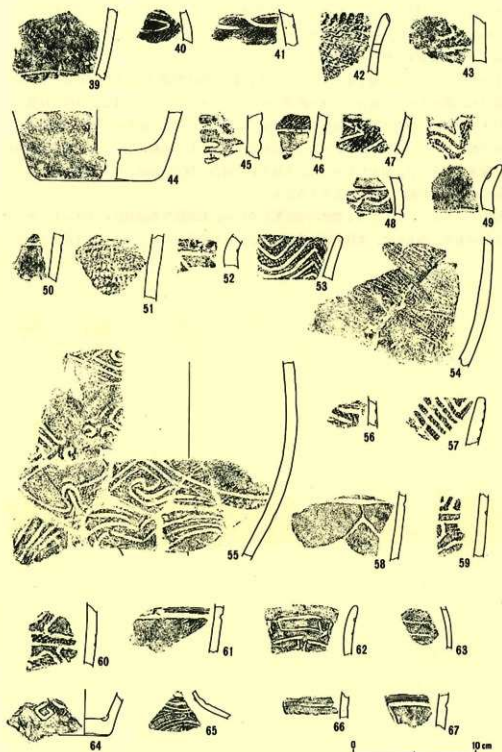
確認された31基のビットのうち、25基のビットから遺物が出土している。さらに、23基の覆土内から、大湯式に相当する土器片が出土している。これらの土器片は、ビット床面からの



図Ⅳ-111 中B地区小ピット群分布図



図Ⅷ-112 BSP出土の土器(1)



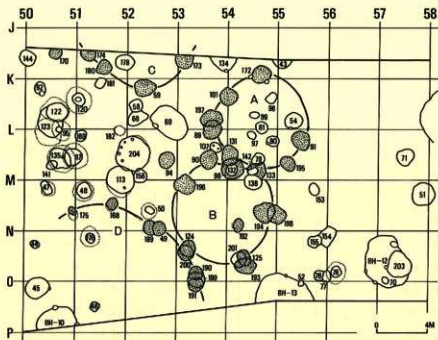
図Ⅶ-113 BSP出土の土器(2)

出土ではないが、出土状態からみて伴うものと考えられる。このことから、グライ層をもつビットの時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

(4) グライ層をもつビットの性格について

上記のことからグライ層をもつビットは、縄文時代後期のIV群 A₂ 類土器が出土する時期に構築され、環状あるいは弧状に立柱が配列されていたことになる。この場合、立柱の材質としては木または石が推測される。直径 30～40 cm、長さは、ビットの深さからみて 3 m 以上のものが立柱としてビット内に存在していたと思われる。しかし、石柱については、新道4遺跡周辺や発掘区内からは、出土しなかった。木柱とした場合、周辺の山林からクリ属のものなどを伐採することは可能であったかと考えられる。

以上のことから、あくまでも想像の域を脱しないが、B地区平坦面地区に「ウッド・サークル」状のもの、あるいは、木柱列状の構築物があった可能性がある。 (立川トマス)



図Ⅶ-114 グライ層をもつピットの分布図

表一 1 グライ層をもつピットの一覧表

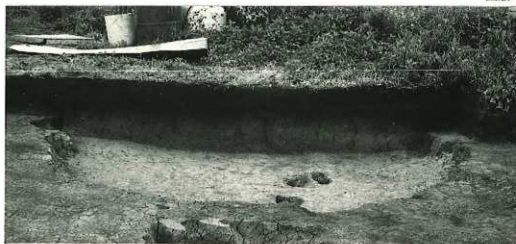
遺 構 番 号	位 置	規 模 (長軸×短軸×深さ)
B P-49	M・N-52	1.13×1.05 / 0.95×0.84 / 1.05
B P-59	K-52	2.14×1.49 / 1.42×1.19 / 1.93
B P-89	K・L-53	1.62×1.37 / 1.38×0.99 / 1.04
B P-90	L-53	1.46×1.23 / 1.04×0.92 / 1.16
B P-91	L-55	1.47×1.35 / 0.92×0.90 / 1.21
B P-94	L-52	1.38×1.24 / 0.85×0.70 / 0.84
B P-97	K-53	1.68×1.35 / 1.07×0.92 / 1.23
B P-98	L-53・54	2.14×1.35 / 1.87×0.92 / 0.97
B P-101	K-53・54	1.35×1.27 / 0.78×0.84 / 1.26
B P-124	N-53	1.32×1.27 / 1.17×1.10 / 1.10
B P-125	N-54	1.19×1.06 / 1.04×0.77 / 1.23
B P-131	L-53・54	1.33×1.25 / 1.10×1.20 / 0.94
B P-133	L・M-53	1.51×1.33 / 1.27×1.06 / 0.68
B P-168	M-51	0.88×0.89 / 1.02×0.83 / 1.02
B P-169	K・L-50・51	0.88×0.85 / 0.64×0.66 / 1.01
B P-170	J-50	0.91×0.70 / 0.80×0.64 / 1.25
B P-172	J・K-54	1.50×1.29 / 1.16×1.19 / 1.52
B P-173	J-52・53	1.33×0.97 / 0.82×0.68 / 1.57
B P-174	J-51	1.15×0.74 / 0.89×0.53 / 1.16
B P-175	M-50・51	0.77×0.55 / 0.94×0.75 / 1.09
B P-180	J-51	1.29×1.05 / 0.93×0.87 / 1.15
B P-189	M・N-52	1.23×1.14 / 0.94×0.93 / 1.11
B P-190	N-53	1.23×1.08 / 0.90×0.84 / 1.20
B P-191	O-53	1.26×1.16 / 1.19×0.96 / 1.13
B P-192	M・N-54	0.82×0.81 / 0.75×0.79 / 0.85
B P-193	N-54	1.92×1.42 / 1.91×1.25 / 1.22
B P-194	M-54	2.21×1.39 / 2.36×0.88 / 1.09
B P-195	L-55	1.17×1.01 / 0.79×0.81 / 1.22
B P-196	L・M-52・53	1.63×1.41 / 1.36×1.09 / 1.22
B P-198	M-54・55	1.62×1.28 / 1.41×1.35 / 1.21
B B-200	N-54	1.19×0.80 / 0.93×0.75 / 0.85

表-2 BF出土の土器一覧表

番号	遺構番号	分 類	番号	遺構番号	分 類	番号	遺構番号	分 類
1	BF-50	ⅡB ₁	10	BF-52	ⅣA ₁	19	BF-61	ⅣC
2	BF-50	ⅢA	11	BF-52	"	20	BF-62	ⅢB ₁
3	BF-50	ⅣA ₁	12	BF-52	"	21	BF-62	ⅣA ₁
4	BF-49	"	13	BF-52	"	22	BF-63	"
5	BF-49	"	14	BF-56	ⅢA	23	BF-63	ⅣA ₁
6	BF-51	ⅢA	15	BF-61	"	24	BF-66	"
7	BF-51	ⅣA ₁	16	BF-61	ⅣA ₁	25	BF-66	ⅣB
8	BF-51	ⅣC	17	BF-61	ⅡB ₁	26	BF-70	ⅢB ₁
9	BF-52	ⅣA ₁	18	BF-61	ⅣC	27	BF-75	ⅣA ₁

表-3 BSP出土の土器一覧表

番号	遺構番号	分 類	番号	遺構番号	分 類	番号	遺構番号	分 類
1	BSP-1	ⅣA ₁	24	BSP-22	ⅢA	47	BSP-49	ⅣA ₁
2	BSP-2	"	25	BSP-22	"	48	BSP-57	"
3	BSP-5	"	26	BSP-23	ⅣA ₁	49	BSP-57	"
4	BSP-6	"	27	BSP-24	"	50	BSP-61	"
5	BSP-7	"	28	BSP-31	ⅢA	51	BSP-61	ⅡB ₁
6	BSP-8	"	29	BSP-32	"	52	BSP-108	ⅣA ₁
7	BSP-8	"	30	BSP-34	"	53	BSP-108	"
8	BSP-10	ⅡB ₁	31	BSP-34	ⅣA ₁	54	BSP-125	ⅡB ₁
9	BSP-10	ⅢA	32	BSP-34	"	55	BSP-129	ⅣA ₁
10	BSP-10	ⅣA ₁	33	BSP-35	"	56	BSP-143	"
11	BSP-10	ⅢA	34	BSP-36	"	57	BSP-143	"
12	BSP-10	ⅣA ₁	35	BSP-36	ⅣA ₁	58	BSP-144	"
13	BSP-10	"	36	BSP-37	"	59	BSP-148	"
14	BSP-11	ⅢB ₁	37	BSP-40	"	60	BSP-148	"
15	BSP-11	"	38	BSP-40	"	61	BSP-149	"
16	BSP-12	"	39	BSP-41	"	62	BSP-153	"
17	BSP-14	ⅣA ₁	40	BSP-42	"	63	BSP-157	"
18	BSP-15	"	41	BSP-46	"	64	BSP-158	"
19	BSP-15	"	42	BSP-47	ⅢA	65	BSP-161	"
20	BSP-16	"	43	BSP-47	ⅣA ₁	66	BSP-161	"
21	BSP-17	ⅢB ₁	44	BSP-48	"	67	BSP-161	"
22	BSP-21	ⅣA ₁	45	BSP-49	"			
23	BSP-21	"	46	BSP-49	"			



BH-10 南北セクション



BH-10 東西セクション



BH-10 完掘



BH-11 調査風景

図版 2



BH-11 完掘



BH-11 石組炉



BH-11 集石



BH-12 完掘



BH-13 完掘

図版 3



BP-54 完掘



BP-54 出土の土器



BP-69 完掘



BP-69 セクション



BP-69 出土の土器

図版 4



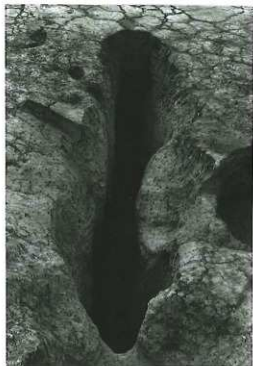
BP-55 完掘



BP-67 完掘



BP-63 セクション



BP-63 完掘



BP-71 完掘



BP-71 出土の土器



BP-78 完掘



BP-78 出土の土器



BP-78 土器出土状況

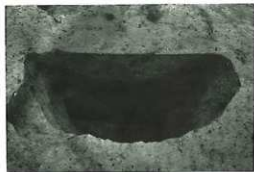


BP-78 出土の土器

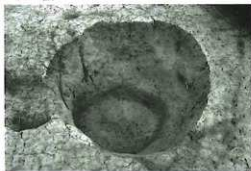
図版 6



BP-89・197 完掘



BP-94 セクション



BP-94 完掘



BP-96 セクション



BP-96 完掘

図版7



BP-95・122・123 完掘



BP-95・122・123 セクション



BP-95 土器出土状況



BP-95 出土の土器

図版 8



BP-113・156・204 完掘風景



BP-204 床面炭化材出土状況



BP-113・204 セクション



BP-133・138・142 完掘

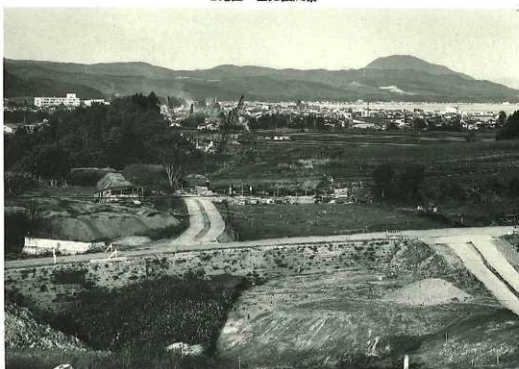


BP-45 完掘

図版 9



B地区 全完掘風景



新道4遺跡 周辺地形

VIII 新道4遺跡 C地区の調査

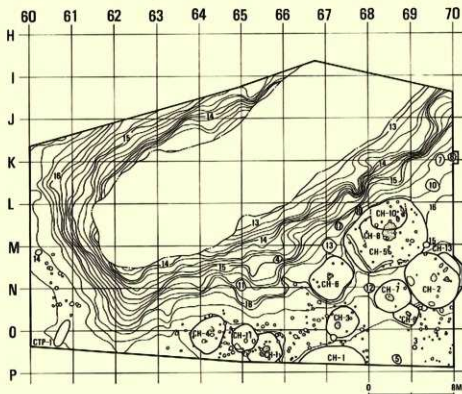
1 遺跡の概要

新道4遺跡C地区は、木古内川右岸の幾条もの湧水点をもつ小沢が入り込んだ低位海岸段丘上にある。標高17から18mの平坦部と、標高13から16mの調査区のほぼ半分をしめる沢部分からなる。沢の水量は、豊かで、隣接した数軒の家庭用の用水として利用されていた。また、現地調査期間中は、出土遺物、土壌サンプルの水洗などにもちいた。東側の沢周辺の平坦部は、調査前デントコーン畑や野菜畑として耕作されていた。

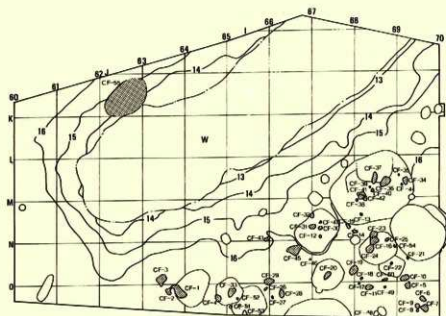
西側にはB地区、東側にはD地区がある。C地区はグリッドで60から70である。

昭和58年度の事前調査(試掘調査)によって、縄文時代の竪穴居跡と多量の遺物を出土する包蔵地が確認されていたが、今回の調査にあたって、まず、その詳細な範囲と遺物の分布を把握することが課題であった。調査区のグリッドをひとつおきに調査した結果、沢の右岸の平坦面に数軒の竪穴があることと、沢の斜面から沢底にかけて、縄文時代前期から同晩期の遺物が厚い砂礫層から多量に出土することがわかった。これらの結果をもとに、全体の調査を行った結果、平坦面からは、縄文時代前期末葉から後期後葉の竪穴住居跡、土壇、柱穴状小ピット、焼土が発見された。このうち、住居跡、柱穴状小ピット、焼土は、東側の平坦面のNからOラインに土壇は、東側斜面の縁辺部に多く発見された。

遺物は、縄文時代早期後葉から晩期末葉の土器、石器、土製品、石製品、木製品、自然遺物をはじめ自然礫を含む約250,000点が出土している。土器は、時期ごとに分布を異にしている。前期末葉の円筒土器下層式は、同期の住居跡に近接する沢の東側斜面から沢底に、後期前葉のトリサキ式、大津式が沢の西側の斜面、晩期中葉の大洞C₁式相当の土器が中央部斜面の肩部分にブロック状に集中して出土している。石器は、石やじり、ポイント、石錐、ナイフ、スクレイパー類、石斧、すり石、たたき石、砥石、台石、くさび型石器、トランシェ様石器、異形石器などがある。西側の斜面から沢底にかけて、北海道式石冠、半円状扁平打製石器が、多量に出土している。剥片石器の石材はほとんど頁岩である。土製品は、耳栓、土偶、垂飾、玉類がある。木製品は、盆状の漆器、石斧の柄、加工痕のある木材などがある。縄文時代前期末葉のものである。自然遺物は、焼土から各種の魚骨片、獣骨片が出土している。被火災住居からは、多量の炭化した住居の構造材、編物状炭化物(アンペラ)が、包含層からオニグルミの堅果などが出土している。



図Ⅶ-1 C地区遺構分布図



図Ⅶ-2 C地区焼土分布図

2 沢部分の土層断面と土層の形成について

C地区の沢は、第2段丘を切って発達する小谷の一つである(図I-3)。沢幅約15m、全長約100mで、沢の横断形は上～中流部でL、下流部でJを呈する。沢頭には湧水がある。沢は、発掘範囲(上流部)でみる限り、第2段丘を覆う「ローム」層を切っているが、「ローム」層下位の段丘堆積物まではほとんど切っていない。

沢はある程度堆積されており、L-66では図VIII-82に示されるような土層断面がみられた。断面は腐植土層と礫層との互層から成っている。腐植土は粘土質であるが、灰色の硬質頁岩やチャートの角～円礫、炭化木片を含む層が多い。礫層は灰色の硬質頁岩やチャートの角～円礫から成り、腐植土中の礫層と同じである。礫層中にも炭化木片を含むことがある。腐植土・礫互層の下位は礫混りの砂層である。砂は分級の良い亜角～円状の中粒～粗粒砂で、チャートを主とする、海成要素の多い段丘堆積物である。

このような土層の形成には人為的な要因が大きいと考えられる。この沢の沢壁斜面の地山は「ローム」であって礫層の露出はないこと、段丘堆積物のチャートの砂が腐植土層や礫層中に含まれていないことから、土層断面中の礫は沢部分以外の他の地域から人為的に持たせられたと考えられる。腐植土層の起源についても、礫層堆積後その場での土壌化も考えられるが、腐植土と礫がいっしょに沢部分に再堆積した可能性もあるであろう。

遺物は、下位から上位へ向ってより新しい時期のものが出土している(図VIII-82)。層準によっては時期が重複するが、大きく逆転することはない。礫が人為的に持たせられたにしろ、沢形成後沢内部は安定した堆積場であり、順次遺物包含層が形成されていったものと思われる。

(熊谷仁志・花岡正光)

3 遺構

(1) 住居跡(図VIII-1)

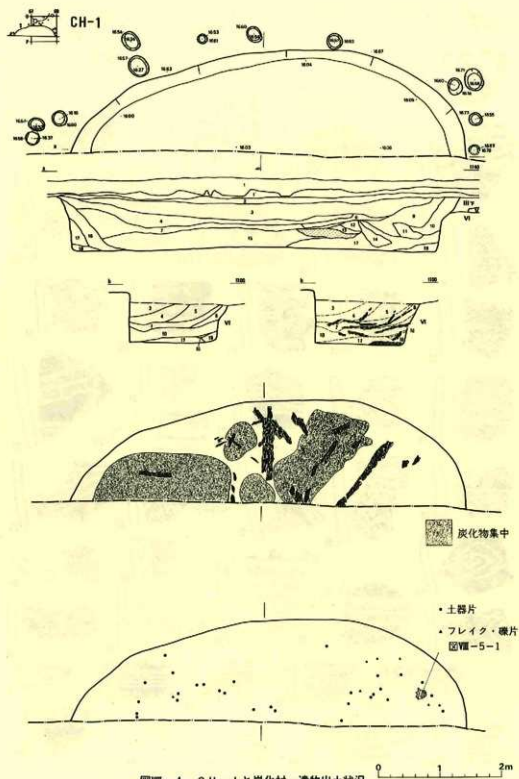
CH-1(図VIII-4)

位置 O-66・67

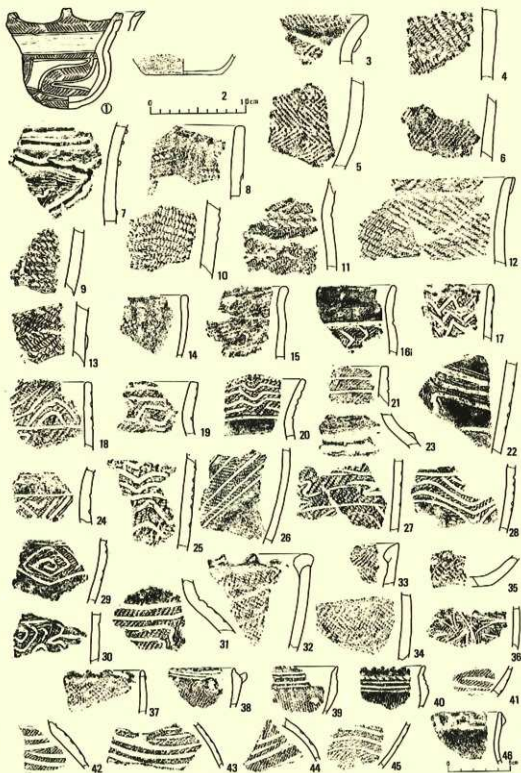
規模 $(6.33) \times (1.68) / \times (1.56) / 0.94$

特徴 第III層下部で確認した。平面形は、大部分が調査区外に広がり全体の約3/5を検出したにすぎず詳細は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床は固くしまり平坦である。覆土8層上面から床面にかけて、炭化物が検出されている。柱材・梁と思われる棒状、割板状の大形のものは覆土の中部で、壁側から中央に向かってやや傾斜し、放射状に検出された。屋根材と思われる小枝状、萱状のものは、東側床面直上から床面にかけて検出された。覆土6～18層は、東壁側を中心に不規則な堆積を示している。炭化物出土状況と覆土の堆積状態を総合すると、火災によって屋根材と思われる小枝状・萱状のものが床面に焼け落ち、その上に屋根を覆っていた土が堆積し、最後に柱材・梁材が焼け落ちたと思われる。柱穴は竪穴外の周辺から12箇所確認されている。いずれも掘り込みの浅いものである。

覆土は、1：黒色土(第II層) 1'：黒色土(第II層の上面、攪乱を受けていない第I層)、2：赤褐色土(第II層)、3：暗褐色土、4：黒褐色土、5：褐色土(ローム粒が混じる)、6：



図Ⅶ-4 CH-1と炭化材・遺物出土状況



図Ⅷ-5 C H-I 出土の土器

黒褐色土（ローム粒が混じる）、7：褐色土（5層と同質、上面に炭化物が層をなし出土している）、8：暗褐色土（ローム粒が混じる）、9：暗黄褐色土（多量のローム粒と炭化物が混じる）、10：暗黄褐色土、11：黄褐色土、12：黒褐色土（多量のローム粒が混じる）、13：褐色土（ローム・ブロックが混入）、14：暗黄褐色土（第9層と同質）、15：褐色土（第5層と同質、多量の炭化物が混じる）、16：黄褐色土、17：褐色土（炭化物が混じる）、18：黄褐色土（壁崩落土）

尚、覆土の中位に多量の焼土が確認されている。火災の際に屋根を覆っていた土が焼けて生じたものと思われる。

遺物 床面からⅣ群C類（1）の小型土器が出土している。

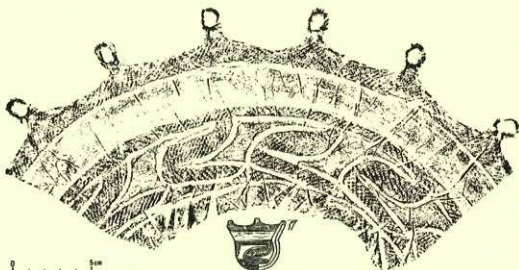
（土器） 覆土からⅢ群A類（3～7）、Ⅲ群B₁類（8・9）、Ⅲ群B₂類（11）、Ⅳ群A₁類（10・12・13）、Ⅳ群A₂類（14～31）、Ⅳ群C類（32～35）、Ⅴ群A類（36・37）、Ⅴ群B類（2・38～40）、Ⅴ群C類（41～46）が出土している。3は、太い貼付帯に縄の圧痕がある。7は、結束羽状縄文で、細い粘土紐の貼付けがある。9は、数条の縄線文が施され、沈線が引かれている。11は、頸部に2条の縄線文がある。12は外反する口縁部に帯状の貼付帯をもつ。20・24・28・31は、頸部に無文帯をもつ。22は、櫛状工具の条線文を沈線で縁どった文様が施されている。23は、無文。31は有文の壺形土器である。32・33の口唇部は切り出しナイフ形で貼付けによる2個一対の突起がある。36は、沈線によって、三叉文的な磨消文様を施している。37は、わずかに内湾する小波状口縁の深鉢で、体部は斜行縄文である。38～40は浅鉢形土器、口唇部は刻み目による小波状口縁を呈する。40の頸部に引かれた3本沈線の上端に連続刺突が加えられている。41～45は、壺形土器である。同一個体の可能性もある。胴部には、横位連続工字文が描かれている。46は、壺形土器の口縁である。口縁部に2個一対の粘土粒が貼付けられ、1条の沈線が施れている。

（石器） 石鏃（1・2）、ポイント片（3）、つまみ付ナイフ（4・5）、スクレイパー（6・7）、石斧（8）、台石（9）が出土している。8は、CH-5覆土出土の石斧（12）と接合した。床面からのものはないが、4・8は、覆土18層から出土しているため、本竪穴に伴った可能性が高い。

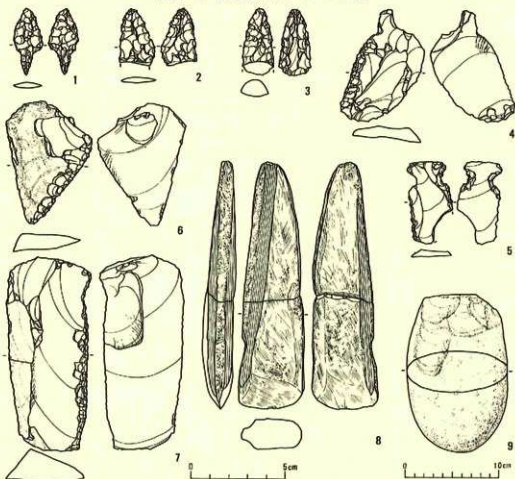
時期 縄文時代後期後葉

備考 床面から採取した炭化物の¹⁴C年代測定の結果は、次の通りである。

測定結果 KS U-980 3,240±90 y. B. P.



図Ⅷ-6 拓本展開(図Ⅷ-5-1の土器)



図Ⅷ-7 CH-1出土の石器

CH-2 (図VIII-8・9)

位置 M・N-68・69・70

規模 5.45×4.26/5.12×3.89/0.70

特徴 III層下部で確認する。隣接するCH-7、CH-13を壊して構築されている。平面形はほぼ楕円形であるが、北側の壁が内側に張り出している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炭化物が覆土4層から床面にかけて検出されている。柱材、梁材と思われる棒状・割板状の大形のものは、覆土5層以下に多く見られ、壁側から中央部に向つてやや傾斜し、放射状に検出された。屋根材と思われる葺状、小枝状のものは、竪穴西側の、床面直上から床面にかけて多く検出されている。覆土の堆積状態は壁周辺で不規則である。炭化物出土状況と覆土の堆積状態を総合すると、火災によって屋根材と思われる小枝状、葺状のものが床面に焼け落ち、その上に屋根を覆っていた土が堆積し、最後に柱材、梁材が焼け落ちたものと思われる。壁際からビット2個が検出されている。規模はP-1、0.65×0.34×0.20、P-2、0.98×0.55×0.20である。平面形は楕円形である。墳底から屋根材と思われる葺状の炭化物が見られた。溝状の浅いビットが北側壁の張り出し部分両側から検出されている。規模は0.70×0.20×0.10~0.20である。溝状ビットは出入口部の土留のために板状、棒状のものを埋め込むために掘られたもので張り出し部分は、出入口部分と思われる。柱穴は9個検出された。竪穴内で4本の支柱穴からなる台形の配列が確認された。柱穴5は上面を焼土(HF-2)が覆っていたが、柱穴内から採取した炭化物の¹⁴C年代測定の結果、床面出土の炭化物と同様な結果を得ている。地床炉(HF-1)が竪穴の中央よりわずかに北よりにある。HF-2焼土は火災の際に生じたものと思われる。

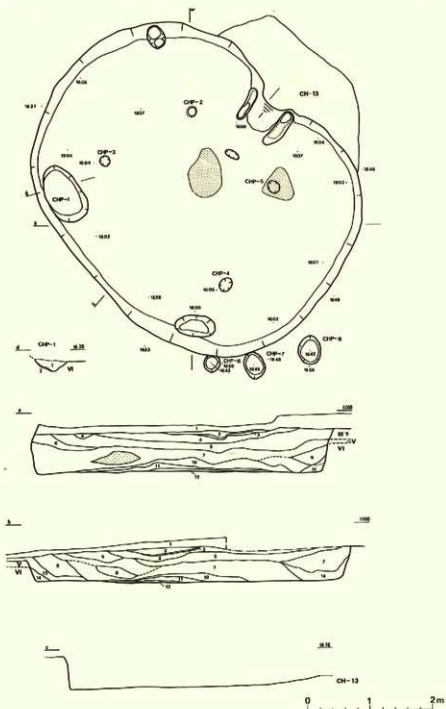
覆土は、1:黒色土(耕作土)、2:黒色土(第II層上面、攪乱をうけていない第I層)、3:赤褐色土(第II層)、4:褐色土(第III層下部、炭化物が若干混じる)、5:黒褐色土(ローム粒が混じる)、6:褐色土(ローム粒が混じる)、7:褐色土(多量のローム粒が混じる)、8:黄褐色土、9:暗褐色土(ローム粒が混じる)、10:暗褐色土(多量の炭化物、少量のローム粒が混じる)、11:炭化物層(焼土=暗赤褐色土を含む)、12:暗黄褐色土(炭化物を含む)、13:褐色土(第7層と同質)、14:黒色土(若干の炭化物が混じる)

遺物

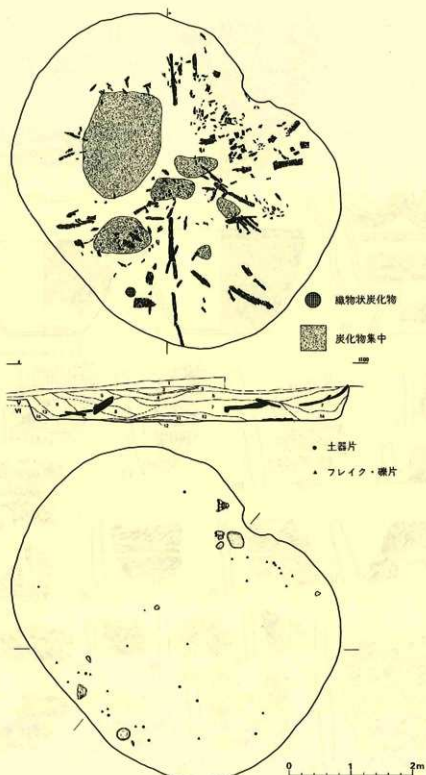
(土器) 床面からIV群C類(3~5・55)が出土している。覆土からはII群B類(8・9)、III群A類(1・10~16・18)、III群B₁類(17・19~21)、III群B₂類(22~26)、IV群A₁類(2・27~29)、IV群A₂類(30~52)、IV群B類(53・54)、IV群C類(55~59・66)、IV群B類(6・7・58~65) 8は口縁部破片である。口頸部に数条の縄による押圧がみられ、胴部には、撚糸文が施されている。10~12は、縄による馬蹄形圧痕文と隣り合う撚り方向の異なる縄を3本一組で押捺した文様を施している。12は、馬蹄形圧痕を押圧する時についたと思われる爪痕も見られる。13は、竹管状工具による連続刺突である。17~19は複節の地文上に沈線文が描かれている。22は、口唇上に縄線による圧痕がみられ、口縁部は切り出しナイフ状を呈している。23は、2頂の突起をもつ口縁部破片で、口縁部地文上に2条の縄線文が施されている。



CH-2



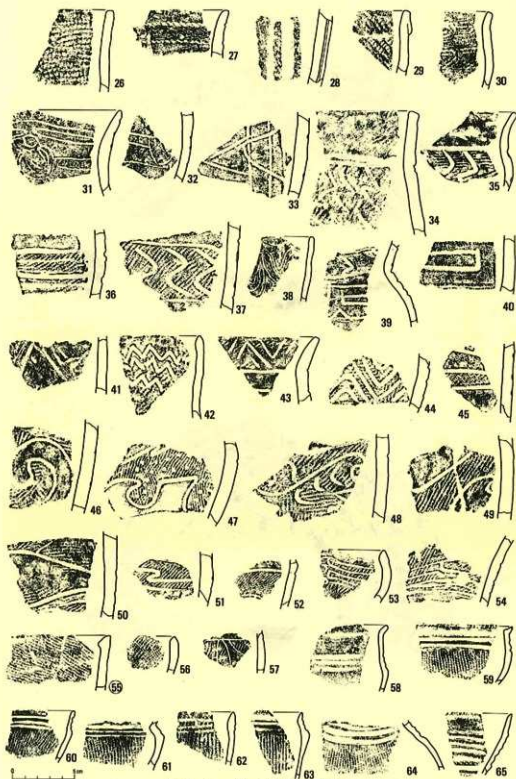
図Ⅷ-8 CH-2



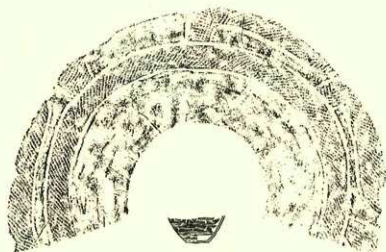
図Ⅶ-9 CH-2の炭化材・遺物出土状況



図Ⅶ-10 CH-2出土の土器(1)

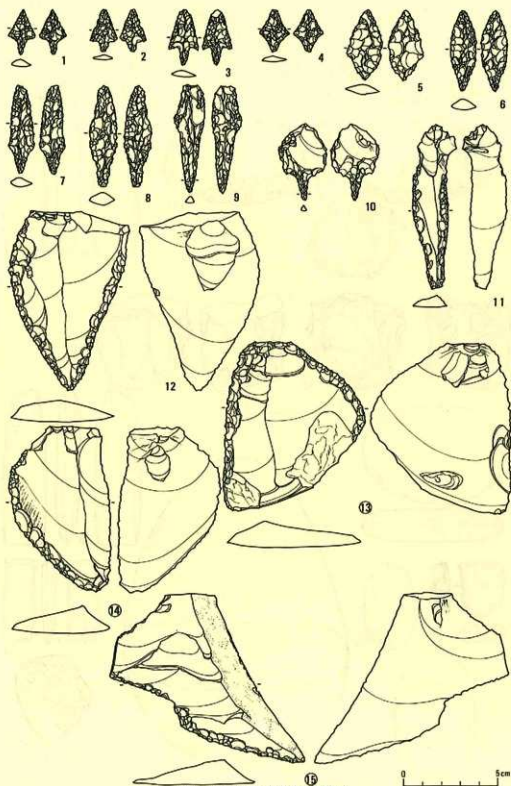


図Ⅷ-11 CH-2出土の土器(2)

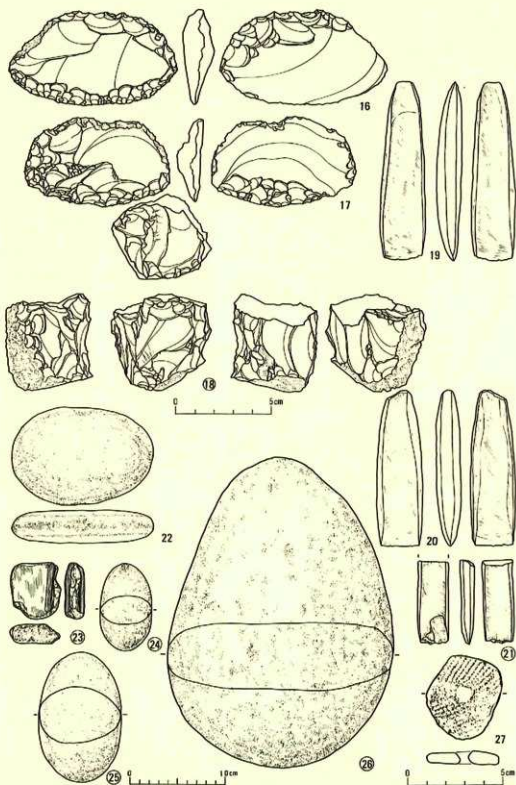


0 5 10cm

図Ⅷ-12 拓本展開（上：図Ⅷ-10-3，下：図Ⅷ-10-5の土器）



図Ⅷ-13 CH-2出土の石器(1)



図Ⅷ-14 CH-2出土の石器(2)

28は、縄文のある縦位の貼付帯があり、その側縁を太い棒状工具で縁取っている。31・32は、無文地に細く鋭い沈線文を描いている。43は、口唇に調整が見られ角形である。口頸部・口縁部に調整がみられ、頸部に磨消した無文帯をもつ。胎土は、砂・礫粒を含み、焼成は良い。内外の器面調整は丁寧である。3は、5弁の波状の台付土器。羽状に縄文を施し、沈線で区画している。調整は丁寧に光沢をもつ。4は、口縁はほぼ平縁である。口唇部に等間隔に9個の2頂の小さな刻み目をもつ突起がある。口縁部は切り出しナイフ状である。底部は揚げ底。内面調整は粗雑である。5は、沈線で区画し、斜行縄文を施している。胴部には4つのカギの手状の磨消文が見られる(図-VIII-12一下参照)。66は注口部である。注口基部に沈線によって区画された磨消文がある。下半部に炭化物の付着がある。57は、胴部破片である。細かな地文上に曲線的な沈線が描かれている。V群A類の可能性もある。6・7は、覆土上面で一括出土したものである。いずれも胎土に砂礫を含み、焼成は悪く脆弱である。強く内湾した幅の狭い口頸部は細い数条の沈線から成り、沈線内に刺突が加えられ、口唇部には刻み目が施されている。62・63は、口唇部に細かな刻み目をもち、口縁内面に1条の沈線が加えられている。

(石器) 床面からスクレイパー(13・15)、コア(18)、石斧(21)、たたき石(23・24)、台石(25)、石皿(26)があたかもセット関係を示す状態で出土している。覆土からは、石鏃(1～7)、ポイント(8)、ドリル(9・10)、スクレイパー(12・11・16・17)、石のみ(19・20)、すり石(22)、有孔土製円盤(27)が出土している。23は緑色泥岩の擦切残片を再利用している。27は地文のみで時期不明である。

時 期 縄文時代後期後葉の段階、CH-1と同時期と思われる。

備 考 床面、CHP-5から採取した炭化物の¹⁴C年代測定の結果は次の通りである。

床面 KSU-981 3,280±55 y. B. P.

CHP-5 KSU-982 3,390±150 y. B. P.

CH-3 (図VIII-15)

位 置 N・O-67

規 模 3.50×2.97/3.30×2.45/0.16

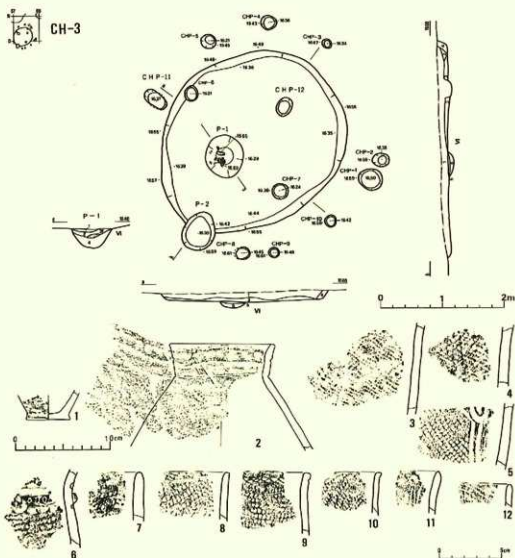
特 徴 第V層上面で確認する。平面形は卵形、断面形は皿状である。壁は緩やかな立ち上りを見せている。床は平坦で、固く締っている。ビットは2個検出されている。P-1は竪穴の中央よりわずかに南側にある。覆土は、焼土層と焼土・炭化物が混じる層がある。壁面は、加熱を受け、暗黄赤褐色でかなり固く締っている。P-2は竪穴南側の先端部にある。所謂「先端部ビット」と思われる。規模は0.63×0.50×0.29である。柱穴は12個検出されている。ほとんどのものは、竪穴外にあり、柱穴3は長軸上にある。柱穴2と5、10と11は長軸に対し左右対称の位置にある。

覆土は、1：褐色土(炭化物混入)、2：暗黄褐色土(ローム粒、炭化物が混入)、3：黄褐色土(ローム・ブロックの混入)、4：黄褐色土(第IV層・壁崩落土)、5：暗黄褐色土(P-1覆土、ローム粒、炭化物が多量に混入)、6：褐色土(P-1覆土、炭化物混入)

P-1の覆土は、1：褐色土（堅穴覆土1）、2：暗黄褐色土（堅穴覆土2）、3：暗黄赤褐色土（焼土）、4：褐色土（炭化物が混入）

遺物 すべての覆土からの出土である。

（土器）Ⅲ群A類（1・3・4）、Ⅲ群B₁類（5・7・8）、Ⅲ群B₂類（6・9～12）、Ⅳ群A類（1）、1は、わずかに揚げ底を呈す。3は、結束羽状縄文である。5は、複節の斜行縄文でその上に比較的太い沈線文がある。胎土に少量の砂粒を含む。硬質な感じを呈す。6は砂礫を多量に含む。体上部に円形刺突文が施された細い粘土紐を貼付し、管状刺突具でその上下に横走する連続刺突を加えている。地文は不規則な横位の縄文である。11・12は、同一

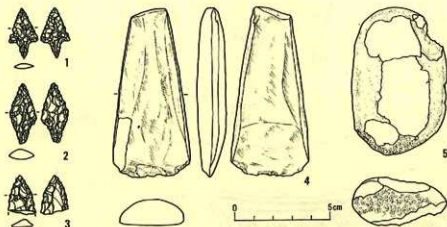


図Ⅶ-15 CH-3と出土土器

個体と思われる。口縁部は緩やかに外反し、口縁付近には縦位に撫条文が施れている。2は、壺形土器である。覆土1層上面で出土している。頸部は1条の細い沈線で区画され、口縁部には、粘土接合部分に1条の沈線を施し、あたかも折返し口縁の様な効果を出している。胴部には細かな斜行縄文が施され、その上から細い曲線の沈線文を描いている。胎土は、砂礫粒を多量に含み、焼成は悪く、脆弱である。

(石器) すべて覆土から出土している。石鏃(1~3)、石斧(4)、たたき石(5)。

時 期 縄文時代中期中葉かと思われる。



図VIII-16 CH-3出土の石器

CH-4 (図VIII-17)

位 置 N・O-63・64

規 模 $3.70 \times 2.99 / 3.46 \times 2.81 / 0.19$

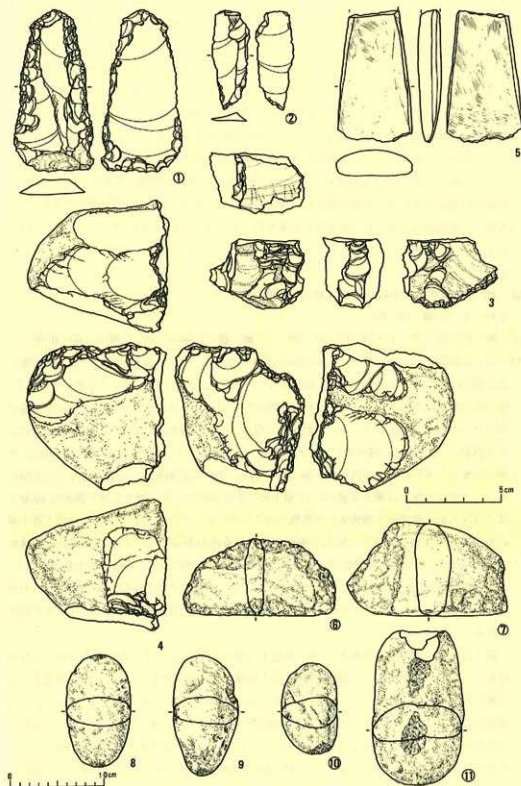
特 徴 第V層上面で確認する。平面形は卵形、断面形は皿状である。壁は緩やかな立ち立りを見せ、床は、ほぼ平坦で固い。竪穴の長軸線上の中央よりやや北側に炉がある。炉は一辺が0.5mの方形のもので、それぞれ向い合う辺に一個体分の土器片とすり石・たたき石・楕円形の自然礫を配置している。焼土の厚さは5cm程度である。炉の周辺には固い黄褐色ロームの貼床がみられ、炭化材、炭化したクルミの堅果なども検出している。

ピットは、竪穴内2個、竪穴外1個が検出されている。いずれも径0.40mほどで、掘り込みは比較的浅いものである。柱穴は23個が竪穴内外から検出されている。柱穴6と5は、ほぼ長軸上にあり、主柱穴4と12、3と14は長軸に対して左右対称の位置にある。本竪穴は外柱穴と思われる。

覆土は、1：黒褐色土(攪乱)、2：暗黄褐色土(細かなローム粒を多量に含む、炭化物も少量混入している)。土器片石組炉、1：暗赤褐色土(=焼土)、2：黄褐色土(第IV層)。

遺 物

(土器) III群A類(2・3)、III群B₁類(5)、III群B₂類(6)、IV群A₁類(7・8)、IV群B類(9)、V群B類(10~12)、2は、細い粘土紐の上に縄を圧痕し、半截竹管状工具によ



図Ⅷ-18 CH-4出土の石器

る連続刺突が施されている。3は、切り出し状の口縁の端に縄による押捺がある。1は、低い5つの山形口縁をもち、頸部がくびれた深鉢である。口縁部直下に2条の縄線文がある。地文は、不規則な斜行縄文である。調整は内外とも粗雑である。胎土は、砂礫を多量に含む脆弱である。焼成は、比較的良い。5は、複節の斜行縄文上に浅い2条の沈線が施されている。胎土は、砂礫を多量に含む、焼成は良い。6は、口縁部に縄線文が施されている。8は、調整された無文地に粘土紐を貼付し、その上端に円形刺突文を加えている。貼付帯を縁取るように縄線文が施されている。器面内外の調整は丁寧で胎土に砂礫を多量に含む、焼成は良くない。10は、斜行縄文が施され、胎土は、砂礫と白い針状の物質が含まれている。11は、口唇の内側に1条の浅い沈線が施され、頸部は無文帯である。12は、胴部破片である。

(石器) 床面から炉石として使用されたすり石(6・7)、たたき石(9)、くぼみ石(11)出土している。覆土からは、スクレイパー(1)、Uフレイク(2)、コア(3・4)、たたき石(7・8)が出土している。

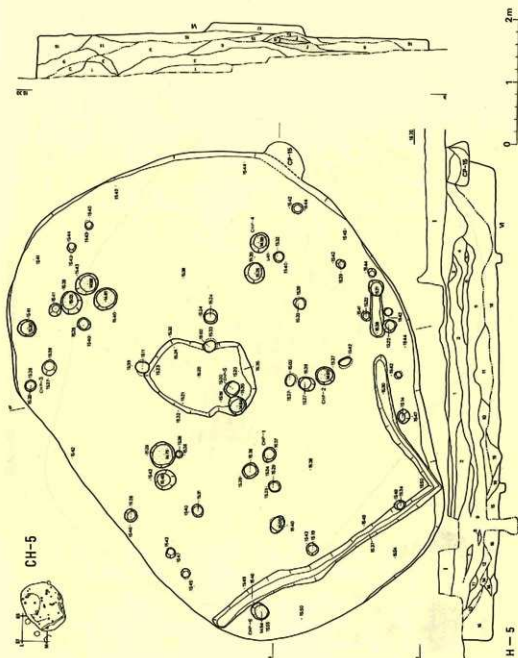
時 期 縄文時代中期後葉(大安在B式)と思われる。

CH-5(図Ⅷ-19・20)

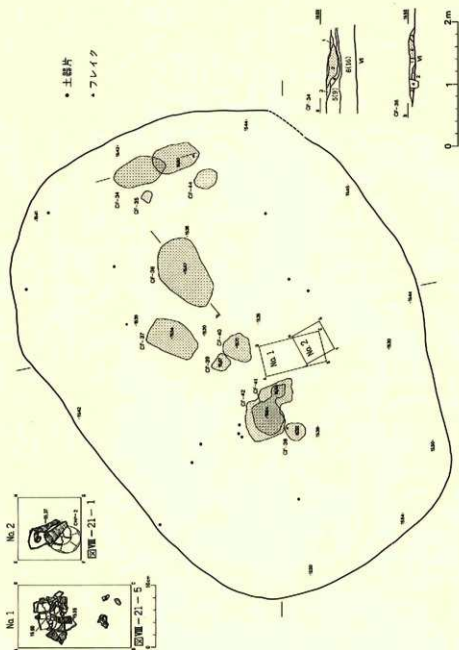
位 置 K-68・69、L・M-67・68・69 規 模 7.96×5.86/7.90×5.60/0.90

特 徴 第Ⅲ層下部で確認する。平面形はほぼ卵形である。竪穴の西側にCH-8・10が覆土第3層を浅く掘り込んで構築され、切り合っている。また西側の壁を切ってCP-5がある。壁はほぼ垂直に立ち上っている。床面は平坦で固く締っている。竪穴のほぼ中央に不整楕円形のビットが掘り込まれている。北側床面の壁に沿って、幅0.30m深さ0.10~0.12mほどの平面形が「L」字状の溝がある。焼土は覆土、床面を含めて11箇所検出されているが、本竪穴の焼土と思われるものはCF-36のみである。竪穴の長軸線上、中央部寄りやや北側にある。その他の焼土は覆土9層から10層上面で検出されている。覆土9層下部から10層上部で円筒土器上層式が1個体潰れた状態で出土している。これらのことから、円筒土器上層式の時期にくぼ地を利用して竪穴が構築された可能性がある(セクション図の一点破線部分)。柱穴は竪穴内で46個検出されている。径が0.35m、深さ0.50mほどの大形のものと、径0.20m、深さ0.20mほどの小形のものとがある。本竪穴の主柱穴は、その配列から大形のものが伴うと思われる。小形のものは、覆土中位の円筒土器上層式の竪穴に伴った可能性がある。

覆土は、1:黒色土(耕作土)、1:黒色土(ローム粒混入)、2:暗褐色土(ローム粒が混じる)、3:暗黄褐色土(多量のローム粒と少量の炭化物が混じる)、4:暗黄褐色土(第3層と同質、黒味が強い)、5:黄褐色粘土(ローム塊の混入)、6:暗黄褐色土、7:暗黄褐色土、8:暗黄褐色土(暗赤褐色土=焼土が少量混じる)、9:暗黄褐色土(ローム粒・炭化物が多量に混入、円筒土器上層式が出土している)、10:暗黄褐色土(多量のローム粒・炭化物、暗赤褐色土=焼土が混じる)、11:暗黄褐色土(大小のローム塊、少量の炭化物が混じる)、12:暗黄褐色土(ローム粒・黒色土粒・炭化物が混じる)、13:黄褐色粘土(壁の崩



図面-19 CH-5



図面-20 CH-5の焼土と遺物出土状況

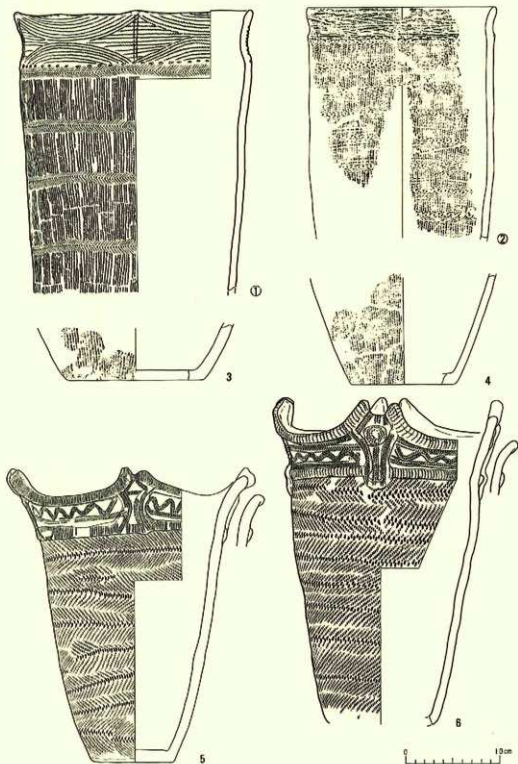
落土か?)、14:暗黄褐色土(径10~20mmのローム塊の混入)、15:黄褐色土(第14層と同質だが黒味が強い)、16:暗黄褐色土(炭化物・ローム粒が混じり、円筒土器下層d式が出土)。

(焼土覆土) CF-34 1:暗黄褐色土(CH-5覆土第3層)、2:暗赤褐色土(=焼土)
3:炭化物層、4:暗黄茶褐色土(CH-5覆土第9層)、5:暗黄褐色土(CH-5覆土第9層)、6:暗黄褐色土(CH-5覆土第16層)

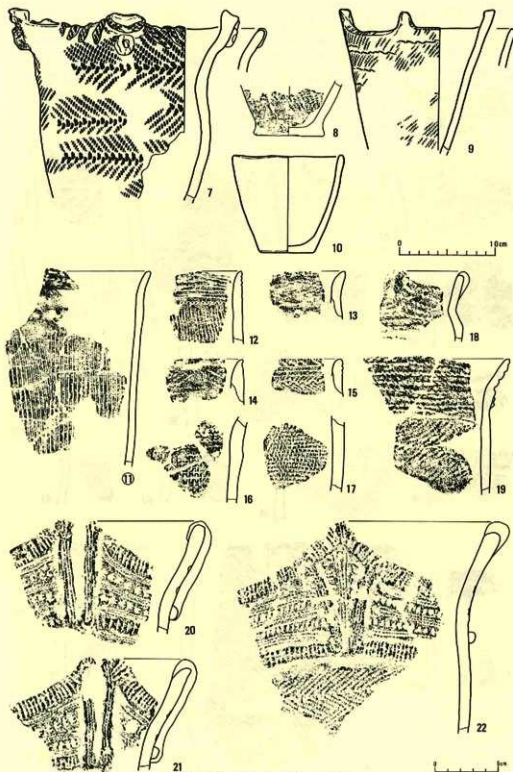
CF-36 1:暗黄褐色土(CH-5覆土第16層)、2:暗黄褐色土(=焼土)、
3:暗黄褐色土(CH-5覆土第16層)、4:黒褐色土(小ビット状遺構)

遺物 床面からII群B₂類(1・2・11)が出土している。

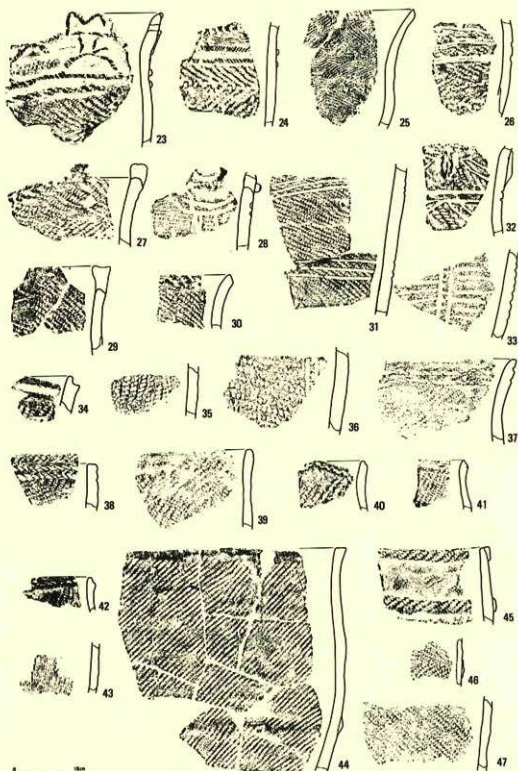
(土器) II群B₂類(1~4・11~19)、III群A類(5~9・20~33)、III群B₁類(34~36)
III群B₂類(37~43)、III群B₃類(44)、IV群A₁類(45~47)、IV群A₂類(48~58)、IV群C類(59)、1は、口縁に緩やかな4つの隆起部をもち、口頸部の比較的幅の広い筒形土器である。頸部と体部との境に刺突文が施されている。無文地の口縁部文様帯に縄線文による弧状とかかるい山形隆起部に対応して、2条の縄線文がある。隆起部から垂れ下る2条の縄線文が加えられている。体部には、縦位の燃糸文施文後、数段の結束羽縄文を施している。胎土は、極めて細かい白色の針状の混入物がみられる。調整は、内外とも丁寧で、ともにわずかに炭化物の付着が認められる。2は、平縁で口縁部の幅が狭くやや外反する筒形土器である。口頸部文様帯と体部との境に連続刺突文が加えられている。また口頸部にも部分的に縦位2列の小さな円形刺突文がある。口縁には縄線文が施されている。体部には、燃糸文を施文した後結束羽状縄文が施されている。胎土に白色の針状の物質が見られる。10は、底部破片である。11は、頸部が無文帯である。12~14は、幅の狭い口縁部に燃糸文が施されている。16・17は、胴部に多軸の原体による燃糸文をもつものである。16の口縁部には縄線文がある。18・19は、同一個体と思われる。口縁に突起をもち口縁部は外反する。無文地に7条の縄線文が施されている。胎土に白色の針状の物質がみられる。5・6は、先端が2頂に分かれた4つの弁状突起をもつ筒形土器である。口縁部と体部の境いには幅広い貼付帯をもち、口縁部の貼付帯上に縄の圧痕が施されている。文様帯内は、無文地に撚りの異なる3本単位の縄を上下に1条その間には波状に押圧している。体部から底部にかけて、結束羽状縄文が施されている。20は、縄の先端部、21・22は、半截竹管状工具による馬蹄形の刺突文がある。7は、4つの突起部をもち、直下には、ボタン状の貼付がある。口唇部には、短い粘土紐が貼付されている。体部には、粗い結束羽状縄文が施されている。23・24は、縄の圧痕のある細い粘土紐を貼付けたもので、23には管状工具、24には縄の先端で馬蹄形圧痕文が加えられている。25は、口唇部に縄圧痕が見られる。26・28・31~33は、沈線文が加えられているもので、28には、ニシンの魚骨回転文が施されている。27・29・30は地文のみのもので、30には複節の原



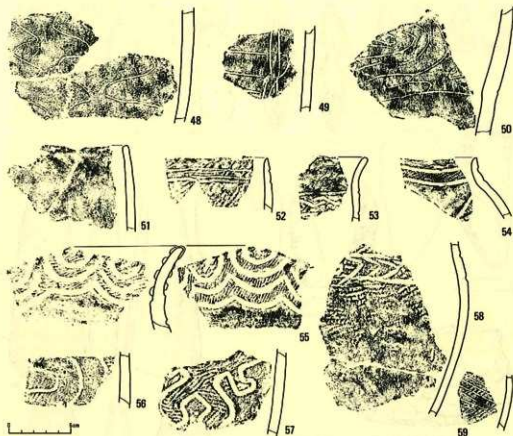
図Ⅷ-21 CH-5出土の土器(1)



図Ⅷ-22 CH-5出土の土器(2)



図Ⅷ-23 CH-5出土の土器(3)



図VIII-24 CH-5出土の土器(4)

体が用いられている。35・36は、複節の原体によるものである。37・38・40～42は、口縁部に1～2条の縄線文がある。43は、条線文である。44は、胴部に貼付帯が施されたのち、器面に縄文が施されている。45～47は、いずれも砂粒を多量に含んでいる。48～50は、無文地に細い沈線文が施されている。51は、無文である。55は外反する口縁部の隆起部に細い粘土紐を貼付し、その間に沈線を加えている。59は、地文上に細い沈線文を加えている。

(石器) 床面から出土したものはない。石鏃(1・2)、ポイント(3)、つまみ付ナイフ(4)、スクレイパー(5～7)、コア(8・9)、石斧(10～12)、すり石(13～16)、たたき石(17・18)、くぼみ石(19)、礫石器片(20)、砥石(21)、石皿(22)。

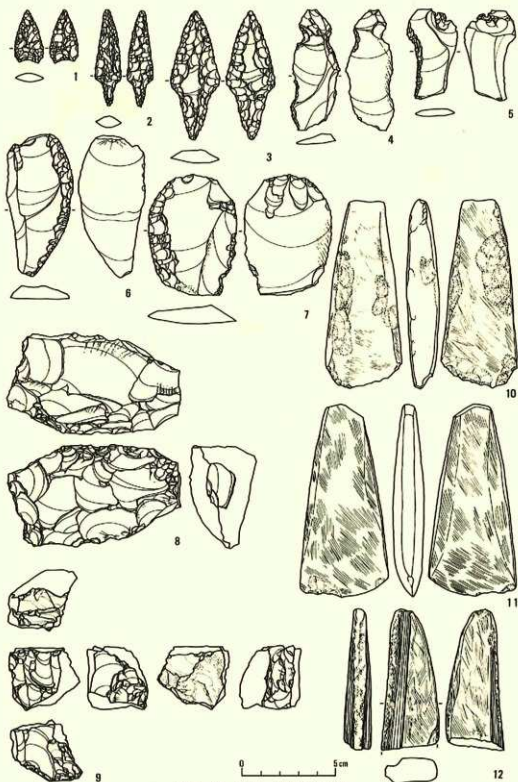
12は、CH-1の覆土18層から出土したものと接合した。12・13は、北海道式石冠である。

19は、CH-4覆土出土したものと接合した。

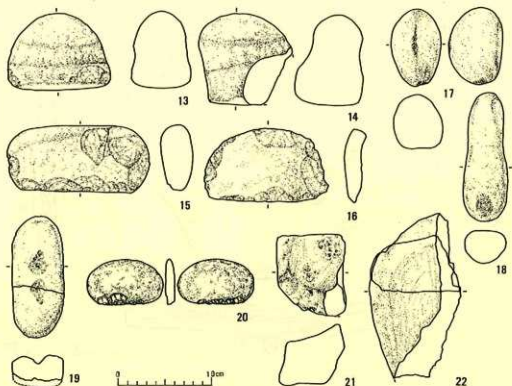
時期 縄文時代前期末葉(円筒土器下層d式の古手)の時期と思われる。なお住居の廃棄後その窪みを利用して円筒土器上層a式の時期に住居として再利用した可能性が高い。

備考 床面から出土の炭化物の¹⁴C年代測定結果は次の通りである。

測定結果 K S U-984 3,250±160 y. B. P.



図Ⅷ-25 CH-5出土の石器(I)



図Ⅷ-26 CH-5出土の石器(2)

CH-6 (図Ⅷ-27)

位置 M・N-66・67

規模 $3.95 \times 3.57 / 3.60 \times 3.00 / 0.56$

特徴 第Ⅴ層上面で確認する。平面形は、南側の一部が風倒木のため攪乱されているが、ほぼ隅丸方形と思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。竪穴のほぼ中央部で柱穴を覆った地床炉が検出されている。柱穴は竪穴内で6個検出されている。比較の深いものが多いが、その配列に規則性を見いだすことが出来なかった。

覆土は、1：黒褐色土、2：黒褐色土(多量の炭化物が混入)、3：暗黄褐色土(径8～10 mmほどのローム粒が混入、少量の炭化物も混入)、4：暗褐色土(多量の炭化物が混入)、5：黒褐色土(径5 mmほどのローム粒が混入、暗示褐色土=焼土が混入する)、6：暗黄褐色土(ローム粒混入)、7：褐色土(少量の炭化物混入)、8：黄褐色土、9：黒褐色土(風倒木による攪乱層と思われる)、10：暗黄赤褐色土(=焼土、炭化物層)、11：暗黄褐色土(第Ⅲ層下部、第Ⅵ層の崩落土)、12：黒褐色土

遺物 床面から出土した遺物はない。

(土器) Ⅲ群A類(1・2・6～9)、Ⅲ群B₁類(3・10～12・14・30～34)、Ⅲ群B₂類(5・15～29)、Ⅳ群A₁類(35・36)、Ⅳ群A₂類(37～39)

1は、貼付縮をもつ山形口縁で、口唇部に縄による刻み目がある。体部に斜行縄文が施さ

